

I 平成23年度「共通教育実施機構会議」活動の総括

共通教育実施機構会議常任委員会

1. 共通教育実施機構会議及び常任委員会について

(1) 共通教育実施機構会議

共通教育実施機構会議は、計9回(5月、7月、8月、9月、10月、12月、2月、3月×2)開催された。

第1回(5月10日)会議では、昨年度の総括を受け、本年度の活動方針を提示し、了承を得て、本格的に始動した。

本年度は、①授業担当体制の原案策定を6月中に行う(カリキュラム等編成部会)、②「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」「学問基礎論」の授業改善策の策定(カリキュラム等開発部会)、③第Ⅱ期教育力向上3ヶ年計画の策定に協力し、その取り組みを先導する(FD部会)④「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」「学問基礎論」の分析・評価、⑤協働実践力・国際性・表現力・コミュニケーション力育成」に重点を置いた授業科目における学生の能力評価・検証を試行、⑥「授業改善アクションプラン」の改善案を策定・試行する(自己点検・自己評価部会)⑦「パイプライン」編集・発行形態の検討・改善(広報部会)、以上の7つを重点事項として、活動した。

①の授業担当体制については、原案策定は8月であり、当初目標から遅れが生じたが、懸案であった外国語分野の基本担当コマ数の調整は、人文学部の協力を得て解決することができた。その他、授業改善アクションプランの改善策の試行、パイプラインの発行方法の変更など、各部会活動の結果、次年度に向けた実施体制・方法が整備された。

(2) 共通教育実施機構会議・常任委員会

常任委員会は、共通教育実施機構会議の議題整理及び事前検討を中心に計17回開催された。予算や専決事項の審議と共に、各部会等における活動状況の報告も行われ、機構会議活動全体の状況把握にも努めた。

2. 5つの部会の取組について

(1) 5つの部会の取組の成果と課題

今年度も、「カリキュラム等編成部会」、「カリキュラム等開発部会」「自己点検評価部会」、「FD部会」、「広報部会」の5つの部会を編成し、それぞれの領域における機構会議全体の取組みまとめや分科会活動への支援を行った。

①「カリキュラム等編成部会」は、委員の方々の献身的な努力によって、平成24年度のカリキュラム編成作業を無事に終えることができた。今年度のカリキュラム編成における特筆すべき事項は、人文学部担当分における外国語分野と人文・社会分野との担当割合(コマ数)の変更である。これは、教員減に伴う外国語担当教員の負担増に対応するものであったが、運営費交付金の削減が今後も継続し、さらにはこれまで以上の削減があれば、今回のような部分的な対応では対応しきれない状況に陥る可能性があり、担当体制の根本的・全体的な見直しも必要になってくるであろう。

また、人文分野分科会より意見のあった物部キャンパスでの開講科目の見直しについては、今後ワーキンググループを編成し検討することとなった。

- ② 「カリキュラム等開発部会」は、環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発事業」『環境人材育成のための社会協働教育プログラムの開発』（平成 20 年度採択）に基づく教育プログラムを引き続き実施した。
また、地域人材育成に関する教育プログラム及び協働実践に関する授業の開発に取り組んだ。
- ③ 「自己点検評価部会」は、「授業改善アクションプラン」の改善・試行に関しては、前年度の外部評価も参考にしながら、新しい形式の授業アンケート案を作成し試行を行い、また、総合教育センター大学教育創造部門と協力して、コンサルテーション方式による試行を行った。そして、年度末にはその検討会を実施した。
初年次科目に関する 3 年生アンケート分析は、データを整理し、関係分科会での議論を始めたが、分析・評価をまとめるには至らなかった。次年度のなるべく早い時期に分析を行い、課題や改善策を整理する必要がある。
「協働実践力・表現力・コミュニケーション力・国際性の育成」の 4 つの能力育成に重点を置いた授業科目の学生能力の評価・検証は、「大学基礎論」で自己分析シートによる振り返りを、「課題探求実践セミナー」で自己分析アンケートを実施した。ただし、関連する授業科目全体に関する評価・検証は、総合教育センター大学教育創造部門が提起する分析方法を利用して行うことを想定していたが、今年度、この分析方法が提示されなかったため、実施することはできなかった。
- ④ 「FD 部会」の活動は、FD のマンネリ化や教員のモチベーションの低下による低調傾向を脱却するために、「FD 部会」が主導的に FD の手法やアイデアを分科会に対して発信し、分科会に対する支援を強化していくことを目指した。立ち上がりが遅かった点では反省が残るが、ほとんどの分科会でなんらかの FD が実施されたことは評価できる。
FD ワークショップは定着しつつあるが、参加者が少なく、実施時期や実施場所を再検討する必要がある。
- ⑤ 「広報部会」は、機関紙「パイプライン」を年 2 回定期（4 月、11 月）発行した。今期の特筆すべき取組として、「パイプライン」に関する学生アンケートに基づいて、「パイプライン」の電子化（平成24年度～）が決定されたことが挙げられる。また、発行時期も4月半ば～下旬及び11月に変更することになった。

(2) 4つの部会等の具体的な取組の総括（※各部会等の総括参照）

3. 分科会活動の充実について

(1) 自律的な分科会活動について

分科会活動は、「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んでいくことになっている。この自律的な分科会活動を掲げた背景には、共通教育の各分野・領域に対して持続的・総合的に責任を負う組織として分科会を位置づけ、カリキュラム編成だけでなく自己点検評価とFDという任務を重視しそれに対する自覚と取組を高めていくこと、また分科会活動における計画の策定や実施・総括等に関わることを教員のOJT型のFDとすることなどの意図があった。

そしてこの間、各分科会は独自に年度活動計画を策定し、それに基づく取組を行ってきたが、授業参観(例えば、課題探求実践セミナー分科会、スポーツ・健康分科会)や授業評価アンケート(例えば、学問基礎論分科会)などで独自な取組が散見される半面、現実には分科会独自の活動が活発に展開されているとは言い難い状況があることも事実である。

このような状況をもたらしている要因として、①平成 20 年度から分科会委員の任期が2年から1年になり経験的・継続的な取組が難しくなったこと、②年々委員の選出時期が遅くなり、分科会の立ち上がり時期が遅くなってきたこと、③自己点検評価や FD がより多様化しており、分科会独自での対応が難しくなってきたことなどの点があると捉えた。この分析を踏まえて、上記②については、選出時期を早めてもらうよう各学部に改めて要請することで改善を図り、また、上記①③の解決については、「カリキュラム等編成部会」「自己点検評価部会」「FD 部会」と分科会との連携(相互支援)や部会長のリーダーシップの発揮等の対応を模索したが、十分に改善したとは言い難く、今後課題を残すこととなった。

なお具体的な取組の内容については、各部会等及び各分科会の各種報告を参照していただきたい。

(2) 「授業改善アクションプラン」見直しの試み～授業改善の実質化を目指して～

第 I 期教育力向上 3 年計画に基づく「授業改善アクションプラン」の実績と総括、さらには昨年度実施した外部評価を踏まえて、「授業改善アクションプラン」の見直しに取り組んだ。とりわけ「5 週目・15 週目アンケート」におけるアンケート項目や方法について、二つのパターンを用意して試行を行った。今後は、今回の試行に関する検討会での意見も参考にしながら、改善を図っていく必要がある。また、依然として教員・学生双方において同プランの趣旨・目的的不徹底が垣間見られる傾向があり、この点については推進する側としてのさらなる努力や工夫が求められる。

今後は「授業改善アクションプラン」における授業把握(分析)は多様かつ教員の自主性に任せる方向に向かっていくと思われるが、いずれにしても、分野や授業ごとの目的や授業形態に合わせて、問題点や改善点をより具体的に把握することが可能となるような評価項目の設定や評価方法を分科会においてしっかりと議論し、評価と授業改善の実質化を図ってほしいと考える。

(3) 新たな FD 活動の展開と FD 参加者の伸び悩み

分科会での「FD 部会」の活動は、相互授業参観及びその意見交換会が中心であり、いくつかの分科会でそれらが開催されているが、今年度はそのような、現状の中から問題点や課題を見出すというスタイルとは異なった取組がなされた。新しい授業手法の取り込み(キャリア形成支援分科会)や能力測定の新しい方法(「基礎力テスト」の試行)などがそれである。

こうした新たな取組がなされる一方で、依然として FD 活動には開催頻度、参加者の広がりという点で課題が残っている。特に3月に集中して実施している FD ワークショップは、内容的には充実したものになっているが参加者が増えない状況が続いている。特に初年次科目におけるグループワークを担当する教員の FD については、今後も積極的に参加を呼びかけるなどのアクションを学部と協力しながら起こしていく必要があると思われる。

これらの改善については、FD 部会が各分科会の FD 活動をこれまで以上に支援していくことで前進を図る必要があるだろうが、総合教育センターの大学教育創造部門とのさらなる連携・協力が不可欠である。

4. 共通教育学生委員会について

ここ数年、学生委員の減少により、活動が停滞傾向にある。改めて学生委員会の意義や目的を整理し、学生のモチベーションを高めるとともに新しい委員の拡大に努める必要がある。また実際の活動の場を創出するという意味で、学生委員会と部会や分科会との接点を意図的に作り出していくというような工夫も大切であると考え。

したがって、次年度は、各部会で最低一つは、学生委員会を巻き込んだ事業を実施することを目標としたい。

5. 今後の全学出動担当体制について

昨年度から、新しい共通教育の担当体制の決定方法によってカリキュラム編成が実施されている。この間発生した問題点や課題については、基本的には全学合意の範囲内の対応で解決が可能となっているが、人文分野分科会、自然分野分科会、外国語分科会が指摘するように、今後は担当体制の全体的・根本的な見直しが必要になってくることが予想される。

しかしながら、それは、共通教育実施機構に固有の課題ではなく、全学的な組織や教育の見直しの問題であると認識している。よって、もし仮に全学的な組織改革が断行されるのであれば、それと連動して高知大学の共通教育の体制やカリキュラムを再構築することが不可欠となるであろう。とりあえずは、全学の動向を見守るしかないが、共通教育がさらなる発展を遂げる方向で改革がなされるべきであることを現時点では確認しておきたいと考える。

6. その他

- (1) 『平成23年度共通教育実施機構活動報告書』は4月末に発刊し、WEB上で公開する。
- (2) 委員の交代や担当業務の変更に伴う引き継ぎについて、4月以降も新委員から問い合わせがあった際には協力をお願いしたい。

Ⅱ カリキュラム等編成部会

1 カリキュラム等編成部会のまとめ

カリキュラム等編成部会長 高橋 俊

1. カリキュラム等編成の経過

2011.5.24 第1回カリキュラム等編成部会

「平成24年度共通教育担当体制に係る基本方針について（案）」を確認した後、本年度のカリキュラム編成スケジュールを確認し、ここ数年懸案事項となっている外国語科目の担当コマ数について今年度中に解決を目指すことが了承された。

2011.8.22 第2回カリキュラム等編成部会

各分科会ごとの担当コマ数を確認した。また、人文学部内で調整を行った、外国語分野と人文分野との担当コマ数の変更について了承された。

2011.9.27 第3回カリキュラム等編成部会

各分科会ごとの担当コマ数を了承した後、今後のカリキュラム編成のスケジュールを確認した。

2011.10.20 第4回カリキュラム等編成部会

若干の未定部分を除き、次年度カリキュラム表が提出され、未定部分は引き続き編成作業を進めていくことが確認された。また、新規開講科目について確認を行った。

2011/12.12 第5回カリキュラム等編成部会

「24年度共通教育科目授業題目（案）」が、若干の未定部分を除き了承された。とくに大学基礎論・学問基礎論に関して、人文学部の人間文化学科・社会経済学科において、カリキュラムの改編を行っているため、未定であることが担当者から報告された。

2012.1.18 第6回カリキュラム等編成部会

「24年度共通教育科目授業題目（案）」の最終確認が行われた。また、朝倉地区教員による物部開講科目の担当コマ数において、これを変更したいという要請が人文分野分科会からだされ、今後ワーキンググループによって検討していくことが了承された。

2. 平成24年度カリキュラムの変更・改善点

・人文学部における外国語担当教員の減少による外国語担当教員の負担増に対処するため、人文学部各分科会の担当コマ数の変更が行われた。

- ・朝倉地区教員担当による物部開講科目については、授業によって極端に受講生が少ないという問題があり、これを解消するべく、該当の人文・社会分野と農学部教員によってWGが設立された。これについては、農学部教員担当の朝倉開講科目との兼ね合いもあり、次年度において慎重に検討することとなった。

3. 平成24年度への課題・申し送り事項等

- ・分科会・学部によっては、担当体制確定がかなり遅れたものもあった。これについては、当該分科会の担当者や学部の教務担当者とも十分連絡を取り、期限内での確定をお願いしていく。

- ・各分科会・学部における教員の減少により、基本開講コマ数を確保するのが困難になりつつある分野もある。これについては、学部ごとの基本担当コマ数を尊重しつつ、さまざまな形で改善を図っていくことが求められる。

2 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 松村政博（理学部）

1. 平成23年度カリキュラム編成

「大学基礎論」では大きく〈大学で学ぶとは〉〈社会はどのような力を求めているか〉〈地域社会における高知大学の役割と意義〉を大学初年次の早いうちに認識し、更にコミュニケーション能力、プレゼンテーションスキル等も習得してもらうことを教育目標とした、演習主体の授業という大枠は決まっているものの、具体的内容は各学部任せられている。23年度に実施された各学部の内容は以下のようなものである。

人文学部：3学科で少しずつ違いはあるが、学科長講義の後、図書館案内、学内講師による4～7回の全体講義とその講義に対する少人数クラスでのグループワーク、レポート作成などを行った。

理学部：「大学で学ぶとは」、「4年間を有意義に過ごすために」等の学部長、学科長などの講義の後、主に学外講師3名を含む5件の講演を実施し、7クラスでの少人数グループワークを通して、学びの姿勢の転換、コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識を促すカリキュラムを編成した。

教育学部：学校教育教員養成課程3クラス、生涯教育3クラスの計6クラス編成とした。学校教育教員養成課程では、課程としての専門に応じた授業を用意するとともに、10人ずつの班別に担当教員とともに文献検索・発表・討論を重ねながら、30人程度の中規模編成で3回にわたるプレゼンテーションを行い、課題学習を行った。また、学部長が「大学（教育学部）で学ぶとは」の講義をした。

生涯教育課程では、芸文、スポーツ科学、生活環境コース別に専門の授業を用意するとともに全体で、学部長による「大学（教育学部）で学ぶとは」、保健管理センターによる「大学生活とメンタルヘルス」、就職室による「進路について」、図書館による「図書館ツアー」等の講義とそれを受けてのグループワークでカリキュラムを編成した。

農学部：学部長講義の後、全体を3クラス各10グループに編成し、【全体講義→各クラスでのグループワーク→プレゼン発表】を3クール行う講義形態で実施した。全体講義は、その後のグループワークの基礎となる内容で、3名の学内講師により「FS実習で農学を学ぶ（農学部の学問の特色と意義）」、「地域社会はどんな力を求めているか」、「国際社会における高知大学の役割と意義」等の講義テーマであった。

医学部：専門職教育の色合いが濃い医学部では、それに見合ったテーマに変えて医学科・看護学科の合同授業として実施した。授業形態として〈講義→グループ討論→発表〉を3回繰り返した。グループ討論ではチューターが指導に当たり、発表は全20グループを4分割し実施した。3つのテーマとは「患者さんの視点から見た医療」、「望ましい医療サービス」、「プロフェッショナリズム（プロフェッショナルとは）」である。

2. 平成23年度カリキュラムの変更・改善点

人文学部：大きな変更はないが、講義内容や振り返り演習については担当で協議し、一定の共通理解を得るようにしている。

理学部：特になし。（東北大震災の後を受けて、平成23年度は特別に防災教育を学科長講義の替りに実施した）

教育学部：特になし。

農学部：平成23年度は、物部キャンパスでの開講数を、従来の1回（第一回分）から2回に増やし、そのうちの1コマでFS実習との連携授業を行った。これは、キャンパスが離れていて専門分野への理解が進み難い1年時に、物部キャンパスの人や場に触れる回数を増やすことで、専門教育への接続の違和感を軽減することを目的としている。また、昨年度に課題として挙げられた2点について、まず「レポート指導」は、説明時間を設けることと様式を提示することで、「情報収集でのネット依存」は、図書館書籍の活用を講義時間内やKULASで推奨することで改善を試みた。

医学部：特になし

3. 平成24年度への課題・申し送り事項等

前年度に3年生を対象として行われた振り返りアンケートの分析は行ったが、今後それをどのように活かしていくのかの議論をほとんど行っていない。大学基礎論に限ってみれば、データ全体から見て主体的に学ぶ姿勢がうかがわれ、今後も継続する意義があるとする意見はあったが、更に意見交換会などを開いて検討する余地があると思われる。これを次年度の申し送り事項としたい。

人文学部：大学における学びとは何かの理解を得られたと思うが、自分の将来像やプレゼンテーション能力の向上についてはそれほど効果があったと感じていない学生が多い。今後は講義内容の見直しを大胆に行い、改革の必要性がある（人間文化学科）。

理学部：授業アンケートを見る限り、コミュニケーション力の向上などに効果があったが、講師・講演内容の見直しを検討する。

教育学部：学生に表現力の向上を図ることができた。

学校教育教員養成課程では、第1回全体講義を学部長に担当してもらったことに関しては成果が見られたので、次年度にも引き継ぎたい。

生涯教育課程全体では「大学生活とメンタルヘルス」、「進路について」等のテーマでのグループディスカッションは効果があった。また、最終回に発表会を行わせたことで学生の成長が感じられた。芸文コースでは音楽と美術と一緒に学ぶことで双方の学生に刺激を与えた。スポーツ科学コースでは、合宿研修を通してお互いを知りあうことができた。生活環境コースでは「大学生 学びのハンドブック」をテキストにして、学生たちにテキストを解説させ、グループ討議させ、講義ノートを書かせ、発表させたことで対コミュニケーション能力、作文力、プレゼンの力が養われた。各コースともに大学基礎論の中で学生が交流を深めた。

農学部：FS 実習との連携を行ったことで、クラスやグループの一体感や FS 実習でのグループ活動の活発化などの連携効果が発揮された。しかし、FS 実習の実施期間は長く、実施時期と第1クールのグループワーク期間が上手く合わなかったクラスもあり、この点への配慮が必要である。また、「レポート指導」の面では、様式提示により一定の改善は見られたが、内容を充実させる仕掛けが課題として残る。「情報収集でのネット依存」については、指導の中でグループの独自性を高く評価することで、表面的ではない情報収集やプレゼン表現技術の向上に繋がる傾向が見られた。しかし、クラス、グループ、個人の各段階での温度差は消し難く、この講義体験を活かそうとするように学生を誘導する仕掛けを今後も検討しなければならない。

医学部：全員が附属病院で体験実習を行った後に、関連した討論をおこなう流れは良い。全般的に型どおりの意見が多いようなので、もっと自由な意見が欲しい。討論のテーマは、学生には少々の絞りにくいように感じるが、テーマを絞り込み過ぎてどのグループも似通った意見になるよりはよいだろう。テーマには検討の余地があると思われる。

3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会会長

野田 智洋 (医学部)

1. 平成23年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては、各学部に依頼し、それ以外のセミナーについては、各担当者に授業実施を依頼した。

平成23年度開講授業題目

人文学部開講セミナー 2 題目

教育学部開講セミナー 2 題目

理学部開講セミナー 3 題目

医学部開講セミナー 1 題目

農学部開講セミナー 2 題目

自律協働入門 1 題目

地域協働入門 4 題目

自由探求学習 2 題目

国際協力入門 1 題目

学びを創る 1 題目

国際協力入門 1 題目

学びを考える 1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

2. 平成23年度カリキュラムの変更・改善点

2 学期開講の「課題探求実践セミナー (人文学部)」必修科目ではないため、受講者が 4 名未満となり、開講を取りやめた。

3. 平成24年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

4 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 西村安代

分野又は科目の教育目標

各学部の専門分野において必要な知識・素養を学ぶとともに、日本語を含めたプレゼンテーション技法を身につける。

平成23年度の活動総括

1. 自己点検評価活動について

教育学部：各コースにおける自主的な活動として、授業改善につながる活動を行った。また、コースによっては、昨年度まで実施してきた5週目・15週目アンケートや授業改善アクションプランを踏まえた授業を実施した。

医学部：医学部独特のカリキュラムと学生事情もあるため、独自のアンケートを作成して随時行い、また、まとめたものは7月末に施行した。

理学部：学期末アンケートを実施した。

農学部：特になし

2. FD活動について

教育学部：学問基礎論の授業担当教員とシラバスの書き方や授業の進め方について、意見交換を行って、授業の実際に役立てた。

医学部：特になし

理学部：特になし

農学部：3月5日（月）に「活動性のある授業づくりとは？」と題して協同学習に関する講演を安永悟先生（久留米大学）を講師に招いて開催した。また講演後は釣行教員を生徒役にして模擬授業を行い、授業の導入方法やコミュニケーション方法について講義を受けた。

3. その他講義内容など（各学部における取り組み状況や改善点など）

教育学部：時間目の授業であるので、1時間目の授業に出られないような生活リズムの改善を1年生から図る指導が行われるべきことや、各種情報検索などパソコンの利用が多かったので、情報端末のある部屋で授業をする方が効果的なことを次年度の授業で生かしていくこと。また、学生が授業テーマ（授業担当教員）を選択する際に、最初から授業テーマに基づいて選択するのではなく、授業担当者の講義を一通り受講した後で学生の受講希望を聞き、20人程度のクラスに分けをしていく方法を、改善点として採用することにした。

医学部：講義内容は『医学部で何を学ぶか』と『高知大学について』についてのオリエンテーションと、『臨床医学入門』と『医学英語入門』を合わせて13回行っている。他の2回は、年度毎異なるが今年は、『健康管理』の話と、『漢方入門』の2回講義をしていただいた。

理学部：特になし

農学部：昨年度までは全講義を朝倉キャンパスで開講していたが、本年度は物部キャンパスで2回講義を行い、多くの教員と交流した。また、本年度までは水曜4時間目に行っていたが、水曜の午後は朝倉キャンパスでの講義がほとんどないため、学生の都合も配慮し、来年度から水曜3時間目に変更することが決定した。

5 人文分野分科会

人文分野分科会長 川本真浩（人文学部）

1. 平成23年度の次年度カリキュラム編成の経過

(1) 2011年8月の第2回カリキュラム等編成部会（以下、「カリ部会」）会議において基本担当人数の変更（外国語分野の1減と人文・社会両分野の各0.5増）が提起された。これをうけて、同9月に人文学部長の案にそって同変更による基本授業担当コマ数の内訳変更が合意された（次項2（1）を参照）。その内容は、同9月の第3回カリ部会会議で了承された。

(2) 2011年10月の第4回カリ部会会議において、平成24年度共通教育科目の学域・科目の開講コマ数について決定され、同年度カリキュラム編成にとりかかることになった。

(3) この編成作業の途中で、「人文学部専任担当」にあたる「教養科目」を3コマ減らし同「共通専門科目（基礎科目）」を3コマ増やす旨の内訳変更を分科会から実施機構会議（カリ部会を経て）に提案することとなった（次項2（2）を参照）。同提案は2011年12月の第5回カリ部会会議および実施機構会議で承認された。

(4) 2011年12月から翌12年1月にかけて平成24年度開講授業題目表が作成され、同月の第6回カリ部会会議で了承された。なお、その後もやむを得ない事情から若干の修正・変更・追加があった。

2. 平成24年度カリキュラム編成にかかる変更点

(1) 人文分野（人文学部専任担当）における基本担当人数の変更について

外国語分野の基本担当人数減少分を人文学部専任担当の枠内で埋めあわせるために、人文分野の基本担当人数を0.5人増やすこととなった。この増加分に対応する3コマの授業については、小澤萬記人文学部長から次のように割り振ることが提案され、関係する分科会委員も交えた協議のうえで合意された。

- ・従来は学部開講科目（ノルマ外）であった「現代文化論」ないし「比較文化論入門」のノルマ内への組み入れ（同授業は、国際社会コミュニケーション学科教員が担当し、相互に隔年開講されてきた）。

- ・「外国文学」の新設（休止状態であった学域「外国文学」を復活させて、同学域教員が担当する）。

- ・地理歴史の1科目（純増。いわゆるノルマ内授業科目担当数と在籍教員数のバランスを勘案したとする学部長の「強い要請」による）。

(2) 人文分野（人文学部専任担当）の開講科目内訳数の変更について

人文学部人間文化学科では2011年7月より1、2年生を対象としたカリキュラム改革検討作業を進めていたが、平成24年度から同改革の一部が実施されることとなった。それとともに生じる科目数の変化（学部開講科目である共通専門科目（基礎科目）の廃止による

同科目数の減少)を最小限にとどめるために、12月1日付実施機構長・カリ部会長あて依頼文書で、いわゆるノルマ内授業科目の内訳変更、すなわち人文分野(人文学部専任担当)教養科目3コマを減らし、同共通専門科目(基礎科目)3コマを増やす旨、提案し承認を求めた(当然ながら、いずれの3コマも同学部人間文化学科専任教員が担当する授業科目である)。この修正は学生(同学科学生のみならず、共通教育科目を受講する全学生)の受講機会と内容の改善にも資することが見込まれるので、当初のカリキュラム編成スケジュールの枠外ではあったが、とくに「学生の利益となる変更として急を要する」ものとして分科会が提案し、承認された。

(3) 物部キャンパス出講について

前年同様、農学部学務委員会委員長名の文書(前年度と同じく3コマの開講要請)をうけて、分科会内で協議・調整を行った。平成23年度同様、受講生を確保しやすい時間割枠組みとして火曜午後を提示されたが、一部の学域では担当教員の調整がどうしてもつかず、窮余の策として平成24年度は別時間枠(水曜1限)の開講授業が設けられることとなった(ただし、これは「条件付きの出講受諾」であることを分科会内で了承)。

なお、2012年1月の第6回カリ部会会議で「平成25年度以降の物部キャンパス授業開講数を検討する作業に着手する」旨、分科会として提案し、了承された。長年の懸案である開講数の見直しが行われることになったのは、今年度のカリ部会(諸先生方)の実践成果として高く評価できるものである。

3. 平成24年度(平成25年度カリキュラム編成)への課題

(1) 基本担当コマの授業担当体制について

「教員個々に、隔年1科目担当、毎年1科目担当、毎年2科目担当などの負担の幅があり、不満がある」と昨年度の本報告書で記されたところであるが、残念ながら今年度もそのような「不満」を解消する具体的な方策は見つからなかった。しかし、そうした不均衡にかかる各教員の実情と意見を相互に理解・認識したうえで「真の意味で学生のためになるようなカリキュラム編成と授業展開」を最優先事項として考えていこうという志向を多くの人文分野担当教員が共有していることが、分科会活動にかかわる様々な局面に明白に表れてきた。こうした志向は、即効性ある解決策には至らなくとも、着実な授業担当体制の改善と授業内容のレベルアップにつながっていくものである。物部キャンパス出講の件とあわせて、今後ともよりよい方向で議論を進めていただきたい。

(2) 分科会委員の新設(復活)について

カリキュラム編成時の手間と混乱を減らすことと学部単位での調整の便を図るために、平成24年度から分科会内に「人文学部」「教育学部」委員を新設することになった。また、教養科目「外国文学」が平成24年度から開講されることに伴い、「外国文学」委員を復活させることとなった(カリキュラム編成業務のみならず、当該授業担当教員の「母体」を明確化させるためにも委員ポストを「復活」させた)。職務の多忙化や人員削減が進む

なかで、委員をむやみに増やすことは避けねばならないが、他方でさまざまな業務の整理と経緯の継承のためにもこれらの新設（復活）委員は重要であると考え。引き続き、真の意味での「業務の効率化」につながる方途を探っていただきたい。

（3）物部キャンパス出講について

平成23年度カリキュラムで実施された「人文分野教養科目を（農学部教授会が開催される）火曜日午後に開講する」という措置は、たしかに履修登録者数の一定の増加をみたが、その一方で、実履修者数（いわゆる期末試験受験有資格者数）の比率が有意に低いことや、出講できる教員が限定されることによって朝倉キャンパスでの授業開講に支障をきたすことなど、多くの課題も明らかになり、継続して実施するには困難が大きいことが判明した。上記2（3）で述べた「物部キャンパス授業開講数の検討依頼」は、そうした問題に対して抜本的な打開策を講じなければ共通教育実施体制そのものが破たんするという危機的状況をふまえてなされたものである。カリ部会長のもとでの検討（ワーキンググループによる作業）によって、実のある成果がもたらされることを期待したい。たんに「物部は遠いからしんどい」とか「農学部教員も朝倉まではるばる来ているのだから、苦労はお互い様だ」といった感情論を先走らせたかのような「痛み分け」「バーター的」なとらえかたではなく、各分野・学部での実情を相互に理解しあったうえで、「履修規則、教員数削減、授業時間枠の変更を経てきたにもかかわらず、それを考慮することなくオートマティックに出講数が継受されてきた」ことによる弊害の洗い出しとその解決策を探るべく、先生方にはご尽力いただきたい。

6 社会分野分科会

社会分野分科会長 中澤純治（人文学部）

1. カリキュラム編成の経過

社会分野分科会では、外国語分野の基本担当コマ数の変更により、今年度から社会分野の基本担当コマ数が40から43へ増加した。共通教育実施機構のカリキュラム編成方針に基づき、平成23年度の担当体制を踏襲した上で、編成作業を実施した。

<平成23年10月～平成24年1月 カリキュラム編成作業>

社会分野を担当してもらっている人文学部（国際社会コミュニケーション学科、社会経済学科）、教育学部、総合教育センターに依頼して担当者を調整し決定した。

<平成24年2月 カリキュラム編成作業終了>

社会分野が担うべき最低限開講数43コマ（人文35、教育5、総合教育センター1、非常勤2）の他に多様な科目を関係する学部等の協力を得て開講するカリキュラムを編成できた。

教養科目では基本開講数（旧主題別18題目、旧分野別17題目、合計35題目）に加えて、16題目を開講する（うち5題目「中山間地域の生活と環境Ⅱ」「社会調査データの分析」「社会統計学の基礎」「温暖化とどうつきあうか」「現代日本の政治と経済」は24年度新規に追加した）。

共通専門科目基礎科目では基本開講題目数（8題目）に加えて4題目を人文学部の協力を得て学部開講科目として編成することができた。

2. 平成24年度カリキュラム編成のポイント

- (1) 副数題目において新たな担当者の科目に変更され、開講題目の固定化に一定の歯止めをかけることができた。
- (2) 新規に「中山間地域の生活と環境Ⅱ」「社会調査データの分析」「社会統計学の基礎」「温暖化とどうつきあうか」「現代日本の政治と経済」を開講し、多彩な題目を展開することができた。
- (3) 活用されていなかった非常勤講師枠を利用し、政治学計科目（「現代日本の政治と経済」）を開講することができた。

3. 課題

- (1) 平成22年度に提起された課題（教育学部の負担数の過剰、物部キャンパス開講数の見直し）のうち、後者の「物部キャンパス開講数の見直し」については、カリキュラム

等編成部会 WG で検討が行われることとなった。それにあわせて、社会分野内における各学部・センター間の負担の問題も次年度以降検討していかなければならない課題である。

- (2) 平成 23 年度に提起された、一部の社会分野科目について、教育効果に照らして受講者数が多すぎるという課題については、今年度については緩和されたようである。しかし、対象事業の開講日時の変更によるものと推測され、本質的には改善されていないと考えられる。これらを解決するためには、授業コマ数を増やす等の措置が必要であるが、上記の負担の問題とあわせて検討が必要である。

7 生命・医療分科会

生命・医療分科会長
阿部 眞司（医学部）

1. 平成23年度カリキュラム編成の経過

各学部担当教員とメールによる連絡調整を行い、カリキュラム編成の基本方針を確認した上で、下記の通り編成作業を行った。

- ・ 1月25日(火)：学部、センター代表者あてに責任者の選任と、開設学期ならびに曜日時限の決定通知を行い、平成23年度授業計画策定の依頼を行った。
- ・ 2月14日(月)：すべての部局から授業計画が提出された。
- ・ 3月：責任者宛に授業の実施依頼を行う予定である。

開講曜日及び時間の決定に当たっては、時間割の移動を極力おさえ、混乱のないよう配慮した。従って、これまでの木曜日開講をベースとした時間割とした。さらにオムニバス形式にするか部局等が独自で開講するかについて検討したが、偏ることなく広い視野にたつて授業を提供するという観点から、部局等のオムニバス形式とすることとした。また、授業担当者の数についても検討し、従来よりも担当者の数を少なくするように工夫した。

2. 平成23年度カリキュラムの変更・改善点

教育学部の授業担当者が交代となり、テーマ未定のまま授業実施を依頼した。

3. 平成24年度への課題

クラス間の受講者数に偏りが生じている。授業内容については、担当部局の学問特性を生かしつつ、内容が偏ることなく編成したい。

8 自然分野分科会

自然分野分科会長 岩井雅夫（理学部）

1. 自然分野分科会運営体制

自然分野の教育目標「自然科学に関する基礎的な知識と考え方の習得」を実現すべく、「カリキュラム等編成に関する課題を点検し、カリキュラム編成や実施環境改善する方針」のもと分科会活動を行ってきた。

運営に際しては、これまでの自然分野分科会活動経緯・体制を踏まえ、輪番制で副分科会長を選出、カリキュラム等編成部会は慣例に従い分科会長が対応を担当した。自然分野分科会構成員は 13 名と極端に多く一同に会しての会議運営は日程調整だけでも相当な労力を要することとなる。そこで自然分科会はすべてメール会議とし、カリキュラム等編成に関する作業や審議依頼に対応した。

【自然分野分科会委員】

分科会長：岩井（理）、自己点検担当副分科会長：佐藤（教）、FD 担当副分科会長：池島（農）
委員：池田（理）、伊藤（農）、岩堀（医）、上田（理）、柏木（農）、齋（農）、砂長（理）、中城（教）、中村（理）、本田（理）（五十音順）

2. 平成 23 年度カリキュラム

（1）開講中止科目

平成 18 年度以前入学生対象で、農学部暖地農学科学生の必修科目であるため開講する予定であった「バイオテクノロジー概論」は、対象学生が休学し受講予定がなかったため開講中止とした（2011 年 8 月 5 日、自然分野分科会メール会議にて承認成立；以下単に「承認」と表示）。

（2）集中講義開講

教養科目「森林と地球環境」（2 単位）を、集中講義（2012 年 2 月 29 日～3 月 2 日、物部キャンパス）で開講した（2012 年 2 月 21 日承認）。

3. 平成 24 年度カリキュラム

（1）平成 24 年度以降教養科目授業担当コマ数の枠組

分野別・主題別区分撤廃にともない、教養科目枠組みの再考が議論された。これまで自然分野の教養科目としては、1）分野別：「数理の世界（4）」「自然の法則（1）」「物質の科学（1）」「バイオサイエンスの世界（3）」「地球と宇宙（2）」「自然科学の歴史（1）」、2）主題別：「生活と社会（1）」「自然と環境（18）」、の科目が開講されてきた。分野別・主題別区分撤廃により、平成 24 年度以降において科目の名称変更やコマ数の再配置が可能となった。しかし現時点で変更希望はなく、当面現在の科目区分をそのまま踏襲し、今後必要に応じて見直してゆくこととなった（2011 年 9 月 21 日承認）。

(2) 平成24年度カリキュラム編成作業

第5回共通教育実施機構会議(平成22年10月27日開催)において共通教育の授業担当体制が了承されたことを受け、カリキュラム等編成部会長の依頼に基づき平成24年度カリキュラム編成作業を開始した。各学部・分野担当科目について自然分野分科会委員が分担し、担当者・科目名・開講学期・時間等の変更・修正作業にあたった。

共通教育係の協力のもと一覧表(エクセルシート)が共有され、短時間内に作業を進めることができた。しかし、担当者をローテーションにより定期的に変更しているオムニバス科目や教員の退職にともなって担当者が変更になる場合、次年度コース長・学務委員等役職の確定や新任教員着任が、カリキュラム編成に直接影響する。情報科目・教職科目・学芸員科目・専門科目等は、別組織で議論されており、共通教育実施機構カリキュラム編成分科会で集約される議論とのすり合わせが必要となる。結果として、カリキュラム編成作業は1月初旬の共通教育実施機構会議の承認を得るために、年末ぎりぎりまで作業がつづいてしまった。

(3) eK4 単位互換科目の受け入れ

e-Knowledge コンソーシアム四国事務局(香川大学)より単位互換科目の受け入れについて照会があり、「コンピュータと教育」「四国の自然環境と防災」の2科目を、平成24年度以降共通教育科目教養科目(自然分野)として受け入れることとした(2012年2月13日承認)。ただしe-Knowledge コンソーシアム(<http://www-ek4.cc.kagawa-u.ac.jp/>)の活動や共通教育における位置づけに等については十分浸透しているとは言えず、波及効果を十分検討できなかったことは課題を残した。

(4) 非常勤講師資格審査

共通教育基礎科目「地球科学の基礎」(補講科目)の非常勤講師資格審査を実施し、承認された(2012年2月13日承認)。

(5) 優先履修

土佐さきがけプログラム(グリーンサイエンス人材育成コース)の優先履修について審議依頼があり、グリーンサイエンス人材育成コースで必須科目となっている3科目(化学概論Ⅰ, 化学概論Ⅱ, 基礎化学実験)については平成24年度以降優先履修を認めることとした(2012年3月6日承認)。

4. 平成25年度以降カリキュラム - 物部キャンパス授業開講数検討ワーキンググループ

【背景】「農学部開講時間枠変更要請に伴い、人文分野の物部開講科目担当者人員繰りが対応しきれない状態が発生し、今後も解消されそうにない」との問題発生を受け、「各キャンパス開講コマ数の見直しを含め、年度を越えた議論する場を設けてほしい」との人文分野分科会長の要請がカリキュラム等編成分科会になされた。カリキュラム等編成部会は対応を協議するためのワーキンググループ設置を決議し、自然分野分科会の対応が問われた(2012年2月10日)。

【物部キャンパス開講科目の現状】 現在約 40 科目が物部キャンパスで開講されており、自然科学分野では約 10 科目が含まれる。人文・社会・外国語分野の科目では受講生が 1 桁台となっている科目が多く見受けられる一方、自然分野開講科目はいずれも大人数で開講されている。キャップ制度で受講科目数が、また教室収容定員で受講者数が制限される中、農学部学生が 1 年生のうちに朝倉で共通教育科目をとりきり物部キャンパスに引越すのは困難である。特に教職科目の開講は古くから農学部の要請に基づき物部キャンパスでも開講してきた。現在は生物学概論 I のみ朝倉キャンパス在住教員が対処しているが、そのほかの科目はコアセンター専任教員の協力により、物部キャンパス在住教員でまかなうことができている（2012 年 2 月 13 日、カリキュラム等編成部会配布資料）。

【自然分野分科会の対応】 複数キャンパスを抱えたなかで、総合大学としての共通教育をどう実現していくか、と考えると大きな問題になり一筋なわではなくなる。1) 一定期間内に一つのキャンパスで取り終える共通教育実施体制を整える、2) 大人数教育実施可能な共通教育設備の充実をはかる、3) 各キャンパスに共通教育要員を配置する、4) 効率的な共通教育ができるようキャンパスを統合する、など様々な案が考えられる。しかし、2003 年の大学統合後今なお旧高知大学・旧高知医科大学の共通教育実施体制は統合の道筋が見いだされていないこと、近い将来学内の大規模組織改変が検討されることから、カリキュラム等編成部会で対応できる問題ではない。そこで自然分野分科会としては「効率的かつ負担感の少ない共通教育科目開講」に絞って考えることとし、現時点で自然分野分科会関連科目では円滑に複数キャンパス開講科目体制が運営されていることから、自然分科会として組織的なワーキンググループ参加は見送り、問題が表在化した際改めて協議することとした（ただし、自然分野分科会委員が必要に応じて個別にワーキンググループに参加することについては制限を設けていない）。

5. カリキュラム実施環境改善にかかわる活動

(1) 情報収集調査

自然分野科目の教育環境改善・安全教育にむけた情報収集を主たる目的とし、福島大学・東北大学・東北工業大学における東北地方太平洋沖地震（2011 年 3 月 11 日）の被災状況ならびに、復旧・安全対策等について聞き取り調査を行った（2012 年 1 月 24 日～27 日）。各大学の被災特性に応じ、1) 福島大学においては教員有志による放射線計測・分布図作成過程について、2) 東北大学においては各段階（地震発生直後・復旧過程・復旧後）の対応について、3) 東北工業大学においては被災地・被災証言映像記録活動について、重点的な調査を行った。また津波被害が甚大であった石巻・女川地域において、津波被害と地形の関係、震災後 10 カ月以上経過した時点での復興状況、について現地調査を行った。調査を通じて明らかになってきた事実は折にふれ別途報告し、教育環境改善に反映させて行きたい。

(2) 教育環境改善

共通教育実施事業経費の追加配分に際し、「共通教育棟化学実験室改修工事」ならびに「教育用世界地図設置」を申請し採択された（2012年1月）。

【共通教育棟化学実験室改修工事】 教員免許に関する履修科目変更等の影響により受講生が増加，実験室が手狭になったことから，化学実験室（共通教育棟1号館1階）の改修工事を行った。天秤室と準備室の壁を撤去し一部配置を変更することで空間を有効活用するとともに，棚の移設・固定などにより安全に配慮した環境整備を行った。

【教育用世界地図設置】 常時学生が目にする屋外（共通教育3号館東側壁面）に世界地図を設置した。だれもがアクセス可能な屋外授業・教養教材として，またオープンキャンパス等における教養教育広告塔としての効果が期待される。

6. 今後の課題

（1）共通教育科目開講・運営体制

人員削減や組織・カリキュラムの改編・新造による教育・運営・評価活動の個人負担増が進む中，効果的かつ効率的な科目開講・運営環境整備が望まれる。

1) 担当コマ基本数

今なお残る旧高知大学各学部の担当コマ基本数は，教育組織と教員組織が切り離された現在早急に解決されなければならない問題である。ノルマ外開講科目ではノルマ開講科目担当者に配分される教育経費が配分されないという担当経費不均等問題も発生している。自然分野分科会内で解決できる問題ではないが，今後合意形成にむけた調整をすすめてゆく必要がある。

2) 複数キャンパスにおける共通教育

朝倉キャンパスと物部キャンパスにおける自然分野科目の実施体制は円滑に運営されている。しかし医学部と他学部の共通教育体制は独立したまま運営され，単位互換・非常勤講師の域を出ていない。今後全学の動向を見守りながら，自然分野教養教育の理想像を描き，複数キャンパス間の共通教育実施体制構築を検討して行く必要がある。

（2）自然災害に対する安全確保・安全教育

耐震補強等対策は進んできたが，現実の自然災害の場では効果が疑われるもの・想定外となつて見落とされているものも見つかってきた。特に薬品や野外調査を伴う自然分野実験科目の実施に際しては，見直し・対策が必要である。共通教育棟に配置されている化学実験室は対策が施されたが，その他基礎実験科目開講場所は共通教育管理区域外扱いとなつており整備が進んでいない。

9 外国語分科会

外国語分科会長 吉門 牧雄（人文学部）

1. カリキュラム編成の経過

2011年4月 「英会話」・「大学英語入門」 プレースメントテスト

2011年10月 「英会話」・「大学英語入門」 プレースメントテスト

2011年2学期 次年度のカリキュラム作成を行う。

2012年3月 「英会話」・「大学英語入門」 集中講義実施

2. カリキュラムの変更・改善点

共通教育に係る担当体制に関し、人文学部において基本人数の割り振りが変更されたことにより、外国語分科会開講コマ数は、担当ノルマを完全に満たすことになった。上記の変更により、「大学英語入門」の開講数が2コマ減少した。

3. 2012年度への課題

人文学部における基本人数の割り振りの変更により、外国語科目担当教員の過重負担が少しだけ軽減されたが、多くの教員はいまだに年3コマ（外国語分野の場合は週2回の授業で1コマ）の授業を担当しており、さらなる負担軽減にむけて外国語科目の一人当たり担当コマ数の見直しが必要である。

10 キャリア形成支援科目分科会

キャリア形成支援科目分科会長 鈴木啓之（人文学部）

1. カリキュラム編成に関する報告

キャリア形成支援科目分科会では、共通教育実施機構会議のカリキュラム編成方針に基づき、今年度の担当体制を踏襲した上で、学芸員資格教育の変更計画なども踏まえ、カリキュラム編成を行った。

基本的なカリキュラム編成は、10月中旬から検討に入ることとし、11月中にメール会議にて、分科会としての審議を行い、承認を得た。

その後、大学教育創造センター所属の教員から、ノルマ外の授業追加の要望があり、授業の開設趣旨、内容など当該教員の希望と本学の共通教育の授業の枠組みとを勘案した結果、平成24年度についてはキャリア形成支援科目として位置づけることとし、次年度以降の開講形態等に関しては折を見て再検討する方向で1～3月に調整を進め、例外的に3月の共通教育実施機構会議で承認を得て、題目の追加を行うことになった。

平成24年度開講授業題目

共通専門科目基礎科目（教職に関する科目）10 題目

共通専門科目キャリア形成支援科目（教職に関する科目）10 題目

共通専門科目キャリア形成支援科目（博物館実習）2 題目

共通専門科目キャリア形成支援科目（CBI 関連科目およびキャリアパス演習・チームワークを考える、ふるさと活性演習等）13 題目

計 35 題目

2. 自己点検評価活動に関する報告

前年度はキャリアパス演習などでは独自の評価を試みたが、十分な分析等の態勢が取れなかったため成果を上げることができなかった。そのため今年度は、態勢を整えることが難しいとの判断から、部会委員の選出以外に特に実施できなかった。

3. FD活動に関する報告

前年度は独自のFD活動を構想したが、キャリア形成支援科目分科会の枠を越えるようなテーマが構想されることになり、予算的にもテーマ的にも困難となった。それを踏まえて、今年度は、独自のFD活動ではなく、共通教育全体のFD活動に依拠することにした。

1.1 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会長 駒井 説夫

1. カリキュラム編成の経過

- 10月17日 共通教育の負担(ノルマ)について検討し、次年度も従来通りのコマ数開講を確認した。
- 10月31日 スポーツ科学実技(フットサル)の中止について審議した。
- 11月14日 スポーツ・健康分野平成24年度時間割について原案に基づき検討した。
- 11月28日 平成24年度時間割・担当者について原案に基づき検討した。
- 12月12日 平成24年度時間割・担当者を決定した。
- 1月16日 平成24年度北体育館改修計画の報告をうける。平成24年度授業の調整作業開始
- 1月30日 北体育館改修に伴う(10月～2月)の授業の調整案を審議
- 2月13日 北体育館改修に伴う(10月～2月)の授業の調整案を決定し、共通教育係に報告
- 3月13日 スポーツ・健康分野の23年度総括と24年度に向けての改善点を検討した。

2. カリキュラム編成の変更点及び改善点

スポーツ科学実技フットサルはこれまで、2学期集中授業として実施されてきたが、300人を超える受講者に対して1名の教員による授業であること、休日夜間開講であることによる事故などの対処が十分できないなどの理由から審議の結果本年度より中止することとなった。なお、中止した1コマ分については2月の集中授業(ゴルフ)で対応した。

従来開講してきたソフトテニス及びバレーボールは非常勤講師変更により次年度は開講しないこととし、フィットネス、剣道を新規開講することとした。

スポーツ科学講義の受講者数が極端に多いクラス(267人)があり、授業効率が非常に悪いことなどが指摘された。評価の更なる厳格化を含めてさらに検討することが確認された。

スポーツ科学実技に関して、1学期の木曜2時限の受講者が少なく、その対応策として、共通教育の今年度の授業科目ごとの受講者数を調べ、種目ごとの時間割の変更について検討した。その結果、1学期木曜2時限開講科目のうちバドミントンと卓球の時間割を移動することとした。(バドミントンは2時限から4時限へ、卓球は木曜2時限から3時限へ、)

平成24年度北体育館改修の決定に伴い2学期北体育館を使用する授業科目についてその対応を検討した。屋外種目への種目変更と南体育館の利用、時間割の変更により対応することとした。

3. 課題等

スポーツ科学講義において極端に多いクラスもあり早急に適正人数の策定が必要であると感じた。

生涯スポーツという観点からどのような実技種目が望ましいのか引き続き検討したい。

1 2 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長
神崎 道太郎(国際・地域連携センター)

1) カリキュラム等の編成経過

9月～翌2月 カリキュラム等、分科会で話し合う内容についての提案の依頼と分科会日程調整(メール会議、電話、個別)

1. 2012年度コマ数と担当配分について
2. 開講科目名と担当教員の決定
3. 2012年度コマ数と担当配分、ならびに開講科目名と担当教員(曜日等を含む)最終確認
*12頃人文学部から2012年度の担当についての案が提出され、2月にカリキュラム編成部会等でその承認を受けた。

2) 問題点と今後の課題

カリキュラム編成の流れについては、基本的に前年度をベースに踏襲した。ただ、前年度から留学生の種別、能力の差、単位取得の必要性の有無等が、複雑に絡み合っているため、その複雑な様相をどう解決していくかが、問題点として浮かび上がってきており、同様の問題を抱えたままになっている。能力別に編成するか、また、一定の能力以上の学生のみ受講可能とするか、あるいは留学生の種別の特別編成にするか等、考えられるところではある。さらに、学部の日本語関連科目とうまく噛み合わせる問題もある。何種類かある日本語関連科目との整合性のある関係性を持たせたものになれば学生への効果もさらに期待できると思われる。

そこで、今年度は人文学部からの提案があり、上記問題点の解決に向けて2012年度コマ数と担当に関して、センター、人文学部教員の担当部分について、センターは日本語科目を、人文学部は日本事情科目を、それぞれ統一して分担することになった。科目構成も、日本語科目Ⅰ～Ⅳ、日本事情科目ⅠからⅥに変更することとなった。

なお、大学間協定、あるいは今後どのようにこの日本語・日本事情科目を活用するか等、多岐にわたる事項も今後継続検討しなければならない。

こういったカリキュラム等の中にそれぞれ位置づけていかなければならないのか、全学的な視点からも検討していただくことを切に願うものである。

Ⅲ 自己点検・自己評価部会

1 自己点検・評価活動の全体的状況

自己点検・自己評価部会長 大石達良（人文学部）

1. 今年度の自己点検評価活動の特徴

今年度の自己点検評価部会では、共通教育実施機構会議活動基本方針に従って、(1)「授業改善アクションプラン」の改善策の策定とその試行、(2)新設初年次科目に関して昨年度実施した3年生アンケートの分析、(3)「協働実践力・表現力・コミュニケーション力・国際性の育成」に重点を置いた授業科目における学生能力の評価・検証の試行、(4)各分科会の問題意識に応じた各分科会独自の自己点検評価活動、を活動の柱として設定した。

(1)の「授業改善アクションプラン」の改善・試行に関しては、新しい形式の授業アンケート案を作成し試行を行った。また、総合教育センター大学教育創造部門と協力して、コンサルテーション方式による試行を行った。

(2)の新設初年次科目の3年生アンケート分析は、データを整理し、関係分科会での議論を始めたが、分析・評価をまとめるには至らなかった。

(3)の4つの能力の育成に重点を置いた授業科目の学生能力評価・検証は、「大学基礎論」で自己分析シートによる振り返りを、「課題探求実践セミナー」で自己分析アンケートを実施した。ただし、関連する授業科目全体に関する評価・検証は、総合教育センター大学教育創造部門が提起する分析方法を利用して行うことを想定していたが、今年度、この分析方法が提示されなかったため、実施することはできなかった。

(4)の各分科会独自の自己点検評価活動に関しては、後述のように、FD活動とも連動させながら、学期末アンケートなどの形で実施された。

以下、本項では、上記(1)(2)について記述する。

2. 「授業改善アクションプラン」の改善と試行

(1)「授業改善アクションプラン」の改善ポイント

共通教育における授業改善・教育力向上のための「授業改善アクションプラン」の取り組みについては、2008～2010年度の3カ年の活動の総括と外部評価で指摘された課題を踏まえ、以下の3点について改善を行うことになった。

- ①授業の分析に必要な情報獲得は、各授業・各教員の特徴に応じた多様な方式で行う
学生アンケート、コンサルテーション、ピア・レビュー、授業参観、
各教員が独自に行う授業アンケートやヒアリングなど
- ②共通教育として用意する学生アンケートは、5つの教育力を踏まえたものとする
- ③学生アンケートよりも丁寧な方式としてコンサルテーションによる授業改善の取り組みを導入する（総合教育センター大学教育創造部門と協力して実施）

今年度は、上記②③について検討し、2学期に新たな方式による「授業改善アクションプラン」の試行を実施した。

(2)新しい「学生アンケート」案の作成、コンサルテーション方式の開発

新しい「学生アンケート」については、5週目アンケートに関して、高知大学の5つの教育力の規定に基づいて質問項目を設定した。また質問に対する回答形式として、選択肢式と記述式の2つの形式のものを作成した(資料3-1-1、資料3-1-2)。15週目アンケートに関しては、「授業改善アクションプランの効果」「学生の諸能力の獲得(授業目標の達成)」「アンケートの効果と負担」の3項目に関する学生意識の検証についての質問項目を設定した(資料3-1-3)。

コンサルテーションについては、総合教育センター大学教育創造部門が、受講学生のグループワークと全体討論を通じた学生意見聴取とその後の教員へのフィードバックに基づく方式(ミッドタームスチューデントフィードバック)を開発した(資料3-1-4、資料3-1-5)。

(3)新しい「学生アンケート」およびコンサルテーションの試行

2学期、各分科会に協力授業の推薦を依頼し、12教員の16授業で試行を実施した。実施方法の内訳は、選択肢式アンケート10授業、記述式アンケート7授業、コンサルテーション3授業(2つの方式で実施した授業が4つあった)であった。ただし、コンサルテーションについては、当初3授業で取り組まれたが、授業担当教員の交代、授業担当教員の入院が生じたため、15週目の効果検証アンケートを実施したのは1授業のみであった(資料3-1-6)。

5週目アンケートの結果は、資料3-1-7に示した通りである。今回の試行授業では、5つの教育力に基づく質問のほぼ全てで、肯定的評価(「はい」「どちらかというとはい)」が80%程度に達していた。そのため、選択肢式アンケートの評価理由の大半は肯定的評価理由の選択肢が回答されていた。肯定的評価理由の選択肢の大半はある程度の高さの回答率を示している(例外は質問3の⑪の板書のみ)。ただし、評価理由の選択肢の間で回答率の差が小さい質問(質問2(知識能力等の確認)、質問4(主体性の引き出し))と、選択肢の間で回答率の差が大きい質問(質問1(学問関心の向上)、質問3(分かり易さ)、質問5(授業改善の試み))があった。なお、否定的評価理由の選択肢の回答率は非常に低かったが、それぞれの質問でやや高めの回答率を示す選択肢が見られた(それぞれの質問の②)。

記述式アンケートでは、理由の記述者比率が多い質問(質問1(学問関心の向上)、質問3(分かり易さ))と少ない質問(質問5(授業改善の試み))があった。学生にとって、前者は理由の記述が比較的容易で、後者は理由の記述がやや難しかったようである。

15週目アンケートの結果は、資料3-1-8に示した通りである。ここでは、「授業改善アクションプラン」に対する肯定的評価が85%と高いこと、授業到達目標の達成に対する肯定的評価が82%と高いこと、授業改善アンケートの効果に関する肯定的評価が76%と高く、負担に関する評価が軽め46%・重め36%と分かれていることが示されている。なお、授業改善アンケートの負担感については、選択肢式アンケート回答者より記述式アンケート回答者の方が軽く感じているという、やや意外な結果が示されている。

(4) 試行協力教員へのアンケート

今回の試行に協力下さった教員に対して、アンケートを実施した（資料 3-1-9）。回答結果は、資料 3-1-10、資料 3-1-11 に示した通りである。

全ての質問項目に関して、全般的に肯定的評価が多かった。また、記述欄には、授業改善効果や従来アンケートと比較しての改善点に関する記入が多く見られた。ただし、以下のような、課題の指摘もなされていた。

①5 週目アンケートの質問項目

- ・語学と（教養的な）講義とは目的が違うので、設問を変えた方が良いのでは。
- ・質問 2 は、受講生のニーズで授業内容を変更しなければならないという印象を教員に与えるので「受講生の知識・能力・興味関心を確認しながら授業を行っていると思いますか」などに変更した方が良い。

②5 週目アンケート（選択肢式）の回答の選択肢設定

- ・選択肢については、今後試行錯誤しながら成熟度を高めていく必要がある

③5 週目アンケート（記述式）の回答の記述形式

- ・両方式で実施したところ、学生からは全て記述式だと回答が大変だという反応、また質問の意味と内容が食い違っている場合があり学生が回答に困っていた

④15 週目アンケート

- ・授業改善を全体的・具体的に把握するために、15 週目にも 5 週目と同様の質問項目を設定した方が良い
- ・（シラバスの「授業目標」をそのまま入れると）質問項目の設定が日本語として不自然となることがある。シラバスの授業目標執筆時にアンケートで使用することを明示しておいた方が良いのでは

⑤コンサルテーション

- ・実施側に受講生の意見を集約できる技量が必要なので、そうした人材を育成できるかが今後の課題となる

⑥その他

- ・学生の負担感に対し、授業を良くするには教員だけでなく学生の努力も求められるのだということを理解してもらう必要がある
- ・学生の負担感があるので、負担のかからない方法での実施をお願いしたい
- ・自由記述をいかに多くの学生に書いてもらうかが一番大きな課題

(5)「授業改善アクションプラン」検討会

年度末に、授業改善アクションプランの FD および試行結果に関する議論を目的に、全学オープン検討会を開催した。この検討会の議論も参考にしながら、現在、来年度の「授業改善アクションプラン」本格実施に向けた検討を進めている。

3. 初年次科目 3 年生アンケートの分析

この課題については、データを整理し、関係分科会での分析を依頼したが、分析・評価をまとめるには至らなかった。

今年度の報告書では、各質問の回答の単純集計データ（学部別データ、課題探求実践セ

ミナーについては学部開設授業別データと学部開設授業以外の授業別データ)のみ掲載しておく(資料 3-1-12~資料 3-1-15。なお、表の「はい」~「いいえ」の数値は回答者総数に対する構成比、平均値の数値は「はい」5点、「どちらかというとはい」4点、「どちらともいえない」3点、「どちらかというといいえ」2点、「いいえ」1点、とした場合の平均点を示している)。これらのデータおよび記述項目に関する分析・検討は、来年度の課題としたい。

【資料】3-1-1 「5週目アンケート」用紙(選択肢式)

共通教育「5週目アンケート」(選択肢式)					
このアンケートは、授業期間内にこの授業を改善するために受講生の意見を聴くものです。 教員を評価するものではなく、また皆さんの成績に関係するものでもありません。 その点をよく理解した上で、この授業を良くするという観点から、適切な回答をお願いします。					
【全授業共通質問】	はい	どちらかというとはい	どちらともいえない	どちらかというといえ	いいえ
★下記の質問に、はい①～いいえ⑤の5段階評価で回答して下さい。					
また、そのように回答した理由を答えて下さい(理由は複数回答可)。[いずれも回答番号を塗りつぶして下さい]					
1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか	①	②	③	④	⑤
① 授業で学問の最先端に触れる話をしている ③ 授業内容が学問や社会の現代的課題に込んでいる ⑤ 授業内容が受講生の関心・興味に合っている ⑦ その他→()	② 授業で学問の最先端に触れる話をしていない ④ 授業内容が学問や社会の現代的課題に込えていない ⑥ 授業内容が受講生の関心・興味に合っていない		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ (⑦にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)		
2. この授業で教員は、受講生の知識・能力および授業に対するニーズを確認しながら授業を行っていると思いますか	①	②	③	④	⑤
① シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している ③ 授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしている ⑤ 受講生の反応を見ながら授業を行っている ⑦ 学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている ⑨ その他→()	② シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示していない ④ 授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしていない ⑥ 受講生の反応を見ながら授業を行っていない ⑧ 学生の理解度を確かめるような問い掛けをしていない		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ (⑨にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)		
3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか	①	②	③	④	⑤
① 授業の目的・目標を明確にしている ③ 声の大きさや話し方が適切である ⑤ 説明の仕方が適切である ⑦ 授業を進める速度が適切である ⑨ 配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である ⑪ 板書が適切である ⑬ その他→()	② 授業の目的・目標を明確にしていない ④ 声の大きさや話し方が適切でない ⑥ 説明の仕方が適切でない ⑧ 授業を進める速度が適切でない ⑩ 配布資料・視聴覚資料・教材などが適切でない ⑫ 板書が適切でない		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ (⑬にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)		
4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか	①	②	③	④	⑤
① 授業の予習・復習を促している ③ 学生が時間外学習を行うための課題を提示している ⑤ 学生の自主的学習に対する助言や支援をしている ⑦ 質問に対して丁寧に答えている ⑨ 課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている ⑪ 授業に参加型学習を取り入れている ⑬ その他→()	② 授業の予習・復習を促していない ④ 学生が時間外学習を行うための課題を提示していない ⑥ 学生の自主的学習に対する助言や支援をしていない ⑧ 質問に対して丁寧に答えていない ⑩ 課題やレポート提出物に対してフィードバックをしていない ⑫ 授業に参加型学習を取り入れている		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ (⑬にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)		
5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか	①	②	③	④	⑤
① 授業を良くするための工夫や熱意が感じられる ③ アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている ⑤ 学生に対して授業を良くするために「皆さんには～して欲しい」といった努力を求める要求をしている ⑦ その他→()	② 授業を良くするための工夫や熱意が感じられない ④ アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させていない ⑥ 学生に対して授業を良くするための努力を求める要求をしていない		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ (⑦にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)		
6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】	左に理由を記述して下さい				
【授業別の質問】(授業担当教員から指示がある場合、その指示にしたがって回答して下さい)	はい				いいえ
1	①	②	③	④	⑤
2	①	②	③	④	⑤
3	①	②	③	④	⑤
質問1の回答理由	①	②	③	④	⑤
質問2の回答理由	①	②	③	④	⑤
質問3の回答理由	①	②	③	④	⑤
【自由記述】					
あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい					
とくに、この授業の「良い点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい					

【資料】3-1-2 「5 週目アンケート」用紙(記述式)

共通教育「5週目アンケート」(記述式)					
<p>このアンケートは、授業期間内にこの授業を改善するために受講生の意見を聴くものです。 教員を評価するものではなく、また皆さんの成績に関係するものでもありません。 その点をよく理解した上で、この授業を良くするという観点から、適切な回答をお願いします。</p>					
<p>【全授業共通質問】</p> <p>★下記の質問に、はい①～いいえ⑤の5段階評価で回答して下さい。[回答番号を塗りつぶして下さい] また回答の理由について記述して下さい。</p>					
	はい	どちらかというとはい	どちらともいえない	どちらかというとい	いいえ
1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
2. この授業で教員は、受講生の知識・能力および授業に対するニーズを確認しながら授業を行っていると思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
【授業別の質問】(授業担当教員から指示がある場合、その指示にしたがって回答して下さい)					
1	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
2	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
3	①	②	③	④	⑤
【回答の理由】					
【自由記述】					
<p>あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい</p> <p>とくに、この授業の「良い点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい</p>					

【資料】3-1-3 「15 週目アンケート」用紙

共通教育「最終週アンケート」(質問用紙)	
<p>このアンケートは、教員が第5週目アンケートをもとに実施した授業改善アクションについて、その効果を検証するものです。趣旨をよく理解してアンケートに答えて下さい。</p>	
<p>★下記の質問項目に対する回答は、マークシート式用紙の回答欄の はい①～いいえ⑤ の5段階評価で回答して下さい。 【回答番号を塗りつぶして下さい】</p>	
【授業改善アクションプランの効果に関する質問】	
1	①授業改善アクションプラン「○○○○○○○○○○(アクションプラン)」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか
2	②授業改善アクションプラン「○○○○○○○○○○(アクションプラン)」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか
3	③授業改善アクションプラン「○○○○○○○○○○(アクションプラン)」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか
【授業到達目標の達成に関する質問】	
4	①あなたは「◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎(授業到達目標)」を達成できたと思いますか
5	②あなたは「◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎(授業到達目標)」を達成できたと思いますか
6	③あなたは「◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎(授業到達目標)」を達成できたと思いますか
【授業改善アンケートの効果と負担に関する質問】	
7	①授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか
8	②授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか
【自由記述】	
<p>あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい とくに、この授業の「良かった点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい</p>	

【資料】3-1-4 「コンサルテーション」学生コメントシート

ミッドターム・スチューデント・フィードバック(中間期の振り返り)学生コメントシート
 ご利用者名: ○○先生 コンサルティング実施日: 2011年○月○○日 授業名:

学生コメント(コンセンサス)

【資料】3-1-5 「コンサルテーション」学生コメントシート

ミッドターム・スチューデント・フィードバック(中間期の振り返り)学生コメントシート
 ご利用者名: ○○先生 コンサルティング実施日: 2011年○月○○日(○・○期) 授業名: ○○○○○○

学生コメント	共通する			教員コメント
	教員 が 認 め る	学 生 が 認 め る	共 同 に 認 め ら れ る	
教材(配布プリント)				
教材(スライド)				
教材(小テスト)				
教材(視聴覚教材)				
教授技法(発声)				
教授技法(質問・フィードバック)				
教授技法(板書)				
課題(レポート)				
評価方法				
学習環境				
授業の雰囲気				
教員の熱意・人柄				
出席・時間管理				

担当コンサルタント: 塩崎敬彦 ©高知大学 総合教育センター 大学教育推進部門

【資料】3-1-6 「授業改善アクションプラン」試行実施状況

授業改善アクションプラン試行の実施状況					
	教員数	授業数	受講 学生数	5週目 回収枚数	15週目 回収枚数
全体	12	16	653	451	536
アンケート	11	14	506	451	478
アンケート(選択肢式)	8	10	317	238	256
アンケート(記述式)	5	7	323	213	222
コンサルテーション	3	3	256	—	58
(注1)一人の教員が複数授業で実施、また一つの授業で複数方式で実施、といった場合があるので、小項目の合計と全体とは一致しない。					
(注2)コンサルテーションは、当初3授業3教員が取り組んだが、授業担当者の交代、授業担当者の入院が生じたため、15週目アンケートを実施したのは1授業1教員のみ。					

【資料】3-1-7 「5週目アンケート」回答結果

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか	
(1)評価	(%)
	平均値
はい	55
どちらかといえばはい	29
どちらともいえない	9
どちらかといえばいいえ	3
いいえ	0
無回答	4
(注)個別授業の結果(回答比率)の単純平均、以下の資料も同様	
(2)選択肢式アンケートの理由回答 (%)	
①授業で学問の最先端に触れる話をしている	24
②授業で学問の最先端に触れる話をしていない	11
③授業内容が学問や社会の現代的課題に込んでいる	34
④授業内容が学問や社会の現代的課題に込えていない	1
⑤授業内容が受講生の関心・興味に合っている	51
⑥授業内容が受講生の関心・興味に合っていない	6
⑦その他	2
無回答	7
(注)個別授業の結果(回答者総数に対する比率)の単純平均、複数回答なので合計は100%にならない、以下の資料も同様	
(3)記述式アンケートの理由の記入者・未記入者 (%)	
記入者	74
無記入者	26
(注)個別授業の結果(記入者比率)の単純平均、以下の資料も同様	

2. この授業で教員は、受講生の知識・能力および授業に対するニーズを確認しながら授業を行っていると思いますか	
(1) 評価	(%)
	平均値
はい	43
どちらかといえばはい	32
どちらともいえない	17
どちらかといえばいいえ	3
いいえ	0
無回答	4
(2) 選択肢式アンケートの理由回答	(%)
① シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している	32
② シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示していない	8
③ 授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしている	34
④ 授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしていない	4
⑤ 受講生の反応を見ながら授業を行っている	39
⑥ 受講生の反応を見ながら授業を行っていない	4
⑦ 学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている	38
⑧ 学生の理解度を確かめるような問い掛けをしていない	2
⑨ その他	0
無回答	9
(3) 記述式アンケートの理由の記入者・未記入者	(%)
記入者	57
無記入者	43

3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか	
(1) 評価	(%)
	平均値
はい	53
どちらかといえばはい	28
どちらともいえない	11
どちらかといえばいいえ	3
いいえ	1
無回答	4
(2) 選択肢式アンケートの理由回答	(%)
① 授業の目的・目標を明確にしている	49
② 授業の目的・目標を明確にしていない	8
③ 声の大きさや話し方が適切である	52
④ 声の大きさや話し方が適切でない	3
⑤ 説明の仕方が適切である	39
⑥ 説明の仕方が適切でない	3
⑦ 授業を進める速度が適切である	27
⑧ 授業を進める速度が適切でない	5
⑨ 配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である	25
⑩ 配布資料・視聴覚資料・教材などが適切でない	3
⑪ 板書が適切である	9
⑫ 板書が適切でない	2
⑬ その他	2
無回答	8
(3) 記述式アンケートの理由の記入者・未記入者	(%)
記入者	71
無記入者	29

4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか	
(1)評価	(%)
	平均値
はい	49
どちらかといえばはい	32
どちらともいえない	12
どちらかといえばいいえ	2
いいえ	0
無回答	4
(2)選択肢式アンケートの理由回答	(%)
①授業の予習・復習を促している	35
②授業の予習・復習を促していない	7
③学生が時間外学習を行うための課題を提示している	37
④学生が時間外学習を行うための課題を提示していない	4
⑤学生の自主的学習に対する助言や支援をしている	31
⑥学生の自主的学習に対する助言や支援をしていない	2
⑦質問に対して丁寧に答えている	31
⑧質問に対して丁寧に答えていない	0
⑨課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている	29
⑩課題やレポート提出物に対してフィードバックをしていない	2
⑪授業に参加型学習を取り入れている	31
⑫授業に参加型学習を取り入れていない	1
⑬その他	2
無回答	9
(3)記述式アンケートの理由の記入者・未記入者	(%)
記入者	60
無記入者	40

5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか	
(1)評価	(%)
	平均値
はい	48
どちらかといえばはい	31
どちらともいえない	15
どちらかといえばいいえ	3
いいえ	0
無回答	4
(2)選択肢式アンケートの理由回答	(%)
①授業を良くするための工夫や熱意が感じられる	56
②授業を良くするための工夫や熱意が感じられない	7
③アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている	25
④アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させていない	3
⑤学生に対して授業を良くするために「皆さんには～～して欲しい」といった努力を求める要求をしている	28
⑥学生に対して授業を良くするための努力を求める要求をしていない	3
⑦その他	0
無回答	8
(3)記述式アンケートの理由の記入者・未記入者	(%)
記入者	49
無記入者	51

6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか		
(1) 評価		(%)
		平均値
はい		50
どちらかといえばはい		33
どちらともいえない		10
どちらかといえばいいえ		2
いいえ		2
無回答		4
(3) 記述式アンケートの理由の記入者・未記入者		(%)
記入者		62
無記入者		38

【資料】3-1-8 「15 週目アンケート」回答結果

【授業改善アクションプランの効果に関する質問】				
				(%)
	全体 (14授業38AP)	選択肢式で実施した 授業(7授業21AP)	記述式で実施した 授業(4授業10AP)	
はい	56	55		59
どちらかといえばはい	29	31		27
どちらともいえない	11	10		10
どちらかといえばいいえ	2	2		2
いいえ	2	2		3
無回答	0	0		0
(注) 個別授業の結果(回答比率)の単純平均、以下の資料も同様				
(注) 同一授業で両方式で実施した教員(1名3授業)の結果は個人結果が明らかになるのでデータを示さない(全体結果には含まれている)、以下同様				

【授業到達目標の達成に関する質問】				
				(%)
	全体 (11授業43目標)	選択肢式で実施した 授業(4授業14目標)	記述式で実施した 授業(4授業17目標)	
はい	40	55		32
どちらかといえばはい	42	37		52
どちらともいえない	11	8		13
どちらかといえばいいえ	5	0		2
いいえ	2	0		0
無回答	0	0		0

【授業改善アンケートの効果と負担に関する質問】			
①授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか (％)			
	全体 (14授業)	選択肢式で実施した 授業(7授業)	記述式で実施した 授業(4授業)
はい	44	46	47
どちらかといえばはい	32	30	39
どちらともいえない	19	19	9
どちらかといえばいいえ	2	1	2
いいえ	4	3	3
無回答	0	0	1

②授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか (％)				
	全体 (14授業)	選択肢式で実施した 授業(7授業)	記述式で実施した 授業(4授業)	両方式で実施した 授業(3授業)
はい	21	22	2	42
どちらかといえばはい	15	12	12	27
どちらともいえない	17	19	16	15
どちらかといえばいいえ	12	10	19	9
いいえ	34	36	50	7
無回答	0	0	1	0

(注)この項目のみ、同一授業で両方式で実施した授業のデータを示している

【資料】3-1-9 「試行協力教員アンケート」用紙

新「授業改善アクションプラン」の試行に関するアンケート

※「授業アンケート方式」で実施された方は、前半部分の【1】にご記入下さい

※「コンサルテーション方式」で実施された方は、後半部分の【2】にご記入下さい

お名前[]

【1】「授業アンケート方式」で実施された方へのアンケート _____

〔1〕5 週目アンケートの質問項目について

1-1 「5 週目アンケート」の質問項目の設定（本学の「5つの力」に対応する形で設定）は、適切だと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

1-2 上記のように回答した理由、および修正・改善すべきだと思いになられた点について、できるだけ具体的にお聞かせ下さい。

〔2〕5 週目アンケートの回答方式について

●選択肢式のアンケートで実施した方は下記の質問にご回答下さい。

2-1 「5 週目アンケート」の質問の回答選択肢の設定は、適切だと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

2-2 上記のように回答した理由、および修正・改善すべきだと思いになられた点について、できるだけ具体的にお聞かせ下さい。

●記述式のアンケートで実施した方は下記の質問にご回答下さい。

2-1 「5 週目アンケート」の質問の回答理由が記述式でしたが、この形式は、適切だと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

2-2 上記のように回答した理由、および修正・改善すべきだと思いになられた点について、できるだけ具体的にお聞かせ下さい。

〔3〕15 週目アンケートの質問項目について

3-1 「15 週目アンケート」の質問項目の設定（「アクションプランの効果」と「学生の諸能力の獲得（授業到達目標の達成）」に絞って設定）は、適切だと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

3-2 上記のように回答した理由、および修正・改善すべきだと思いになられた点について、できるだけ具体的にお聞かせ下さい。

〔4〕実施の感想、改善に関する意見について

その他、「授業改善アクションプラン」について、実施してみてのご感想や、改善に関するご意見などをお聞かせ下さい。

【2】「コンサルテーション方式」で実施した方へのアンケート _____

〔1〕コンサルテーションの実施について

1-1 コンサルテーションの実施方法は、適切だと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

1-2 コンサルテーションによって、これまでのアンケート方式とは異なる、授業改善に役立つ発見があったと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

1-3 上記のように回答した理由、および修正・改善すべきだと思いになられた点について、できるだけ具体的にお聞かせ下さい。

[2]15 週目アンケートの質問項目について

2-1 「15 週目アンケート」の質問項目の設定（「アクションプランの効果」と「学生の諸能力の獲得（授業到達目標の達成）」に絞って設定）は、適切だと思われましたか。

①はい、②どちらかというとはい、③どちらともいえない、④どちらかというといいえ、⑤いいえ
→ () [番号をご記入下さい]

2-2 上記のように回答した理由、および修正・改善すべきだと思いになられた点について、できるだけ具体的にお聞かせ下さい。

[3]実施の感想、改善に関する意見について

その他、「授業改善アクションプラン」について、実施してみてのご感想や、改善に関するご意見などをお聞かせ下さい。

【資料】3-1-10 「試行協力教員アンケート」回答結果(評価)

設問1 (5週目アンケートの質問項目の適切性)	(人)			
	全体	選択肢式で 実施した教員	記述式で 実施した教員	両方の形式を 実施した教員
はい	6	2	4	2
どちらかというとはい	3	2	1	0
どちらともいえない	1	1	0	0
どちらかというといいえ	1	1	0	0
いいえ	0	0	0	0
無回答	0	0	0	0
合計	11	6	3	2

設問2A (5週目アンケートの回答の選択肢の適切性)	
	(人)
はい	4
どちらかというとはい	4
どちらともいえない	0
どちらかというといいえ	0
いいえ	0
無回答	0
合計	8

設問2B (5週目アンケートの回答の記述形式の適切性)	
	(人)
はい	3
どちらかというとはい	0
どちらともいえない	2
どちらかというといいえ	0
いいえ	0
無回答	0
合計	5

設問3 (15週目アンケートの質問項目の適切性)				
	全体	選択肢式で 実施した教員	記述式で 実施した教員	(人) 両方の形式を 実施した教員
はい	4	1	3	0
どちらかというとはい	5	4	0	1
どちらともいえない	2	1	0	1
どちらかというといいえ	0	0	0	0
いいえ	0	0	0	0
無回答	0	0	0	0
合計	11	6	3	2

《コンサルテーションに関する評価》	
設問1-1 (コンサルの実施方法の適切性)	
	(人)
はい	1
どちらかというとはい	1
どちらともいえない	0
どちらかというといいえ	0
いいえ	0
無回答	0
合計	2

設問1-2 (コンサルでアンケートとは異なる発見があったか)	
	(人)
はい	1
どちらかというとはい	0
どちらともいえない	1
どちらかというといいえ	0
いいえ	0
無回答	0
合計	2

設問2-1 (15週目アンケートの質問項目の適切性)	
	(人)
はい	1
どちらかというとはい	0
どちらともいえない	0
どちらかというといいえ	0
いいえ	0
無回答	1
合計	2

【資料】3-1-11 「試行協力教員アンケート」回答結果(記述)

実施方式	設問1 (5週目アンケートの質問項目の適切性)		設問2A (5週目アンケートの回答の選択肢の適切性)		設問2B (5週目アンケートの回答の記述形式の適切性)		設問3 (15週目アンケートの質問項目の適切性)		設問4 (意見・感想) 自由記述
	評価	回答理由	評価	回答理由	評価	回答理由	評価	回答理由	
選択肢式	1	授業改善のアンケートを通じて、教員が自らの教育力のどの部分についての改善や向上があったかということが自覚できるから。	1	選択肢については、今後試行錯誤しながら成熟度を高めていく必要があると考えられるが、 1 今までのアンケートに比べて、授業や指導のどこに問題があるのかより具体的に把握できるようになったと思う。			3	やはり、改善できたかどうかの全体的・具体的な内容を把握するためには、5週目と同じ質問項目(内容)も設定すべきではないと思う。「学生の諸能力の獲得(授業到達目標の達成)」の成果は授業をもっと学生に理解してもらおうが、アンケートを実施する際に必要のように思われる。例えば、アンケートの冒頭に単なるお願いやアンケートの処理に関することだけでなく、このアンケートの持つ本質的な意義についても記述してみてもどうだろうか？	
選択肢式	4	担当している授業は、語学の授業で演習形式+グループワークで行われているため、講義形式の授業とは異なっている。「5週目アンケート」の設問1に「受講生の学問的関心」とあるが、語学能力向上を目的とする授業にはあまり当てはまらないのではないかとと思われる。講義形式の授業と語学の授業とは設問内容を変える等の改善が必要ではないか	2	無回答があまりなかったため			2	シンプルで回答しやすいため。	授業改善アンケートの効果に関しては、「受講生の声によって授業が改善された」と感じる学生がほとんどであったが、アンケートへの回答についての負担に関しては、半数が負担に感じると回答していた。受講生に負担のかけられない方法での「授業改善アクションプラン」の実施をお願いしたい。
選択肢式	3		2				2		学生の要望を把握し、具体的な対策がとれた点は良かった。ただ学生の要望そのものが必要でない場合もある。この一連の作業の結果・成果をどう評価するのが明確にしてほしい
選択肢式	2	ほぼ適切であると思う。	2				2	ほぼ適切であると思う。	
選択肢式	2		2				2		
選択肢式	1		1				1		(記述形式のアンケート項目)記述した学生の数が極端に少なかった。記述形式のアンケート項目をいかに多くの学生に書いてもらうか一番大きな課題である。

選択肢式・記述式	1	教員が気をつけなければならないことへの指針となる	1	数値化できる調査は分析のためには必要だと思います。	3	両方のアンケートをオンラインで実施し、学生にもどちらが回答しやすかったか聞きました。その結果、すべて記述式だと回答が大家だと言うことです。質問の意味と回答が食い違っている場合もあり、学生が回答に際して困っている様子も受け取れました	3	今回五週目で聞いた内容もすべて再度聞きました。五週目と15週目の変化も知りたかったので。	—
選択肢式・記述式(コンサル)	1	これでよいが、「5つの教育力」や「5つの能力(表現力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、異文化理解能力、情報活用能力)」があって、紛らわしい	1	これ以外に思いつかなかった	3	理由がまちまちなので、改善に繋がりにくい。	2	質問項目の設定が日本語として不自然なため、学生が応えにくかったのではないかと考える。シラバスの到達目標の設定時に、アンケートに使用することを明示しておけば、それを意識して記載できると思われる。	
記述式・コミュニケーション	1	種々の考え方はあると思いますが、とりあえず3か年計画に掲げる教育力としては適切なものと考えます。			1	理由の記述を通して、どこを改善したらよいか具体的にわかります。学生の声を聞くことができるという点でも適切だと思います。ただし、「受講生のニーズ」についての質問は少し表現を変えた方がよいかと思います。シラバス記載の段階で、その授業がどのような内容を扱うかは決まっているので、それを学生のニーズによって変更しなければならないかのような印象を教員に与えてしまうのではないかと思います。また、そのような意味から、「授業開始時にニーズ調査をしない教員はよろしくない」といった誤解を受講生に与えてしまうことも考えられます。「受講生の知識・能力および授業に対するニーズを確認して授業を行っていると思えますか」「受講生の知識・能力・興味関心を確認しながら授業を行っていると思えますか」というように訂正してはいいかがでしょうか？	1	アクションプランの効果があつたことが目に見えて、今後の授業改善のモチベーションにもなりました。到達目標に対する回答はあくまでも受講者の自己評価にとどまりませんが、担当者の手こたえと比較していくことを続けることで、学生の諸能力の向上についての判定も可能になるかと思えます。	検証アンケートの項目は、アクションプランの効果がわかるので非常によいと感じました。私のアンケートへの回答としては、受講生がこのようなアンケート調査を負担には感じていないようなので、改善のために授業に参画するという姿勢を涵養するという効果もあつたかと思えます。
記述式	2				1	結構面倒なアンケート方式なので、配布時には学生がしっかし記述してくれるか若干の不安があつた。しかし、授業の最後に10分程度の時間をとり、ぜひ回答理由や自由記述を書いて欲しいと依頼したところ、予想以上に多くの多様な意見が記述されていた。思いがけないような回答もあり、学生の意識を理解するのに有意義であつた	1		
記述式	1	以前のアンケート質問項目は授業実施手法の質問が中心だったが、今回のアンケート質問項目はもう少し深い意味での授業改善・教育力向上に関する問い掛けがなされていたと思う。			1		1	いずれも、授業の効果や成果を知るのに有意義であつた	

評価…1:はい、2:どちらかというとい、3:どちらともいえない、4:どちらかというといえ、5:いいえ

コンサルテーション

実施方式	設問1-1(コンサルの実施方法の適切性)	設問1-2(コンサルでアンケートとは異なる発見があつたか)	設問1-3(回答の理由)	設問2-1(15週目アンケートの質問項目の適切性)	設問2-2(回答理由)	設問3(意見・感想の自由記述)
記述式・コンサルテーション	1	1	検証アンケートの項目は、アクションプランの効果がわかるので非常によいと感じました。私のアンケートへの回答としては、受講生がこのようなアンケート調査を負担には感じていないようなので、改善のために授業に参画するといった姿勢を涵養するという効果もあつたかと思えます。	1	上記、アンケートに同じ。	授業改善のための第4のツールとして充分効果のあるものと考えます。ただし、授業に入って受講生の意見を集約する側にもそれなりの技量が必要となりますので、そうした人材を養成できるかということも今後の課題となるかと思えます。
選択肢式・記述式(コンサル)	2	3	マンパワーを必要とする対面調査でも、従来通りの質問紙調査でも回答の傾向にあまり大きな差が認められなかったから。	—	実施していない。	

【資料】3-1-12 初年次科目アンケート「現状の自己評価」

2-1 あなたは、大学で学ぶことの意義と目的について理解していますか	(%)					
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	28.8	27.4	23.2	27.4	54.1	29.2
どちらかというとい	49.0	46.7	52.5	53.1	37.8	46.0
どちらともいえない	18.6	23.7	19.2	16.6	5.4	19.5
どちらかかというとい	2.5	1.5	3.0	1.7	2.7	4.4
いいえ	1.1	0.7	2.0	1.1	0.0	0.9
平均値	4.02	3.99	3.92	4.04	4.43	3.98

2-2 あなたは、「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学んでいますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	23.2	21.6	26.5	21.7	35.1	20.4
どちらかというとはい	44.5	44.8	43.9	47.4	35.1	43.4
どちらともいえない	24.2	22.4	24.5	24.0	21.6	27.4
どちらかかというといいえ	6.8	11.2	5.1	5.1	8.1	5.3
いいえ	1.3	0.0	0.0	1.7	0.0	3.5
平均値	3.82	3.77	3.92	3.82	3.97	3.72

2-3 あなたは、卒業時にどのような能力をつけておくべきか理解していますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	31.0	30.4	30.5	28.6	62.2	25.9
どちらかというとはい	43.7	42.2	45.3	46.3	32.4	43.8
どちらともいえない	20.0	23.0	17.9	19.4	5.4	24.1
どちらかかというといいえ	3.6	3.0	4.2	5.7	0.0	1.8
いいえ	1.6	1.5	2.1	0.0	0.0	4.5
平均値	3.99	3.97	3.98	3.98	4.57	3.85

2-4 あなたは、専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学んでいますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	42.9	41.5	44.4	33.9	73.0	47.3
どちらかというとはい	39.7	38.5	44.4	43.7	24.3	35.7
どちらともいえない	12.6	14.8	9.1	16.7	2.7	9.8
どちらかかというといいえ	3.8	4.4	1.0	4.0	0.0	6.3
いいえ	1.1	0.7	1.0	1.7	0.0	0.9
平均値	4.20	4.16	4.30	4.04	4.70	4.22

2-5 あなたは、課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけていますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	14.5	15.7	12.1	10.9	32.4	15.0
どちらかというとはい	44.3	38.8	52.5	43.7	40.5	46.0
どちらともいえない	32.5	37.3	25.3	36.2	24.3	30.1
どちらかかというといいえ	7.7	6.7	10.1	8.6	2.7	7.1
いいえ	0.9	1.5	0.0	0.6	0.0	1.8
平均値	3.64	3.60	3.67	3.56	4.03	3.65

2-6 あなたは、双方向のコミュニケーション能力を身につけていますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	18.7	20.1	19.2	14.5	35.1	17.9
どちらかというとはい	41.1	41.0	39.4	39.3	48.6	42.9
どちらともいえない	33.0	32.8	31.3	40.5	16.2	28.6
どちらかかというといいえ	5.4	4.5	7.1	4.6	0.0	8.0
いいえ	1.8	1.5	3.0	1.2	0.0	2.7
平均値	3.70	3.74	3.65	3.61	4.19	3.65

2-7 あなたは、異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解していますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	59.1	60.7	66.7	50.0	64.9	62.8
どちらかというとはい	33.2	32.6	26.3	42.0	32.4	26.5
どちらともいえない	6.3	5.9	7.1	5.7	2.7	8.0
どちらかかというといいえ	1.3	0.7	0.0	2.3	0.0	1.8
いいえ	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9
平均値	4.50	4.53	4.60	4.40	4.62	4.49

2-8 あなたは、グループで議論し合意を形成するための手法を身につけていますか (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
はい	15.4	15.6	14.1	11.6	27.0	18.6
どちらかというとはい	43.3	40.0	41.4	44.5	51.4	44.2
どちらともいえない	32.0	30.4	32.3	35.8	21.6	31.0
どちらかかというといいえ	5.9	8.1	9.1	5.2	0.0	3.5
いいえ	3.4	5.9	3.0	2.9	0.0	2.7
平均値	3.61	3.51	3.55	3.57	4.05	3.73

【資料】3-1-13 初年次科目アンケート「大学基礎論」

3-1 現時点(3年生末)で振り返ってみて、「大学基礎論」は、大学での学びの基礎を培う授業として、効果がありましたか。

	全体	人文	教育	理	医	農
はい	12.0	20.0	9.1	7.5	7.9	13.3
どちらかというとはい	30.9	34.8	37.4	22.4	13.2	39.8
どちらともいえない	33.8	26.7	33.3	42.0	42.1	27.4
どちらかかというといいえ	14.1	8.9	14.1	20.1	21.1	8.8
いいえ	9.1	9.6	6.1	8.0	15.8	10.6
平均値	3.23	3.47	3.29	3.01	2.76	3.36

3-2 下記の能力や理解などを修得するために、「大学基礎論」が効果を持ったものを回答して下さい(複数回答可能) (％)						
	全体	人文	教育	理	医	農
①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること	31.1	40.3	22.2	40.0	8.1	22.2
②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと	35.0	38.0	40.4	33.5	18.9	34.3
③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること	13.3	14.7	12.1	19.4	2.7	6.5
④専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学ぶこと	36.5	41.9	32.3	40.0	13.5	36.1
⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること	24.5	24.8	27.3	18.8	16.2	33.3
⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること	34.1	27.1	31.3	28.8	29.7	54.6
⑦異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること	31.1	26.4	28.3	24.1	35.1	49.1
⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること	40.7	31.8	41.4	38.2	32.4	57.4
⑨効果を持ったものは無い	11.4	14.7	10.1	10.6	24.3	5.6

3-3地域社会や国際社会における大学の役割について、次の問いに回答して下さい。

①あなたはその役割について理解していますか (％)

	全体	人文	教育	理	医	農
はい	13.6	11.1	11.1	16.1	13.2	15.0
どちらかというとはい	41.1	35.6	38.4	40.8	44.7	49.6
どちらともいえない	31.7	36.3	36.4	32.2	31.6	21.2
どちらかかというといいえ	9.7	9.6	12.1	8.6	7.9	9.7
いいえ	3.9	7.4	2.0	2.3	2.6	4.4
平均値	3.51	3.33	3.44	3.60	3.58	3.61

②その理解のために「大学基礎論」は効果をもっていましたか (％)

	全体	人文	教育	理	医	農
はい	6.6	8.1	2.0	6.3	5.3	9.7
どちらかというとはい	19.0	16.3	20.4	19.5	10.5	23.0
どちらともいえない	45.5	47.4	51.0	47.7	36.8	38.1
どちらかかというといいえ	16.7	13.3	18.4	17.2	23.7	15.9
いいえ	12.2	14.8	8.2	9.2	23.7	13.3
平均値	2.91	2.90	2.90	2.97	2.50	3.00

【資料】3-1-14 初年次科目アンケート「学問基礎論」

4-1 現時点(3年生末)で振り返ってみて、「学問基礎論」は、大学での学びの基礎を培う授業として、効果がありましたか。

	全体	人文	教育	理	医	農
はい	15.6	28.1	11.5	12.8	5.3	11.6
どちらかというとはい	37.3	42.2	35.4	37.2	10.5	42.0
どちらともいえない	32.0	20.0	35.4	37.2	50.0	29.5
どちらかかというといいえ	6.9	3.0	7.3	5.8	15.8	9.8
いいえ	8.3	6.7	10.4	7.0	18.4	7.1
平均値	3.45	3.82	3.30	3.43	2.68	3.41

4-2 下記の能力や理解などを修得するために、「学問基礎論」が効果を持ったものを回答して下さい(複数回答可能) (％)

	全体	人文	教育	理	医	農
①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること	24.9	29.8	11.8	31.1	20.6	22.0
②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと	35.6	45.0	41.9	32.9	17.6	28.4
③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること	14.2	18.3	10.8	17.4	8.8	9.2
④専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学ぶこと	44.4	44.3	35.5	53.3	20.6	45.9
⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること	32.2	44.3	28.0	26.9	20.6	33.0
⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること	30.0	35.9	24.7	19.2	29.4	44.0
⑦異なるもの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること	30.5	35.1	25.8	19.8	38.2	43.1
⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること	34.1	37.4	29.0	25.7	32.4	47.7
⑨効果を持ったものは無い	13.9	9.9	16.1	15.0	26.5	11.0

【資料】3-1-15 初年次科目アンケート「課題探求実践セミナー」

5-1 現時点(3年生末)で振り返ってみて、「課題探求実践セミナー」は、大学での学びの基礎を培う授業として、効果がありましたか。

	(%)							
	全体	人文開設 授業	教育開設 授業	理開設授 業	医開設授 業	農開設授 業	学部開設 授業以外	受講授業 未記入
はい	31.5	60.0	35.1	22.9	11.5	14.3	40.2	36.4
どちらかというとはい	40.5	20.0	46.8	54.2	19.2	49.0	34.8	9.1
どちらともいえない	16.3	0.0	10.4	15.7	38.5	22.4	14.7	18.2
どちらかかというといいえ	6.0	20.0	1.3	2.4	11.5	6.1	7.6	18.2
いいえ	5.7	0.0	6.5	4.8	19.2	8.2	2.7	18.2
平均値	3.86	4.20	4.03	3.88	2.92	3.55	4.02	3.27

	(%)						
	学部開設 以外合計	自律協働 入門	地域協働 入門	自由探求 学習	国際協力 入門	学びを創 る	学びを考 える
はい	40.2	47.2	36.8	30.8	50.0	53.3	50.0
どちらかというとはい	34.8	30.6	39.5	36.9	26.9	40.0	25.0
どちらともいえない	14.7	5.6	15.8	20.0	15.4	6.7	25.0
どちらかかというといいえ	7.6	11.1	7.9	7.7	7.7	0.0	0.0
いいえ	2.7	5.6	0.0	4.6	0.0	0.0	0.0
平均値	4.02	4.03	4.05	3.82	4.19	4.47	4.25

5-2 下記の能力や理解などを修得するために、「課題探求実践セミナー」が効果を持ったものを回答して下さい(複数回答可能)

	(%)							
	全体	人文開設 授業	教育開設 授業	理開設授 業	医開設授 業	農開設授 業	学部開設 授業以外	受講授業 未記入
①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること	16.6	20.0	13.2	17.3	8.3	15.2	18.9	10.0
②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと	41.9	40.0	36.8	49.4	20.8	32.6	46.1	30.0
③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること	16.4	20.0	30.3	13.6	12.5	8.7	15.0	0.0
④専攻する学問(専門教育)に関心をもち、意欲的に学ぶこと	24.2	20.0	27.6	30.9	25.0	47.8	14.4	10.0
⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること	44.3	40.0	35.5	49.4	29.2	39.1	49.4	40.0
⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること	56.9	40.0	51.3	63.0	33.3	56.5	60.6	50.0
⑦異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること	50.0	60.0	39.5	44.4	37.5	54.3	57.2	40.0
⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること	60.0	40.0	47.4	65.4	33.3	60.9	66.1	60.0
⑨効果を持ったものは無い	9.2	20.0	2.6	6.2	29.2	2.2	8.9	30.0

	学部開設 以外合計	自律協働 入門	地域協働 入門	自由探求 学習	国際協力 入門	学びを創 る	学びを考 える
①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること	18.9	22.2	16.2	14.3	19.2	28.6	50.0
②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと	46.1	50.0	51.4	38.1	46.2	57.1	50.0
③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること	15.0	22.2	10.8	9.5	19.2	21.4	25.0
④専攻する学問(専門教育)に関心をもち、意欲的に学ぶこと	14.4	11.1	8.1	14.3	19.2	28.6	25.0
⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること	49.4	50.0	51.4	50.8	53.8	28.6	50.0
⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること	60.6	61.1	54.1	57.1	73.1	57.1	100.0
⑦異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること	57.2	61.1	54.1	50.8	65.4	71.4	50.0
⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること	66.1	66.7	59.5	66.7	73.1	64.3	75.0
⑨効果を持ったものは無い	8.9	11.1	10.8	11.1	3.8	0.0	0.0

5-3 あなたは、現在、下記の点について理解していますか。

①「何が問題なのか？」を考える意味を理解していますか？

	(%)							
	全体	人文開設 授業	教育開設 授業	理開設授 業	医開設授 業	農開設授 業	学部開設 授業以外	受講授業 未記入
はい	30.1	40.0	23.4	36.9	34.6	29.2	27.7	54.5
どちらかというとはい	52.0	40.0	57.1	48.8	53.8	45.8	54.3	27.3
どちらともいえない	15.4	20.0	15.6	14.3	11.5	16.7	15.8	18.2
どちらかかというといいえ	2.1	0.0	3.9	0.0	0.0	6.3	1.6	0.0
いいえ	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	0.5	0.0
平均値	4.09	4.20	4.00	4.23	4.23	3.94	4.07	4.36

	学部開設 以外合計	自律協働 入門	地域協働 入門	自由探求 学習	国際協力 入門	学びを創 る	学びを考 える
はい	27.7	22.2	23.7	20.0	57.7	40.0	0.0
どちらかというとはい	54.3	61.1	63.2	61.5	19.2	53.3	25.0
どちらともいえない	15.8	13.9	13.2	15.4	19.2	6.7	75.0
どちらかかというといいえ	1.6	2.8	0.0	1.5	3.8	0.0	0.0
いいえ	0.5	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0
平均値	4.07	4.03	4.11	3.97	4.31	4.33	3.25

②「答え」がない課題に取り組む意味を理解していますか？ (％)

	全体	人文開設 授業	教育開設 授業	理開設授 業	医開設授 業	農開設授 業	学部開設 授業以外	受講授業 未記入
はい	31.1	60.0	23.4	31.0	34.6	25.0	33.9	45.5
どちらかというとはい	45.2	20.0	46.8	48.8	53.8	47.9	41.5	45.5
どちらともいえない	17.5	20.0	16.9	17.9	11.5	18.8	18.6	9.1
どちらかかというといいえ	4.1	0.0	10.4	2.4	0.0	2.1	3.8	0.0
いいえ	2.1	0.0	2.6	0.0	0.0	6.3	2.2	0.0
平均値	3.99	4.40	3.78	4.08	4.23	3.83	4.01	4.36

(％)

	学部開設 以外合計	自律協働 入門	地域協働 入門	自由探求 学習	国際協力 入門	学びを創 る	学びを考 える
はい	33.9	25.7	36.8	29.2	42.3	60.0	0.0
どちらかというとはい	41.5	45.7	44.7	43.1	26.9	26.7	100.0
どちらともいえない	18.6	25.7	7.9	21.5	23.1	13.3	0.0
どちらかかというといいえ	3.8	2.9	10.5	3.1	0.0	0.0	0.0
いいえ	2.2	0.0	0.0	3.1	7.7	0.0	0.0
平均値	4.01	3.94	4.08	3.92	3.96	4.47	4.00

③授業時間外の学習をする意味を理解していますか？ (％)

	全体	人文開設 授業	教育開設 授業	理開設授 業	医開設授 業	農開設授 業	学部開設 授業以外	受講授業 未記入
はい	44.2	100.0	49.4	47.6	46.2	31.3	41.0	63.6
どちらかというとはい	39.4	0.0	37.7	36.9	42.3	47.9	40.4	27.3
どちらともいえない	12.4	0.0	11.7	15.5	11.5	14.6	11.5	9.1
どちらかかというといいえ	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	4.2	4.9	0.0
いいえ	1.4	0.0	1.3	0.0	0.0	2.1	2.2	0.0
平均値	4.23	5.00	4.34	4.32	4.35	4.02	4.13	4.55

	学部開設 以外合計	自律協働 入門	地域協働 入門	自由探求 学習	国際協力 入門	学びを創 る	学びを考 える
はい	41.0	37.1	34.2	36.9	46.2	73.3	50.0
どちらかというとはい	40.4	34.3	50.0	43.1	42.3	20.0	25.0
どちらともいえない	11.5	20.0	5.3	13.8	7.7	6.7	0.0
どちらかかというといいえ	4.9	5.7	10.5	3.1	0.0	0.0	25.0
いいえ	2.2	2.9	0.0	3.1	3.8	0.0	0.0
平均値	4.13	3.97	4.08	4.08	4.27	4.67	4.00

2 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会副分科会長 三木洋一郎(医学部)

1. 各学部における授業の概要

大学基礎論における教育テーマは、①学問の特色と意義、②社会はどんな力を求めているか、③地域社会における高知大学の役割と意義、④コミュニケーション能力の向上、等とされている。授業の構成は、学部ごとに若干異なることに加え、人文学部と教育学部では複数クラスが開講されている。各学部の授業構成は以下のとおりである：

- 人文学部：3学科で違いはあるものの、学科長講義の後、図書館案内、教員による全体講義と少人数クラスでのグループワーク、レポート作成を繰り返し行った。
- 教育学部：全体で6クラス編成とし、教員3名による講義（「大学（教育学部）で学ぶとは」、「大学生活とメンタルヘルス」、「大学と社会」等）と、それを受けてのグループワークでカリキュラムを編成した。
- 理学部：学部長と学外講師を含む5件の講演（「大学で学ぶとは」「4年間を有意義に過ごすために」など。東北大震災を受けて、学科長講義の代わりに防災教育を実施した。）と、7クラスでの少人数グループでのふりかえり・レポート作成を繰り返し、最後にプレゼンテーションを行わせた。
- 農学部：専門教育への接続の違和感を軽減することを目的として、開講数を2コマに増やして実施した。学部長講義のあと、全体を3クラス各10グループに編成し、〈全体講義→各クラスでのグループワーク→プレゼン発表〉を3クール行う講義形態で実施した。3名の学内講師による「FS実習で農学を学ぶ（農学部の学問の特色と意義）」、「地域社会はどんな力を求めているか」、「国際社会における高知大学の役割と意義」等の講義とそれに対するグループワークでカリキュラムを編成した。
- 医学部：医学科・看護学科の合同授業として実施した。「患者さんの視点から見た医療」「望ましい医療サービス」「プロフェッショナルリズム（プロフェッショナルとは）」という3テーマについて、〈講義→グループ討論→発表〉のサイクルを3回繰り返した。グループ討論ではチューターが指導に当たり、発表は全20グループを4分割し実施した。

2. 自己点検活動

H23年度における大学基礎論分科会の自己点検活動として、(1)自己分析シート（1週目、15週目）、(2)学期末アンケート、(3)授業改善アクションプランを実施した。

2.1 自己分析シート（1週目、15週目）

評価項目は、「意欲」「コミュニケーション能力」「社会性」「大学生活」の4領域に分類され、6項目が1週と15週に共通となっている。回答者数は、学期半ばで休学者が出たことが影響して15週の方が少なく1066名（人文学部291名、教育学部154名、理学部278名、農学部177名、医学部166名）であった。設問9-1「総合的に判断して、この授業の満足度は10点満点で何点でしたか」は、およそ5割の学生が8~10点と評価しており、全学の平均値が7.32であった。

1週と15週に共通する6項目全てについて、全学部全学科で評価の平均値が上昇している。その中で最も改善の度合いが大きかったのは、項目6-1/6-2（社会性）「今、自分が身に付けようとしている能力が、今後の社会の中でどのように役立つものなのかを意識して様々なことに取り組んでいる」であり（3.08から3.67に+0.60ポイント）、この授業が教育テーマ②と③で効果を上げていることを示している。一方、改善の度合いが最も小さかったのは、項目4-1/4-2（コミュニケーション能力）「グループや仲間たちと何かをしようと

する時、他人の考え方や意見を理解しようと努力していますか」の+0.27 ポイントだが、この項目は1週の評価が4.05と高く、15週も4.33であるから、教育テーマ④についても効果を上げていると考えてよかろう。15週的全25項目中で平均値の高かったのは、上記の項目4-2のほかに、項目4-3「この授業のなかで、相手の考え方や意見を理解する姿勢が大切であると気づきましたか」の4.43（全項目中の最高値）、項目3-3「この授業のなかで、自分の考えを相手に伝える力の修得が必要であると気づきましたか」の4.38であり、いずれも「コミュニケーション能力」領域であった。これらのことから、グループワークに重点を置いた授業形態が功を奏していることが伺われる。なお、これら「コミュニケーション」領域3項目の評価が高かった学部は教育学部と医学部であった。

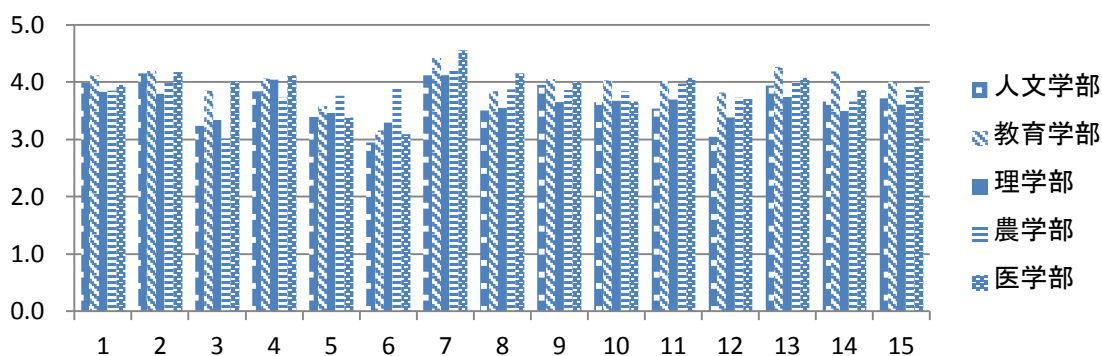
2.2 学期末アンケート

15の5段階評価項目からなる学期末アンケートの結果（学部別平均値）を下に示す。回答者数は1049名（人文学部282名、教育学部152名、理学部273名、農学部176名、医学部166名）であった。

評価が最も高かったのは、設問7「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識することができましたか」（平均値4.25）であった。この項目は、教育テーマ④に対応しており、自己分析シートにおいて「コミュニケーション能力」領域の評価が高かったこととも整合している。

次に評価が高かったのは、設問2「教わるから学びとるへ、学びの姿勢を転換することの重要性を認識することができましたか」（平均値4.04）であり、大学基礎論が教育目標に掲げる“学びの転換”について一定の効果があつたと考えられる。

一方、評価が最も低かったのは設問6「高知における高知大学の存在意義について考えることができましたか」（平均値3.25）であったが、その中であつて農学部での評価が3.89と突出して高くなっている。また、設問3「卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識することができましたか」については、教育学部と医学部が高い評価となっている点で特徴的な結果となっている。



2.3 授業改善アクションプラン

農学部で「相互参観授業」と「意見交換会」を実施した。

（付記）2010年度1月に実施した「3回生対象アンケート」の分析についてデータ全体から見て主体的に学ぶ姿勢がうかがわれ、今後も継続する意義があるとする意見はあつたが、改善提言等の策定に至らなかつた。さらに意見交換会などを開いて検討することを次年度への申し送り事項とした。

3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー副分科会長 齋藤昌人(人文学部)

課題探求実践セミナーにおいて実施された学期末授業評価アンケートを総論的に分析し、あわせて学生のコメントを紹介することで、報告に代える。

アンケートの回収総数は **685**、アンケートのすべての項目において、「はい」「どちらかというとはいはい」が **50%**を超えており、アンケートの数字から見る限り、授業をプロデュースする側の意図はほぼくみ取られているものと思われる。ただし、次の **4** つの質問項目においては、「どちらかというといはいえ」「いいえ」と答えた学生の数が相対的に多く、ほぼ **1** 割を超えている。

- ・ **A-6** 「授業担当者は受講生の予習や復習を含めた授業時間外の学習（自習）を促す指導をしていますか」
- ・ **A-7** 「あなたは、この授業に関して予習・復習を含めた講義時間外での学習（自習）を何らかの形でしましたか」
- ・ **A-8** 「授業から触発されて、関連する本や新聞・雑誌・インターネット等の記事を読みましたか」
- ・ **A-9** 「グループワーク等において、担当教員から適切な助言やサポートを受け、それを役立てることができましたか」

これら項目において否定的回答が多かったといっても、それは全体のせいぜい **1** 割を超える程度であり問題とするほどではないともいえる。ただ、自主的な学習に関する項目であるだけに気になるところではある。特に **A-8** の「授業から触発されて、関連する本や新聞・雑誌・インターネット等の記事を読みましたか」については、否定的回答は **2** 割を超えている。この点、今後の授業で改善の必要があるかもしれない。

アンケート中の自由記述欄に書かれていたことも、質問項目に対する回答と同様、全体としては肯定的なコメントが並んでいる。ただ、以下には今後の参考のために、あえて「否定的」なコメントを挙げておく。

クラス①

- ・最終レポートとはいはいえ、1人で **18~24** 枚分もあるのは、少し多過ぎでは・・・？

クラス②

- ・ **1** 回目のときも、一人でプレゼンテーションを行った方がいいかなと思いました。1回目に失敗していれば、**2** 回目にするときに1回目の改善点を生かして、プレゼンテーションを行うことができると思いました。

クラス③

- ・**先生の話が長かったです。
- ・もう少し議論できる時間があるとよい。
- ・話し合いの時間が少なく、グループで集まる時間を他であまりとれなかった
ので、発表の話し合いをしづらかった。
- ・他の班のプレゼンテーションまでの準備を見てみて、一部の人だけが準備し
ている感があった。
- ・教室が広いから集中しにくい気がした。
- ・インタビュー方式は話し合いしづらくてやることが進まないと思った。
- ・グループでやるのも楽しいけど、勉強は1人でやる方が楽だと感じた。

クラス④

- ・あまりにも自由で少し困った事が多かった。
- ・最後の発表で失敗し、満足できずに終わってしまった。グループワークとはい
え、誰でも失敗はありえるのだから、成果主義的な評価の仕方はせず、発表
までのプロセスをよく見る評価の仕方をしないと、授業の意味がない。また、
仕方ないかもしれないが、発表は一度の授業で全てしないと意味がない。2回
の授業でするとなると、2回目の授業で発表する方が有利なのは目に見えてい
る。また、二授業にわたって発表することにより、調べる時間が少なくなって
しまう。調べる期間ももう少し長くないと結論を出せなかったり、発表準備を
する時間がとれない。発表を2回にわけることによって生じる不公平の解消法
として、1回目の授業のときに全ての班の発表資料を先生が回収し、それを使
って発表すれば2回目の授業で発表する方が有利になることはない。5限目な
ので、終了時間にこだわらなければ1回の授業で全ての発表を済ませることも
可能である。そのあたりを工夫すれば、もっと意味のある授業になる。
- ・最初に、あるテーマを課し、それを発表させる。そのあとで自分達だけでテ
ーマを決め、調べさせるといった方法がいいように思う。
- ・なかなか自分達の中では問題点がみつけれなかったです。
- ・班によって待遇が違う気がしました。水質汚染だったり酸性雨が題であつた
りした班には pH を調べる道具を貸したり、助言が多くて、音についてなど、
よく分からないと判断されている班には助言がほとんどなかったり、手をかさ
なかつたり・・・。もっと平等にしてほしかったです。
- ・グループワークよりも個人で好きなものを調査したかった。
- ・発表中、他の班の私語がうるさいところがあった。発表中、先生が寝ている
時があった。
- ・意義がある授業だったと思う。問題としては、時間の少なさ、グループの多
さだと思う。短い時間の中で、問題を見つけ、解決することに加え、グループ
ワークであり、完成度は低かった。また、グループの多さで、他のグループに
かまっていられない、というのがあり、グループ間での意見交換もなかった。

クラス⑤

- ・教室の環境をもっと良くしてほしい！（空調とか・・・）
- ・グループで話し合った後、個人でまとめよう！ってなった時に、先生が来て「この班は全然、話し合いができてない」と言われたのは気分が悪かった。本当にグループ内で話し合いができてるのかできてないか、もっと丁寧に見てほしかった。
- ・教室の空調設定温度が高い。
- ・こういう授業をやっても、たいていは1人か2人がプレゼンや原稿を作り、何もやっていない人たちと一緒に単位をとる。正直にとりかかる人間が損をするような授業は二度と受けたくない。必修科目でなければ絶対に受講していない。教員の数が多すぎる。私の教室でいえば、**先生だけで十分事足りたと思う。学問基礎論、大学基礎論でもプレゼンは嫌という程やらされているので、今更この科目で得るものなどない。
- ・誰かが一人でやってしまう傾向があると思うので、みんながそれぞれの仕事をできるようにした方がよい。
- ・どうしてもいい事で時間をとりすぎてた場面が何度かあったと思います。もうちょっとアバウトでも。
- ・進行が悪かったのと、説明がよくわからないことが多かった。
- ・1人の先生がこの講義を支配していた。自分の知識を披露するために質問するのはやめてほしい。
- ・**先生の進め方がぎこちない。**先生の生徒へのむちゃぶりがひどい。質疑応答の時間が先生の講演になってる。
- ・授業の進め方が悪く効率が悪い。無駄が多い。
- ・授業の進め方が柔軟性がない上に安定せず、「学生にまかせる」ということをしないが故、学生が伸びない様に感じる。

クラス⑥

- ・様々な先生の話聞いてメモをとったのだが、その後に伝えられるお題と見当違いのことを書いていることが多くあった。事前にお題を伝えて欲しかった。
- ・もう少し、発表までの時間に余裕をもってもいいのではと感じた。一週間程度では良いものを作るのは難しい。（グループで協力するのならなおさら）
- ・KJ法など模造紙を作る作業は時間内に終わらせるのも大切なことであるが、どうしても時間がかかってしまうので、もう少し時間をかけて作成したかった。（パワポなどは時間外でも集まって作れるが、模造紙の提出・撮影は授業終わりとは決まっていた為、時間的制約が大きいように感じた。）
- ・前半部、KJ法やファシリテーショングラフィックなどで時間が足りず、有用性があまり伝わらなかったり、その割に後半はゆったりしていて配分がよくなかったのではないかと思う。
- ・「大学基礎論」と「課題探求実践セミナー」の内容がとてもよく似ていると感じることが多かった。授業名を分ける必要はあったのかどうかよく分からない

い。プレゼンテーションの仕方やレポートの書き方の練習ができたことは有意義だと思うけれど、できればもっと細かくフィードバックをしてほしいと思った。自分のプレゼンやレポートはどれぐらいの評価なのか、具体的にどこをどう改善したらより良くなるのか、他の人のプレゼンを見ていて「これはいいな」「これは真似しない方がいいかも」とぼんやり感じることはあっても、明確になりにくいと感じた。人数が多いので先生がいちいちフィードバックするのは無理があるかもしれないが、例えばプレゼンテーションの後などに、学生からの質問タイムならぬ「ダメ出しタイム」があってもいいような気がする。特に似たようなテーマのプレゼンが続く時に、発表グループ以外の学生もより有意義に過ごせると思う。

- ・他の授業でこの「課題探求実践セミナー」と似たような内容のものが多く混乱してしまう。

- ・グループワークの時間が短すぎるように感じた。

- ・課題探求実践セミナーの班が途中から大学基礎論の班と同じになっていた。班のメンバーにとっても恵まれたため、私としてはとても満足しているのだが、顔触れが全くかわらないというのは新たな意見を得る機会が減ることにもなっていたのかなと考えると少し残念である。

- ・教員はきちんと授業すべき。プレゼンのノウハウだけ少しやって、自分の授業にネタをしこんでおきながら、グループ発表会で他の班がネタをしこんでおくとそれに反応して気分が悪くなり、暴言を吐く。正直意味がわからなかった。

クラス⑦

- ・テストがある意味が分からない。
- ・もう少し問題をはっきりしてくれても良かったのではないかと思います。
- ・発表の際に教室が狭いと感じました。。
- ・グループメンバーの編成に問題がある。

クラス⑧

- ・長くて集中ができない
- ・夏休み中に散々時間外で活動させた挙句、3000字ものレポートを書かねばならないのは納得いかない。
- ・アイスブレイクの仕方をもう少し工夫してほしい
- ・講義を長々聞くよりは、もっと体を動かす体験をしたかった。
- ・マイクの声が大きすぎたりクーラーが寒すぎたりして、快適な空間というわけではなかった。とにかく声でかくて生徒の発表をあとからダメ出ししたり書き加えたりするのはうれしくないです。
- ・人がけっこうかぶったので、もっとかぶらない方法にしてほしかったです。
- ・どこかの現場で実際に作業してみたい。
- ・講師の人が来るのはいいことだと思うが、一方向性に導きすぎている。話も長いし、みんな疲れている感じだった。社会に出て、どうこう言う前に大人の

方が時間を守らないことには何も始まらないと思う。ワークショップの企画が何のための物なのかわからない。企画のための企画なら質問してもいいと思うこともあるが、「会費はいくら？」などの質問はナンセンスです。得たことも多く、講師の方々も一生懸命やっていたとは思いますが、授業はあくまでも、学生のものであることを意識してほしかったし、時間を無駄にしてほしくなかった。

- ・講義が長いと眠い。
- ・夏休みにやったボランティア活動は他人に報告してもらうよりも、自分でやった方がプレゼン能力があがるのではないかと感じました。他人の報告を伝えるなんて今のプレゼン能力ではとても失礼な気がします。
- ・無理やり質疑しないといけないのがしんどい。どうせマイクがまわされるからと質問しにくかった。
- ・自分はすごい楽しかったがやる気のない人もちらほらいてモチベーションが下がった。本当にやる気のある人だけ来てほしい。
- ・終わる時間が不明確。また休憩時間がとりにくかった。
- ・課題（活動報告）が明確ではないと思った。枠を作らないという点ではいいと思うのだが、何かもっと案があればいいのじゃないかと思った。
- ・講義の時間が長い
- ・もう少し具体性のある話も聞きたい。
- ・ワークショップの時間が短くて、意見がまとまりきっていないまま発表という時がありました。
- ・講義や先生方のコメントを少なくしてワークショップやまた別のなにかに当てればよいと思う。
- ・休憩の時間配分を考えてほしい。
- ・あまりに分野が広すぎて、生徒の意見がまとまりきっていない。実際に具体性を持っているプランが少なかった。

クラス⑨

・実習などはとてもよかったが、ワークショップなどでのグループワークの時間が長すぎてやる事がなくなってしまったりぐだぐだした。授業自体もいつも延長していたしそのへんは改善してほしい。

クラス⑩

- ・無くても良いと思います。
- ・もっと目的を明確にして、学生側に伝えたほうが良かったと思う。フレンドシップ事業におけるパンフレットに「高知大学のお兄さん・お姉さんと遊ぼう」と書いていたのでは、学生側が教育を意識して活動することは子どもたちに悪いと思う。遊ぶなら遊ぶ、学ぶなら学ぶ、とはっきりさせたほうが良い気がする。
- ・活動の時に、大学の教員がいるが、別に必要ないと思う。その教員が「静か

に！」などの呼びかけを行っていたが、それも将来のために大学生がしきってやることだと思う。活動中も、特に参加することなく、座っているだけだったので、必要ないと思った。

- ・青少協と教授と学生のコンタクトをしっかりとってほしい。
- ・自分の役割がはっきりと分けられ、それさえこなせば良いという雰囲気全体にあり、すべての取り組みに全員が全力で取り組んだとは言えないと思う。

クラス⑪

- ・理学部 1 年生は、必須科目だから、前期に 1 年生全員が“課題探求実践セミナー”の授業をとれるようにすれば良いと思います。
- ・具体的な活動に入るまでが長かった。
- ・自己分析アンケートに氏名を書かせないでほしい。先生が話してばかりで、あまり課題を探求できなかったと思う。

クラス⑫

- ・授業の計画や進行が適当であるため毎回ぐだぐだになっていると思います。やるならやるでちゃんとやってほしいです。
- ・授業時間外にやることが多い。正直そんなに暇じゃない。班全員の都合が合わず、集まるのが難しい。
- ・おもしろみを感じなかった。
- ・グループ変更をした方がいいと思う。マンネリ化する。
- ・「どうしてそのテーマにしたのか」を教えていただけたらよかった気がします。

4 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会分科会長 西村安代(農学部)

学問基礎論は、各学部によって実施形態が大きく異なるため、自己点検評価も基本的には学部ごとに行っている。そのため、学部ごとに自己点検評価活動について報告する。

1. 医学部医学科

医学科では、2011年度の学問基礎論において以下の内容で講義を行った。

- ・ 医学部で何を学ぶか
- ・ 高知大学について
- ・ 入学後の健康管理について
- ・ 東洋医学入門
- ・ 医学英語入門（複数回）
- ・ 循環器学入門（複数回）
- ・ 性差医学入門
- ・ 長寿医学入門

学生へのアンケートでは、各講義の満足度についての評価を求めた。1～10の10段階で、平均的な評価を5として記載する形とした。ただし、平均的とした5の基準が曖昧であり、満足度の評価には今後はVASなどを用いたり、記述式評価を合わせて行う工夫が必要である。

表 アンケート結果

講義名	評価
医学部で何を学ぶか	7.6±1.7
高知大学について	6.7±1.9
入学後の健康管理について	6.8±1.9
東洋医学入門	8.4±1.7
医学英語入門（複数回）	7.5±1.8
循環器学入門（複数回）	7.5±1.6
性差医学入門	7.4±1.8
長寿医学入門	7.4±1.8

今後希望する講義内容の調査では、外科学入門（65%）、臨床医の体験談（77%）、卒後の進路（79%）についてなどの希望が多かった。他はプレゼンテーションの方法（37%）、レポートの書き方（45%）、医学史（41%）、医療通訳・医療の国際化（46%）、論文の読み方（36%）などは半分以下に留まった。

1年次での共通教育と専門教育に関する質問に対しては、共通教育は絶対必要が19%、ある程度は必要が65%である一方で、1年次から専門課程の学習を希望する学生が52%、少なくとも医学入門の話は聞きたいが48%で、専門は2年次以降でよいと答えた18%を大きく上回った。

2. 教育学部

教育学部では、昨年度まで実施してきた5週目・15週目アンケートや授業改善アクションプランを踏まえた授業を実施した。意見や改善点としては、以下の報告が上がっている。

- ・ シラバスの書き方や授業の進め方について、担当教員間で意見交換をしたことが、授業の実施の際に役に立った。
- ・ 「学問基礎論では、演奏にあたっての基礎知識が少ないことを実感した」と語ってくれた学生が多かったので授業の概要で述べたように来年度も基礎知識の充実を図っていきたい。
- ・ レポートによると授業で行った内容が自分が思っていた以上に、学生にとって良かった題材があったので次回にも生かしていきたい。
- ・ 1時間目ということもあり、眠そうな学生（遅刻も含む）や、欠席の多い学生もみられたのでサポートしていく必要があるだろう。

H23年度は、1時間目の授業への遅刻が目立った。1年生から1時間目の授業に出られないような生活リズムを直すよう、指導を行う必要がある。

- ・ 各種情報検索などパソコンを利用することが多く、情報末端のある部屋で授業をする方が効果的であった。
- ・ クラス分けの改善点として、平成24年度は学生が授業テーマ（授業担当教員）を選択する際に、最初から授業テーマに基づいて選択するのではなく、授業担当者の講義を一通り受講した後で学生の受講希望を聞き、20人程度のクラスに分けをしていく方法で行なう。

3. 理学部

理学部では、学生は入学時には理学部生としてどのコースにも配属しておらず、1年生修了時にコースを決定する。従って1年生の2学期に開講される「学問基礎論」は、すでに配属先が決定している他学部とは異なり、学生がどのコースに進むかを考える場でもある。「学問基礎論」の前半2/3は理学部の各コースでどのような教育研究が行われているのかを紹介する講義が行われ、後半1/3は希望するコースで演習が行われる。このような性格の「学問基礎論」を評価するために、以下のシンプルな設問のアンケートを行った。

- ①あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。
- ②あなたの目指す学問分野を極めるにあたり、どのような能力をつけていくべきか考えることができましたか。
- ③自分自身で考えるためのきっかけ・視点・知識などを得ることができましたか。
- ④コース別演習において、担当教員から適切な助言やサポートを受け、それを役立てることができましたか。

以上の設問について「はい」から「いいえ」の5段階で評価させた。

さらに、以下の設問に対して、自由に記載させた。

- ・ 1年生の終了時に主専攻のコースを選択するという理学部のシステムに関してどう思いますか。
- ・ このような授業を1年生の2学期に実施することに関してどう思いますか。
- ・ その他この授業に関して、あなたが感じていることを自由に記述して下さい。

5段階に評価させた質問では、平均して3の後半から4の前半程度の評価が得られており、この講義はおおむね好評であったと判断できる。問題点としては、①～③の設問と比較して④がほとんどのコースにおいて低い評価を受けており、コースごとに分かれてからの演習に工夫が必要かもしれない。

自由に書かせた設問に対しても、7～8割程度の記載があり、真面目に丁寧に回答されていた。回答の内容もほとんどは好意的な評価であった。実施時期に関しては現在の2学期よりも1学期にすべきとの意見が多く見られ、今後の検討が必要である。

4. 人文学部

(1) 「5週目アンケート」の結果に関する分析・感想、学生への要望など

- ① 学問的関心や知的好奇心を高めるように進めているかについては、はい75%、どちらかといえばはい13%である。今後、具体的な事例や体験を通じて高められるように進めたい。
- ② 学生の知識・能力、ニーズを確認しながら進めているかについては、はい50%、どちらかといえばはい38%である。今後、学生の知識・能力やニーズを適切に把握できる機会を増やしていくよう努める。
- ③ 分かりやすい授業をしているかについては、はい63%、どちらかといえばはい25%であった。これらが100%に近づくよう、説明をより丁寧に行い、疑問質問を確認していくよう努める。
- ④ 意欲的・自主的な学びを引き出す工夫をしているかについては、はい63%、どちらかといえばはい25%である。具体的な機会をつくることを考えていく。
- ⑤ 授業をよりよくするための試みをしているかについては、はい63%、どちらかといえばはい25%であった。また、総合的に満足がいくかについては、はい75%、どちらかといえばはい25%、いいえが7%であった。これらについて、不十分な点を確認し、具体的な改善策を示したい。

(2) アクションプラン

- ① 授業目的や課題について、グループの課題を毎回明確化し、グループ毎に作業課題を明確に示していく。

また、学習の目的をもう一度明確にし、各回の演習活動がどのように関連しているか説明する。

- ② 演習活動の進捗や量について、毎回の作業課題や時間を考慮し、今後十分配慮していきたい。また、学生に対しても、遠慮なく要望が出せるよう配慮する。
 - ③ 毎回の作業課題と到達目標を明確にし、それに向けた下調べを時間外学習の課題とし、そのための指導を行っていく。
 - ④ 学生が獲得したいと考える知識・能力について今一度話し合い確認し、それをふまえて、演習の目的や課題を修正・追加し、その方法について学生とともに考え、工夫する。
- (3)「最終週アンケート（アクションプラン検証アンケート）」の結果に関する分析・感想
(アクションプランの項目に連動して記述して下さい)
- ① 毎回、その日の演習活動の目的と到達目標を確認したことで、学生の理解を得ることができた。
 - ② 演習活動の進め方や進捗・量、について、授業中に時間を取り話し合った結果、十分改善できた。
 - ③ 下調べや時間外学習については、より具体的な指示や指導が必要であった。
 - ④ 学生が獲得したい知識・能力に関して、演習活動の目的やプロセスをより明確化し、長期的な視点で指導する必要がある。
- (4) 次年度への課題
- ① 時間外学習を行うために必要な指示や指導をより具体的に行う。
 - ② 演習活動の目的やプロセスをより明確化し、初年次演習から長期的な視点で指導する必要がある。

5. 農学部

農学部では、1年生ではコースに所属しておらず、学問基礎論がコース決定を左右する科目の一つとなっている。第5回までは各コース説明など全体講義を行い、第6回以降は、第6～10回、第11～15回の2クールに分かれ、異なるコースで授業を行うことになっている。本年度の新たな試みとしては、1年時に農学部に来る機会を増やすために2回農学部に来て学問基礎論の担当以外の教員とも会う機会を作った。各コースの授業内容はディベートや各教員が話題提供した後、グループワークし最終的にプレゼンを行うなど様々である。授業アンケートは実施していないが、レポートでは授業に対する感想を書かしているところが多く、その感想をまとめた上で次年度の授業改善に役立てている。また、翌年度の2年生のオリエンテーション時に初年次科目全体のアンケートを実施した。学問基礎論に関する内容は、①コース分属やコース内容を理解する上で役に立ちましたか。②2回物部キャンパスで実施しました。物部での授業は役に立ちましたか。③物部キャンパスでの土曜日開講は学生生活上負担ではありませんでしたか。の3設問である。授業の感想では、『グループワークはする度に新しい発見がある』、『自分の意見をうまく伝えられなかった。』、『もっと積極的に話すようになりたい』、『単語しか知らなかったものが、調べることで多くの言葉と関連していることがわかった』、『他の人の意見を聞き、理解し、得ることもたくさんありました。』などがあった。中には、推薦入学で既にコースが決まっているため授業に対するモチベーションが低かったとの意見もあり、講義全体がコース説明を兼ねているところもあるため、推薦入学合格者に対する配慮をすべきと感じた。また、グループ内で協力しない学生がいて困るなどの意見もあり、学生間でのコミュニケーション作りについて工夫をする必要がある。

5 人文分野分科会

人文分野分科会副分科会長 増田匡裕(人文学部)

人文分野分科会では、平成23年度には特筆すべき自己点検・自己評価活動を行っていない。理由は以下の3点である。

第1の理由は、自己点検・自己評価部会の組織運営に問題があり、平成23年度の部会としての活動方針が明確でなかったことである。教育力向上3か年計画の「第Ⅰ期」を踏まえた「第Ⅱ期」の活動の端緒という位置づけであるということは至極当然であるが、分科会に諮られずに「第Ⅰ期」のものとはほぼ変わらない自己点検活動の案内が各教員に届くなど、部会長からの指示が分科会の頭越しに上意下達される状態になっており、分科会としてはそれに対してコミットメントをする機会がなかった。また開催された3度の部会のうち、人文分野副分科会長が出席できるときに会議が招集されたのは、第1回の1度きりであった(但し、第2回については、急遽都合を付けて出席している)。このような状態では、部会と協調した活動は困難である。

第2の理由は、平成24年度のカリキュラム編成において科目の大幅な改廃が検討されたため、個別科目・題目の自己点検・自己評価には相応しい時期でなかったことである。人文学部人間文化学科の平成24年度以降のカリキュラム改革及び、外国語分科会の「ノルマ」の見直しによる基礎数の改訂の影響で、人文分野科目には、教養科目から共通専門科目への移行を含め、かなりの数の科目が廃止・新設された。廃止された科目・題目については、共通教育科目としての使命を終えたといえるため、自己点検・自己評価の対象として適切とはいえない。

第3の理由は、過去の人文分野分科会の自主的な自己点検・自己評価活動で主たる問題として挙げられていた、受講者数の適正化の問題と物部キャンパス出講の問題の解決について、分科会長が粘り強い交渉をしている最中であったことである。問題解決のためのエヴィデンスはある程度出揃っているが、その一方で、平成24年度カリキュラム編成で科目の改廃を行っているため、新年度の問題解決の資料としては相応しくない。

そのような中で、分科会構成員2名が、どちらも教養科目において、部会長からの呼びかけに応じた自己点検・自己評価活動を実施した。教員1名が「第1

期」型の自己点検・自己評価活動である「5週目アンケート」を実施したのに加え、別の教員1名が「第Ⅱ期」型の活動である所謂“コンサルテーション”なるものを実施し、「5週目アンケート」との比較を試みた。この“コンサルテーション”なるもの(この名称が不適切であることは、既に別の会議でも指摘されている)については、人文分野分科会長及び副分科会長も参加した。

これら2つの活動報告を見る限り、「5週目アンケート」には質問項目の妥当性及び信頼性の問題が依然として残っていることは明らかである。その問題点が、平成23年度の自己点検・自己評価部会でなされなかったのは、今後の「第Ⅱ期」の活動の成功の可能性を低くするものであるだろう。例えば「講義形式の教養科目における『予習復習』の必要性」について、学生や教員の間にコンセンサスできていない中で、調査項目に加えることは適切ではない。コンセンサスできていないことを調べるのが目的であり、個々の教員の能力を調べるものではないというのが「5週目アンケート」の趣旨であれば、そもそもその趣旨についてのコンセンサスがない。ただ、遅きに失したきらいはあるが、今年度の自己点検・自己評価部会で、この趣旨が誤解されていることが様々なデータで明らかになったことが、ひとすじの光明として評価できよう。

「5週目アンケート」の危険性は数値が一人歩きする虞があることである。今回これを実施した教員が「学生に媚びた授業はしたくない」と明言しているのは何故なのか、これを真摯に検討するのが自己点検・自己評価部会のあるべき役割であることは間違いない。

所謂“コンサルテーション”なるものについては、まだ試行段階であるためにその評価は難しいが、シラバスの読解が乏しく、授業の運営に対して自己中心的な理解をしている学生に対して、教員の趣旨を言い含める機能があるという可能性が発見できた。但し、フィードバックに対する学生の要望に応えるには、ティーチング・アシスタントの雇用を検討する必要がある。アクションプランの遂行には補正予算を計上する必要があることを忘れてはならない。

尚、この“コンサルテーション”なるものを実施した教員のアンケートに、授業評価アンケートの負担感に関する質問項目があったが、これはエヴィデンスとするには疑義が残る。所謂“アンケート疲れ”がこの程度の方法で測定できるなら、誰も苦勞しない。また、この問題が授業時間という“質の担保”なるものと分離できないにもかかわらず、それが無視されているのでは本末転倒である。

6 社会分野分科会

社会分野分科会長 中澤純治（人文学部）

今年度の社会分野では、学期末アンケート1題目、授業改善アクションプラン5題目（1学期3題目、2学期2題目）で実施した。

5週目アンケートの結果から、アンケートを実施した全ての授業での授業評価は概ね良好（平均点で4.0前後）であった。共通した課題としては、これまでも指摘されている「学生の予復習の項目」が今年度についてもいずれの授業でも充分ではない結果となっていた。従来から指摘されているように、あらかじめ授業を組み立てる際に、提供する授業内容とリンクした予習・復習を導入することが大切であり、そうしたつながりが学生の取り意欲の向上に繋がると考えられる。

表1 2011年度社会分野 5週目アンケート集計結果（3題目合計）

		5点	4点	3点	2点	1点	有効 回答数	平均
設問1	目的・課題	112	64	17	4	1	198	4.4
設問2	声・話し方	157	31	6	3	1	198	4.7
設問3	説明	92	64	31	9	0	196	4.2
設問4	進度・量	39	15	138	1	5	198	3.4
設問5	資料・教材	95	70	24	7	1	197	4.3
設問6	質問対応	104	56	30	7	1	198	4.3
設問7	熱意	105	67	23	1	1	197	4.4
設問8	学生意欲	60	81	45	8	4	198	3.9
設問9	学生予復習	7	27	52	49	63	198	2.3
設問10	学生興味関心	57	77	48	12	4	198	3.9
設問11	学生知識能力	35	79	65	13	6	198	3.6
設問12	学生満足度	77	76	31	13	1	198	4.1

※他の2題目については、記述式アンケートで実施しているため設問等が異なるため集計から除外している。

15 週目アンケートの結果から、一部の授業で評価項目を若干落としている授業が見受けられたが、5 週目アンケートの結果を受けて適切なアクションプログラム設定がなされ、授業改善がなされており、授業評価の向上にも繋がっている。特に、「学生の予復習の項目」については大幅に改善されていることから、事前に適切な予習・復習について設計することで、より良い授業内容を提供できると考えられる。

表 2 2011 年度社会分野 15 週目アンケート集計結果 (2 題目合計)

		5点	4点	3点	2点	1点	有効 回答数	平均
設問1	目的・課題	105	66	17	4	2	194	4.4
設問2	声・話し方	140	43	7	1	3	194	4.6
設問3	説明	72	73	36	11	2	194	4.0
設問4	進度・量	38	27	123	2	3	193	3.5
設問5	資料・教材	96	64	23	7	4	194	4.2
設問6	質問対応	106	68	13	4	3	194	4.4
設問7	熱意	97	67	21	7	2	194	4.3
設問8	学生意欲	48	58	62	20	6	194	3.6
設問9	学生予復習	15	35	43	37	63	193	2.5
設問10	学生興味関心	62	74	43	11	4	194	3.9
設問11	学生知識能力	39	72	63	18	2	194	3.7
設問12	学生満足度	77	64	40	12	1	194	4.1

※他の 2 題目については、記述式アンケートで実施しているため設問等が異なるため集計から除外している。また、上記のフォーマットで 5 週目アンケートを実施した 3 題目のうち 1 題目が 15 週目アンケートを実施していないため、有効回答数はほぼ一緒ではあるが集計は 2 題目となる。

7 生命・医療分科会

生命・医療分科会副分科会長 野田智洋(医学部)

1. スポーツ科学講義

本年度も、岡豊キャンパス開講のスポーツ科学講義においてのみ、授業評価アンケートを実施した。(設問 12) 全体としてこの授業にあなたは満足していますかとの評価は 4.44 と良好な結果を示している。

表 1 スポーツ科学講義(生命・医療分野)集計結果(評価項目と平均値および標準偏差)

質問項目	平均値	SD
(1)1 毎回の授業の目的や課題は、明確にされていますか	4.72	0.58
(1)2 教員の声や大きさや話し方は、聞き取りやすいですか	4.84	0.4
(1)3 教員の授業内容の説明は、分かりやすいですか	4.73	0.59
(1)4 授業の進み方や内容量は、あなたにとって適切ですか (①速すぎる・多すぎる、③適当、⑤遅すぎる・少なすぎる)	3.49	0.8
(1)5 配布資料・視聴覚教材・テキストなどは適切に利用されていますか	4.58	0.61
(1)6 教員は、受講生が質問や意見を述べる機会をつくり、それらに答えていますか	4.44	0.77
(1)7 授業に対する教員の熱意を感じますか	4.73	0.57
(1)8 あなたは、この授業に意欲的に取り組んでいますか	4.31	0.86
(1)9 あなたは、この授業の予習や復習をしていますか	2.31	1.31
(1)10 あなたは、この授業によってこの分野への興味・関心が高まっていますか	4.05	1.06
(1)11 あなたは、この授業で身につけることを期待した知識や能力を得ていますか	3.95	0.97
(1)12 全体としてこの授業にあなたは満足していますか	4.44	0.81
(2)A この授業はあなたの今後の生活の参考になるものでしたか	4.3	0.86
(2)B この授業を受けたことで、スポーツについての知識理解が広がりましたか	4.48	0.76
(2)C この授業を通して、スポーツについて改めて考えるところがありましたか	4.45	0.87

自由記述欄での個別意見も、おおむね上記の好評価が反映されている。目立った意見を以下に、例示しておく。

- ドーピングや肉体改造など、医学とスポーツとの関係について、色々と考えさせられることがありました。興味のある内容でしたので、毎回楽しみにしていました。
- 講義は手法がとてもよく、自分の発表の参考にさせていただいています。内容に関しては、普段結果だけみていたスポーツに対する考えが深まってよかったです。又、スポーツ倫理や身体に対して考えることで、今後の講義・その他の活動に対する視野が広がりました。

- 役には立たないが、つまらなくはない。
- 感想やレポートを書く時間がもう少し欲しい。
- 単にスポーツとしての問題だけではなく医療従事者として、どうスポーツに関わっていくべきかを考えさせられた。これからの我々にとって非常に有意義な授業であったと思う。

(以上原文のまま)

2. 健康

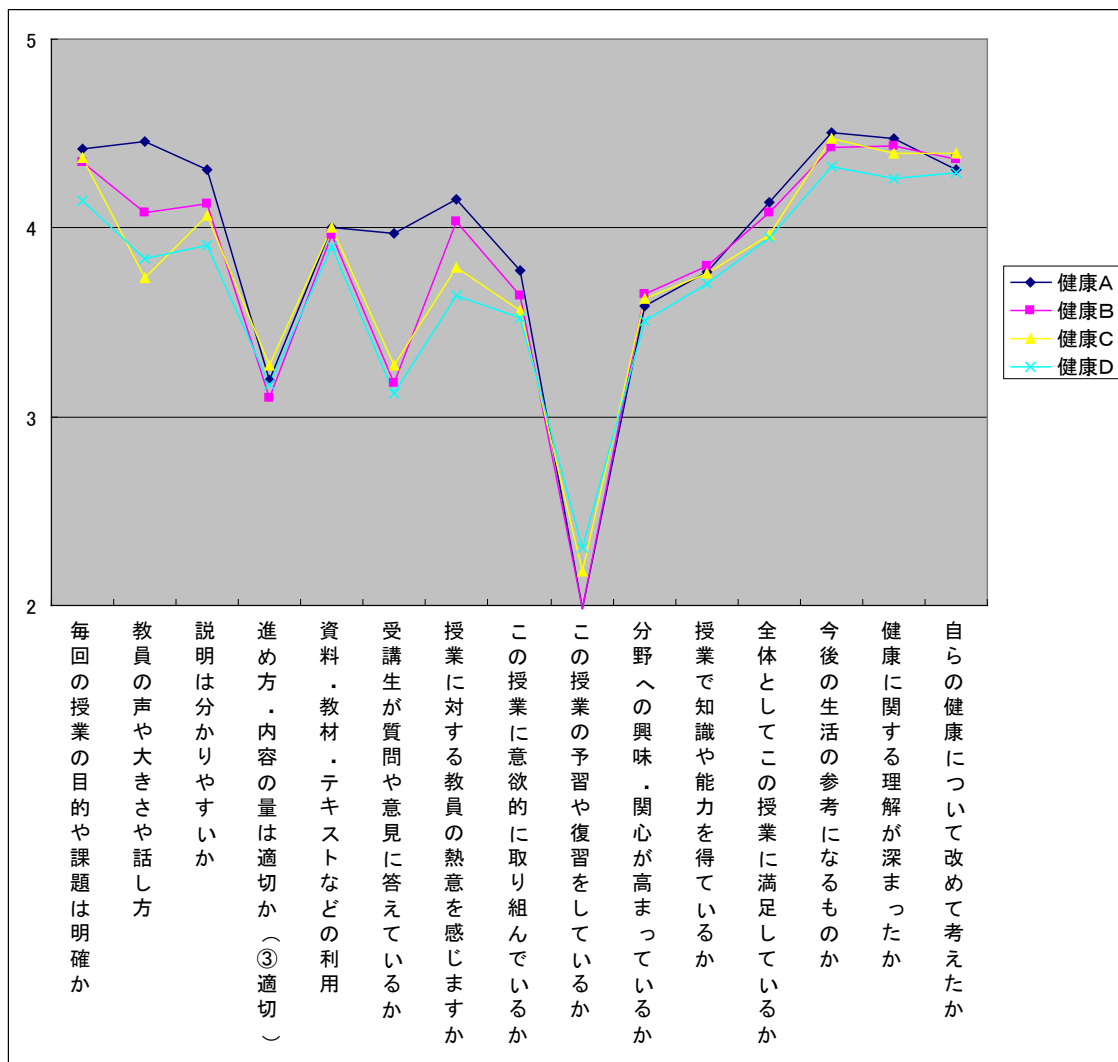


図1 平成23年度「健康」4クラスの授業アンケート結果

今年度1学期に行われた「健康」AからDを対象として学生による授業評価アンケートを実施し、4クラスの各質問項目の平均値を図1に示した。回答者数はAが183名、Bが131名、Cが160名、Dが205名であり、昨年度の165名、143名、121名、139名と比べて受講学生の人数がさらに増えている。

図のように各クラスとも、ほぼ同様の傾向を示しているが、「資料・教材・テキストなどの利用」、「質問や意見を述べる機会を作り、それに答えているか」の項目で、ややばらつ

きがあった。また、各項目の得点平均はほぼ、例年通りの傾向を示している。

本授業はオムニバス形式のため、この形式のアンケートで評価された内容が自分の担当授業の問題なのか、他の教員の問題なのかを特定できない。現在のアンケートで、集計や分析に多大なエネルギーを使っても、この結果が直接授業改善には結びつかない状況にあり、大きな問題だと感じている。

自由記述欄での目立った意見を以下に、例示しておく。

- 毎回先生ごとにテーマが違い、様々な角度から健康について考えることができました。特に最後の3回の授業は学生の意見を積極的に聞いたり、ぐるぐる歩いてもらったことで、最後まで緊張感をもって授業にとりくむことができました。他の授業でも、これまで高校や中学で学習した内容を深くほりさげてあり、新たな見解や知識を得ることができました。メンタルヘルス系の授業では、自分の中でモヤモヤしていた気持ちを変えていくための術を身につけることができましたと思います。(健康A)
- 他の講義と違って教授が講堂(大教室内)を歩き回り、生徒を指定して意見を求めるので面白いです。自分に解答権が回ってきた問題が、わからないものだと、少々がっかりしてしまいますが。このスタイルは、様々な意味(教授がどこにいるか探す、答えを考える必要がある。すきを盗んでのケータイ・飲食・おしゃべり)で、集中する必要があるのでは、いいと思います。個人的には、好きです。教授にはこのような形態の授業を続けてほしいですし、教授を中心として高知大に対話型講義を広めてほしいです。(健康A)
- オムニバス形式の講義は初めてだったのでおもしろかったです。ただ若干内容がカブってました。(健康A)
- 声がききとりにくい先生もたまにいたので、それを気を付けてほしいです。(健康B)
- 最後の先生の授業は、4回とも、とても興味深い授業でした。考え方がとても変わりましたし、とてもためになりました。また、教え方も、さすが教育の先生だなと思いました。とても分かりやすく、かつ楽しい授業でした。(健康B)
- 今まで知らなかったことを学ぶ機会となり、自分の日頃の生活を見直したり、心身の問題に悩んでいることに対処する方法をつかむきっかけとなり、よかったです。(健康B)
- オムニバス形式のため色々な分野の話が聞けるのは良かったのですが、その分レポートなどの質問時に先生が替わっていたりしたので不便でした。(健康B)
- おもしろかった回とそうでない回の差が大きかった。もう少し、範囲を狭くして、1人の先生に4コマずつくらい講義してもらいたい。(健康C)
- オムニバス形式なので毎回出席しなくてはいけないのは分かりますが、前半3回分の講義の小テストの日に体調をくずしてしまっ行って行けなくてそれがすごくショックです。同じ先生が3回やるとしても小テストは一括ではなく、毎回やってほしいと思いました。(健康C)
- 「健康」という幅が広すぎるので仕方がないと思いますが、具体的なものから抽象的なものまであり、毎回の授業で少し大変だと思うこともありました。具体的→抽象的など、一定の流れがあればよかったですと思います。(健康C)
- 1つ1つの授業は大変密度の濃い、充実したものであったと感じましたが、先生が頻

繁に入れ替わるのは少しとまどいました。(健康C)

- 自分の健康に対する意識が変わった。毎回、授業を受ける中で、これから気をつけていこう、とか、もっと健康について知りたいな、と思うようになりました。(健康D)
- 高知大は、下宿生が多いので、このような授業を行って、生活習慣の改善に役立てればいいと思いました。(健康D)
- 先生によって授業方法が異なるので、少しとまどった。前のスライドをメモしているのに画面がきりかわるのが早すぎてたくさんの人がメモしきれていなかった。自分の健康に対する意識が高まったと思う。(健康D)
- これからの生活で重要なことばかりであるので、いつも興味を引きつけられる。私の生活で、飲酒・喫煙、そして運動などは身近な問題である。これからも気をつけていきたい。(健康D)

(以上原文のまま)

8 自然分野分科会

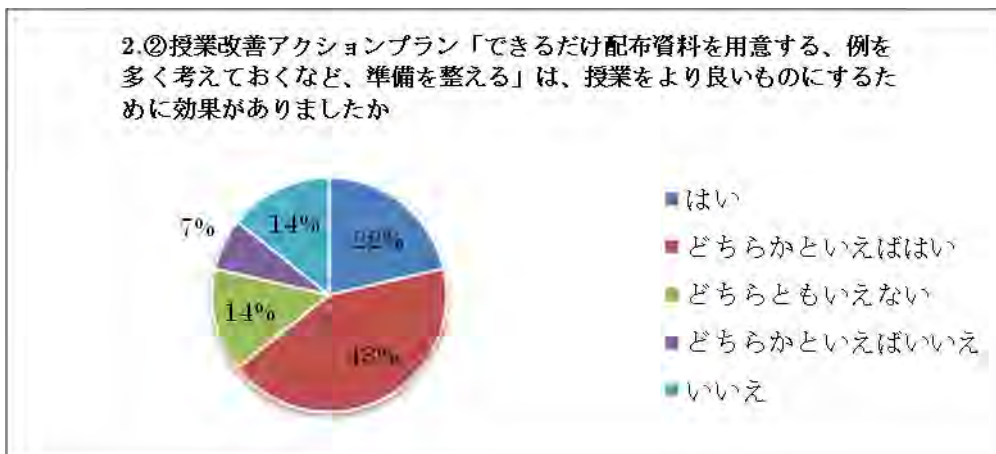
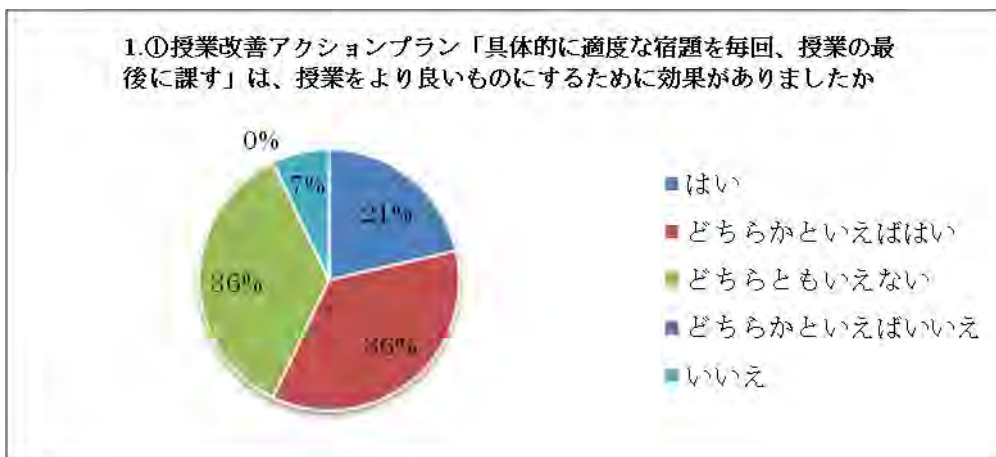
自然分野分科会副分科会長 佐藤淳郎(教育学部)

(I) 共通教育（数学科目）アンケート結果分析

来年度のアンケート本格実施に向けて本年度は数学科目（数理の世界）から2名の教員を選考しアンケートを実施した（下記参照）。

教員 A（回答数14名）

【授業改善アクションプランの効果に関する質問】

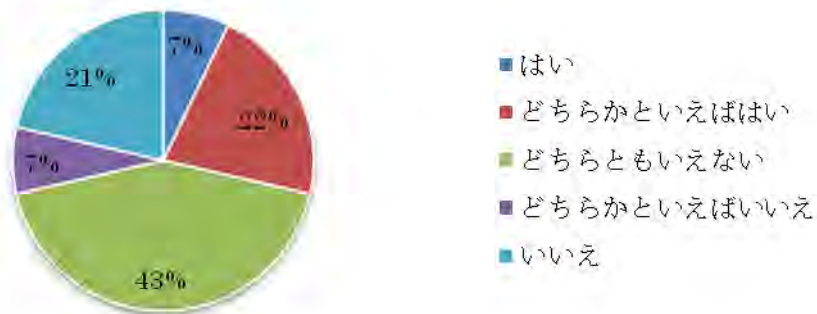


3.③授業改善アクションプラン「1人でも授業の合間に不理解者がいないか見て回る」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか

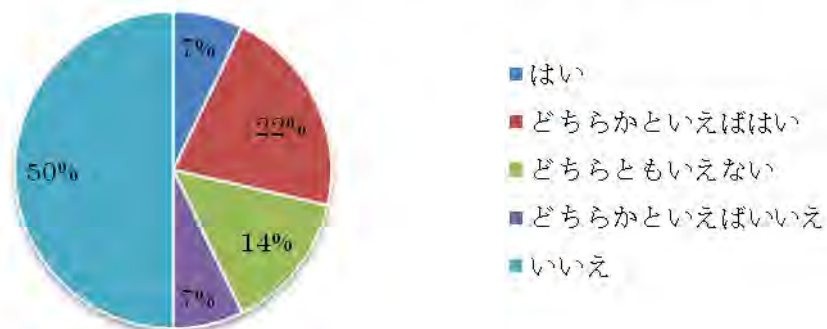


【授業改善アンケートの効果と負担に関する質問】

4.①授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか



5.②授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか



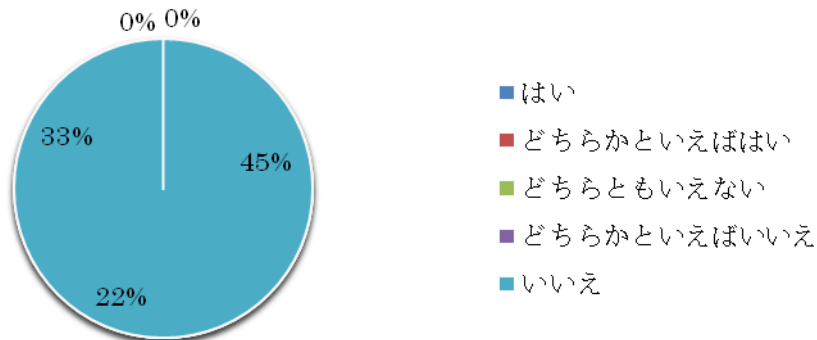
教員 B (回答数 18名)

【授業改善アクションプランの効果に関する質問】

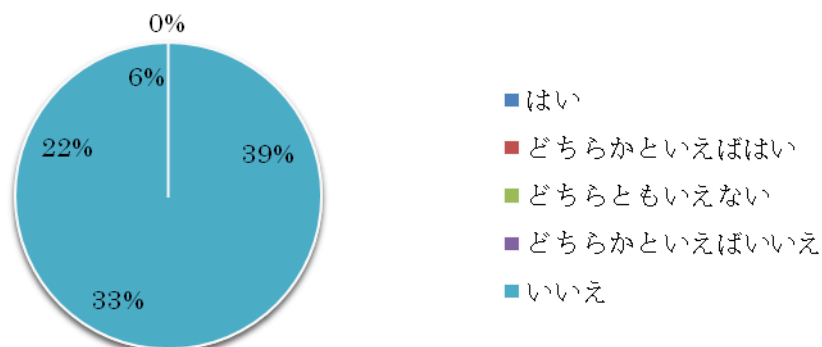
1.①授業改善アクションプラン「補助プリント等を配布し、さらにわかりやすい授業に努める」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか



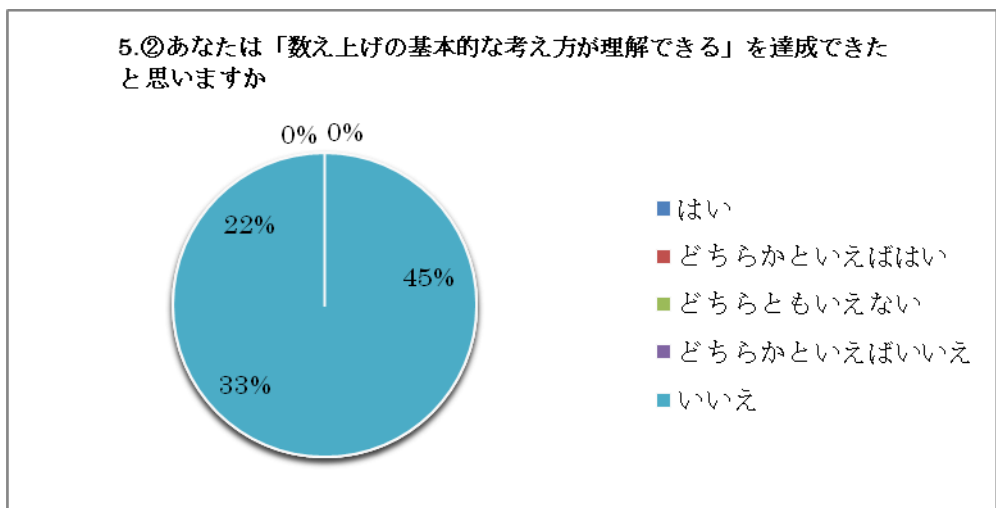
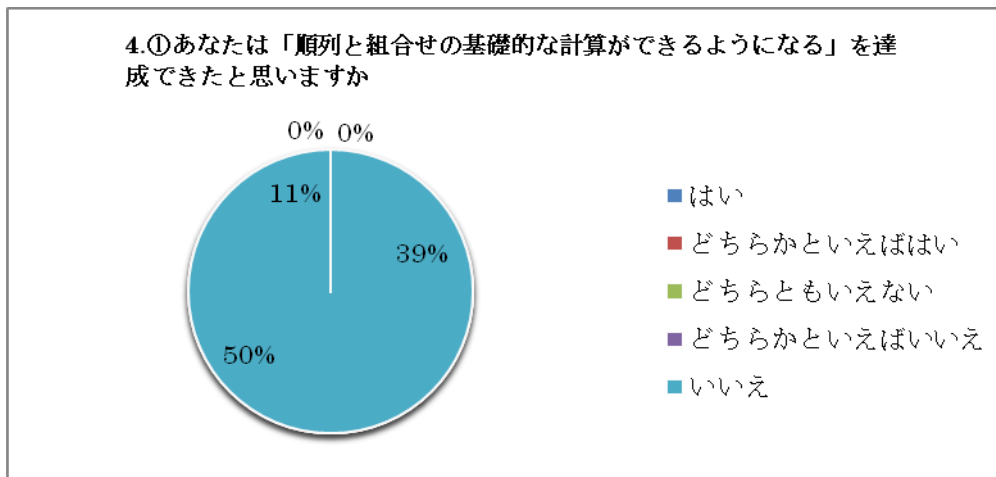
2.②授業改善アクションプラン「授業をよりよくしているために教員が努力しているということを具体的に呈示する」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか



3.③授業改善アクションプラン「参加型の学習を少しでも取り入れるよう、授業中に質問等を投げ掛ける工夫をする」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか



【授業到達目標の達成に関する質問】



(II) 分析結果

5週目アンケートの結果を受けて改善プランを策定し実施したが、両教員ともおおむね評価は学生の満足ゆくものとなった。

しかし、自由記述の少なさが目に付いたので次年度以降の検討課題となった。

(III) 次年度への課題

(1) アンケート項目の検討

理数系科目は高校までの各学生の履修状況等に大きく依存するので多くの学生が満足できる授業を目指すには教員側としてはこの点をしっかりと留意しておかなければならない。

さらによりよい授業となるための以下の設問項目等を設定すればよいのではないかと考える。次年度の検討課題として頂きたい。

- ① 教員は高等学校での数学の既習内容を踏まえて授業を展開していますか？
- ② 教員は高等学校での数学との繋がりを意識して授業を展開していますか？

(2) 高校での苦手分野の調査

学習指導要領の改変とともに高等学校で学ぶ数学の内容が学年ごとに非常に異なったものになっているので、担当する教員側にも学生がどこまで履修していて、どこからは未履修かということを確認してもらおう。さらには(数列、ベクトル、複素数、微分積分、確率等といった)学生の苦手とする分野をアンケート調査し、分析することが必要である。

(3) 教員側からの要望や学生の学力に関するアンケートの実施：

自然科学系の各教員から自分の担当科目で必要とされる数学の内容並びに受講生の数学能力に対する意見のアンケート調査を実施し分析する。

1.1 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会副分科会長 野田智洋(医学部)

1. スポーツ科学講義

平成23年度は、1学期に岡豊キャンパスで行われた講義で授業評価アンケートを実施した(生命・医療分科会参照)が、2学期に行われたスポーツ科学講義AからDでは実施できなかった。代わりに2学期は、新しい形式の5週目アンケート、アクションプラン、15週目アンケートによるプラン実施の効果検証を行なった。しかし、これについては、今年度2学期に試行的に行ったものであり、実施対象者が特定されるため報告書への記載は見送ることとする。

2. スポーツ科学実技

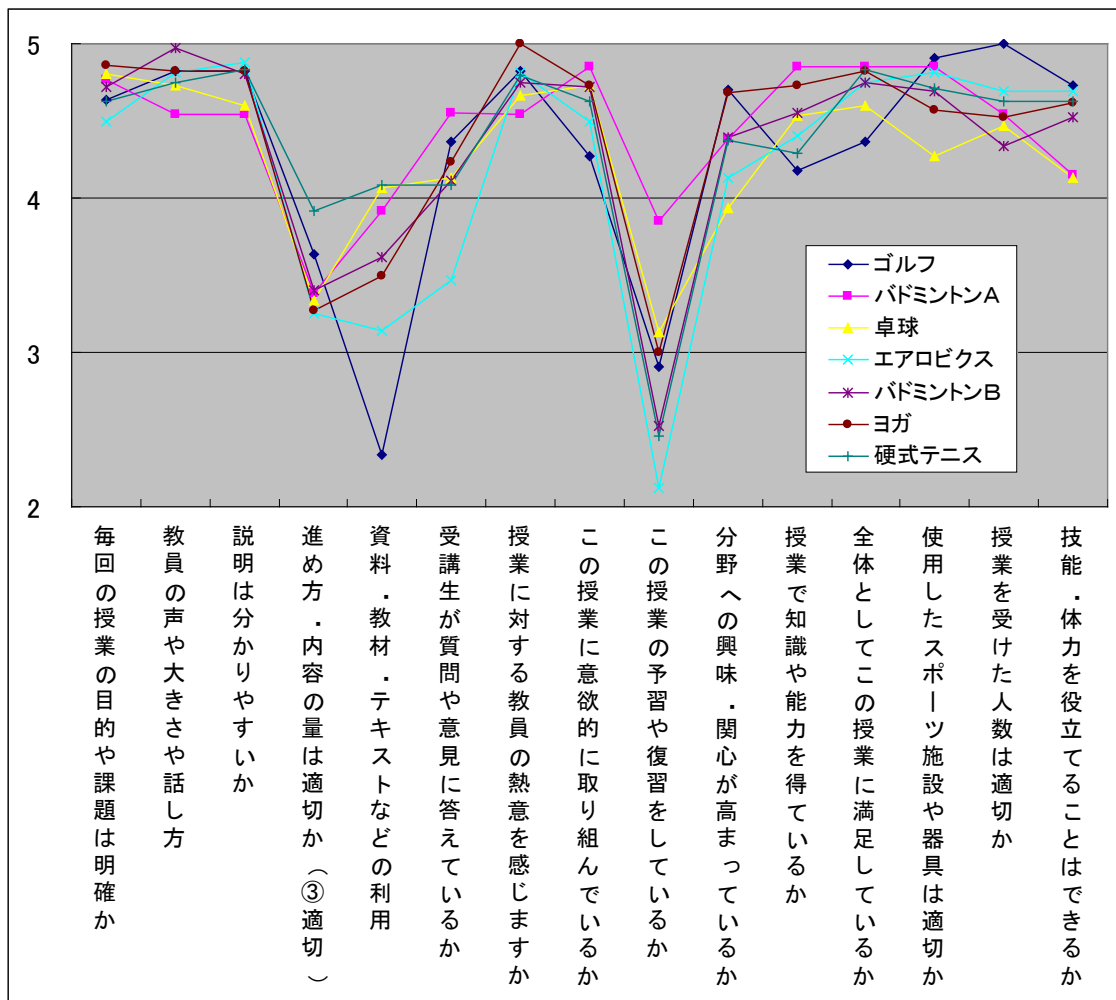


図1 平成23年度1学期授業評価アンケート集計結果

今年度は1学期のみ、すべての授業で授業評価アンケートを実施した。種目は、ゴルフ、

バドミントン、卓球、エアロビクス、バドミントン、ヨガ、硬式テニスである。

対象となった7科目の学生満足度（設問13）「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は、ゴルフが4.36とやや低いものの、2科目あるバドミントンが4.85と4.75、卓球が4.60、エアロビクスが4.75、ヨガが4.82、硬式テニスが4.83であり、総じて高く評価されている。しかし、図1のように、（設問6）配付資料や視聴覚教材の利用が適切かどうか、（設問10）この授業の予復習をしているかどうか、に関しては低い評価がなされている。これら2問については、いずれの種目でもほぼ同様の傾向が認められ、授業方法に問題があるというよりは、スポーツ実技という科目特性に附帯する要因であると考えられる。

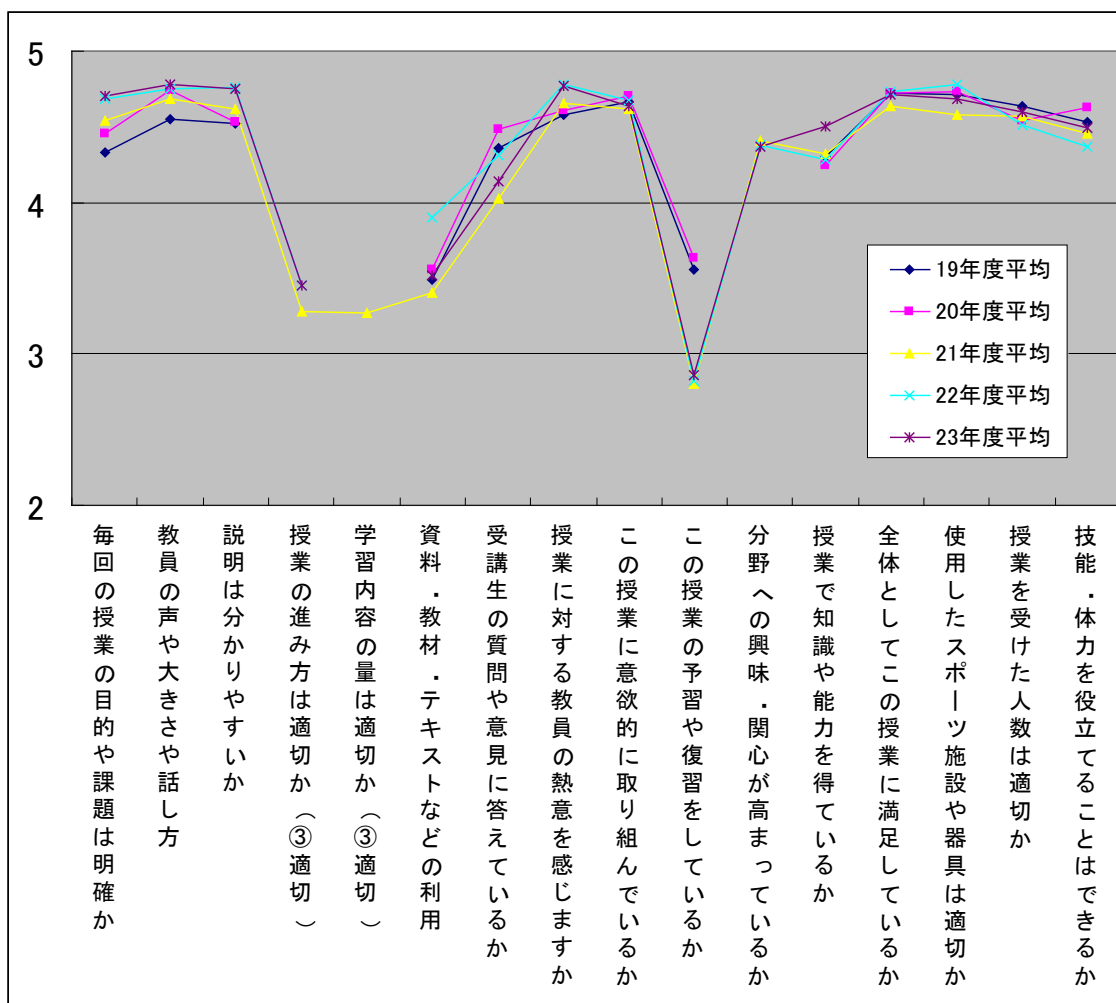


図2 平成19年度から23年度の学期末授業評価アンケート集計結果

図2は、平成19年度と20年度の2学期に開講された4種目と、21年度ならびに22年度15種目、ならびに23年度1学期7種目の授業評価アンケート平均値を比較したものである。なお、21年度はいくつか質問項目が変更されており、19、20年度のデータがない項目がある。

図のように過去5年間の傾向は大きく変わっていない。設問10の予復習に関する質問項目は、19、20年度は「教員が予復習するよう指導しているか」との内容なのに対して21年度は「学生自身が予復習をしているか」であるため、平均値が厳しくなったものと考えられる。23年度は「授業で知識や能力を得ているか」との質問に対する回答が4.51と過去最高を記録しており、この評価が維持できるよう努力したい。

特に、授業に対する教員の熱意、学生の意欲ともに高い評価を維持しながら推移しており、特別な支援や対策を講じる必要はないと考えられる。各学部学科の必修科目の時間割を調べるなどして、実技科目の時間割を受講生が履修しやすい曜日に変更するなどの対策が必要である。

スポーツ健康部会では、スポーツ科学実技に関して昨年度までと同様、次のような独自の設問を設定した。

① 「授業で使用したスポーツ施設や用具は適切ですか」

学習意欲を喚起するためには重要な要素である。23年度は4.69と昨年の4.78に比べてやや低くなっているが、全体の傾向は変わらない。(21年度：4.58, 20年度：4.73, 19年度：4.72)

② 「一緒に授業を受けた人数は適切ですか」

授業の成果を上げるためには適正人数がある。多すぎると練習の回数や機会が制限され、技術の向上にとってはマイナスの要因にもなる。平均すると数字の上では今年度も4.60と高い評価を得ている(22年度：4.51, 21年度：4.57, 20年度：4.54, 19年度：4.64)。

③ 「獲得した知識や技能、体力を今後の生活に役立てることができますか」

これについては4.50と、昨年の4.37、一昨年の4.45に比べてやや向上している(20年度：4.62, 19年度：4.53)が、さらに生涯にわたっての運動実践や体力づくりなどの必要性を理解させるように工夫したい。

12 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会副分科会長 大塚 薫(国際・地域連携センター)

1. 活動の概要

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本事情Ⅰ」「日本事情Ⅱ」、第2学期に「日本語Ⅲ」「日本語Ⅳ」「日本語Ⅴ」「日本事情Ⅲ」「日本事情Ⅳ」が開講されている。

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にかけて分科会独自の形式で授業評価アンケートを全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。

それを踏まえて、2009年度以降は、日本語・日本事情分科会では「学期末授業評価アンケート」は行わず、第Ⅰ期共通教育教育力向上3カ年計画に基づく「5・14週目アンケート」に関する自己点検評価活動を個人ベースで実施するとともに、2010年度は日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、FD活動と連動させた「授業ピアレビュー」を中心とする活動を行った。

2011年度は、第Ⅱ期共通教育教育力向上3カ年計画の一年目であり、日本語・日本事情分科会でも共通教育が用意した「5・15週目アンケート」を日本語授業で試行的に実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全9科目を6名の教員で担当して行っており、今回の試行を実施した科目は一科目のみであったこともあり、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。

「5・15週目アンケート」を試行的に実施した教員の所感としては、以下の2点を強調したい。

- ① 「5週目アンケート」では、質問項目が5つの教育力に基づいて設定されている。しかし、学生アンケートを試行した科目は語学の授業であり演習形式+グループワークで行われているため、教養を高める講義形式の授業とは授業の方式が異なっている。「5週目アンケート」の設問1には「この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか」との記述があるが、語学能力向上を目的とする授業にはあまり当てはまらないのではないと思われる。講義形式の授業と語学の授業とは設問内容を変える等の改善が必要ではないか。
- ② 授業改善アンケートの効果に関しては、「受講生の声によって授業が改善された」と感じる学生が95%であったが、授業改善アンケートへの回答についての負担に関しては、50%が負担に感じると回答していた。受講生に負担のかからない方法での「授業改善アクションプラン」の実施をお願いしたい。

なお、語学等の少人数制授業の場合、毎回の授業のやり取りの中で受講生の声を拾っていき、質問にもその都度回答するという学生へのケアが日々の教育の中でできているため、それほど授業改善アンケートの必要性を感じることはない点を付け加えておきたい。

IV FD部会

1 FD 部会の活動報告

FD部会長 立川 明

23 年度活動の概略

共通教育における FD 活動は分科会が主体的に行っている。各分科会の実施状況について以下にまとめた。詳細は各分科会報告を参照して下さい。

課題探求実践セミナー分科会

課題探求授業での OJT-FD の実施、ピア・レビュー養成研修として『チームワークを考える』の授業参観、授業コンサルテーション試行の計画・実施、学生委員会との連携による学生授業参観の計画・実施を行った。

学問基礎論分科会

学問基礎論の FD は学部毎に実施している。理学部では学期末アンケートを実施し、農学部では講演会を実施した。

人文分野分科会

人文分野分科会における FD 提案書を作成した。「学生の理解を助けるためのチームティーチングの実践例」と題してシンポジウム形式の授業を行った。

社会分野分科会

河合塾とリアセックが開発した「基礎力テスト」の試行について、報告・意見交換会を行った。

生命・医療分科会

中国・四国地区大学教育研究会参加、健康担当者との意見交換を実施した。基礎力テスト報告・意見交換会に参加した。

自然分野分科会

科目間の連携を図るための環境整備と自主研修のため必要な事柄が検討された。

スポーツ・健康分科会

授業参観および運動量測定を実施した。

日本語・日本事情分科会

高知大学の秋季 FD セミナー、全学 FD 講習、全学 FD フォーラムへの参加、および 5 週目、15 週目アンケートによるアクションプラン作成を行った。

本年は FD 部会の立ち上がりが部会長のミスで遅れてしまい、各分会にも多大な迷惑をおかけすることになりました。この点 FD 担当副分科会長の皆様をはじめ、共通教育実施機構会議関係者の皆様に深くお詫びいたします。

本年は、新たな試みとして以下の取り組みを行った。

キャリア形成支援科目におけるサービラーニングの実施・授業公開

本年「チームワークを考える」という新科目をキャリア形成支援科目として開講した。これはグループワークを中心とした課題探求型の授業であり、チームで働くとはどういう事を問いかけ、考える授業である。この授業で、各グループに受け入れ先を決め、ボランティア活動を実施し、そのふりかえりを行うというサービラーニングを課題として取り入れ、授業の成果を高めることができた。この手法について、授業を公開し参観を受け入れた。残念ながら参加者は少数であった。協力をいただいた学生支援課、大学生協とは引き続き意見交換をしながら次年度も同様の試みを実施する。

「基礎力テスト」試行の実施

河合塾とリアセックが開発した「基礎力テスト」の試行を行った。このテストは学士力と社会人基礎力を測ろうとする物で、大きくリテラシーとコンピテンシーに分かれ、さらに問題解決力、コミュニケーション・マネジメント力、自己管理力に分かれている。高知大学が掲げる 5 つの能力の内、外国語によるコミュニケーション力以外の能力を測定できる可能性があり、客観指標として期待される。

自然分野科目の化学概論 II、およびみのまわりの科学、キャリア形成支援科目のチームワークを考える、その他の応募学生に対して実施した。上記の 3 科目はいずれもグループワークを中心とする科目で、大部分が 1 年生である。グループワークをいやがる学生は履修を取りやめるので、グループワークになれた（あるいは好む）学生の割合が高い。試験の結果、非常に高い得点を得る者が多く、グループワーク型の授業の成果が現れていると見ることができる。

FD ワークショップの実施

FD 部会は大学教育創造部門と協力して、各種 FD を実施し、FD 部会を通じて参加を呼びかけているが、参加者が増えないのが課題である。現在の春季、秋季ワークショップは教員へのアンケート調査をもとにニーズのありそうな話題を取り上げて実施しているが、実施時期や時間帯についてもアンケート調査を行うなどして再度検討する必要があるであろう。今年度、実施したワークショップは以下の通り。

- ・学生の学びを支援する授業の準備
- ・成績評価とフィードバック
- ・学生の学びを引き出すためのシラバスの書き方
- ・学生の能動学習を引き出す仕組み TBL
- ・初年次科目のためのグループワークの技法
- ・講義に小グループ
- ・ペア学習を取り入れた授業デザイン
- ・能動学習支援者必須！グループワークのためのファシリテーション入門
- ・自習を助ける教材を作る
- ・発信するための PowerPoint & Moodle 入門
- ・Web ページ作成入門

次年度以降の実施に向けて実施時期や実施場所の再検討を行う。

3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー副分科会長 俣野秀典（総合教育センター）

本年度も FD 関連のイベントへの参加はあまり多くないが、担当者それぞれが自身の授業で「授業改善アクションプラン」や「授業コンサルテーション」に取り組んでいただいております。特に授業コンサルテーションについては、試行として実施されたものでありながら、実施件数 3 件のうち 2 件が課題探求実践セミナー担当者であることから、課題探求実践セミナー担当教員は比較的積極的に FD 活動を実施していることがうかがえた。

実施を予定していた以下の 4 項目については、授業コンサルテーション関連項目のみ実施することができた。

- ・開講されている課題探求授業に OJT-FD 教員として参加する。
- ・ピア・レビュー・養成研修として『チームワークを考える』の授業を参観する。
- ・授業コンサルテーションの試行を計画・実施する。
- ・学生委員会との連携による学生授業参観を計画・実施する

課題探求実践セミナーは、教員が教え込む授業ではなくグループワーク型の授業であることから、OJT-FD 教員の参加および受け入れが最も有効な FD 活動の一つであると考えられる。よって来年度は、自由探求学習などチームビルディングに力を入れている授業への受け入れ、特に初回から 3 回目あたりに受け入れることで、学生の変容とファシリテーターとしての教員の役割を体感・体得できるように取り組んでいきたい。また、毎年 3 月に開催されている FD セミナー「初年次科目のためのグループワークの技法」および「グループワークのためのファシリテーション入門」への参加呼びかけを行いたい。

平成 23 年度の FD 活動のうち、課題探求実践セミナー担当者が参加・実施した代表的なものは以下のとおりであった。

1. 全学向けの FD フォーラム／プログラム（学部開催を除く）への参加

9月1～2日	学生の学びを支援する授業の準備	23・24年度担当者	1名
1月25日	全学 FD フォーラム	23・24年度担当者	9名
		24年度担当者	1名
3月16日	初年次科目のためのグループワークの技法	23・24年度担当者	1名

2. 授業改善アクションプランの実施授業

前期	二つの授業で実施（うち一つは課題探求実践セミナーで実施）
後期	六つの授業で実施

3. 授業コンサルテーションの試行実施

後期	二つの授業で実施
----	----------

4 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会 松岡裕美（理学部）

学問基礎論は人文学部で17クラス、教育学部で9クラス、理学部1クラス、農学部1クラス、医学部2クラス、全学部で合計30クラス開講されている。各学部によって実施形態が大きく異なるため、FD活動は基本的に学部ごとに行っている。

教育学部

基本的に学問基礎論の授業担当者における自主的な活動として、授業改善につながる活動を行った。

理学部

理学部では「学問基礎論」の自己点検評価およびFDの一環として学期末アンケートを行っている。理学部では、学生は入学時には理学部生としてどのコースにも配属しておらず、1年生修了時にコースを決定する。従って1年生の2学期に開講される「学問基礎論」は、すでに配属先が決定している他学部とは異なり、学生がどのコースに進むかを考える場でもある。「学問基礎論」の前半2/3は理学部の各コースでどのような教育研究が行われているのかを紹介する講義が行われ、後半1/3は希望するコースで演習が行われる。このような性格の「学問基礎論」を評価するために、以下のシンプルな設問のアンケートを行った。

- ①あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。
- ②あなたの目指す学問分野を極めるにあたり、どのような能力をつけていくべきか考えることができましたか。
- ③自分自身で考えるためのきっかけ・視点・知識などを得ることができましたか。
- ④コース別演習において、担当教員から適切な助言やサポートを受け、それを役立てることができましたか。

以上の設問について「はい」から「いいえ」の5段階で評価させた。

さらに、以下の設問に対して、自由に記載させた。

・1年生の終了時に主専攻のコースを選択するという理学部のシステムに関してどう思いますか。

・このような授業を1年生の2学期に実施することに関してどう思いますか。

・その他この授業に関して、あなたが感じていることを自由に記述して下さい。

5段階に評価させた質問では、平均して3の後半から4の前半程度の評価が得られており、この講義はおおむね好評であったと判断できる。問題点としては、①～③の設問と比較して④がほとんどのコースにおいて低い評価を受けている。昨年もこの傾向が見られており、改善する必要がある。自由回答の設問に対しては、8～9割程度の記述があり、丁寧に回答

されていた。また回答の内容もほとんどは好意的な評価であった。来年度にむけて特に学部全体での議論は行っていないが、アンケート結果を担当教員に配布し来年度へ向けての参考とした。

農学部

農学部ではFD活動の一環として講演会を行った。

期日 平成12年3月5日(月)

講師 安永 悟先生(久留米大学)

「活動性のある授業づくりとは？」と題した協同学習に関する講演および講師による模擬授業が行われた。

5 人文分野分科会

人文分野分科会副分科会長 金山 元春（教育学部）

1. FD 部会の活動計画に係る FD について

平成 23 年 7 月 29 日（金）に第 1 回共通教育実施機構会議 FD 部会にて、次の 4 点が「平成 23 年度活動計画」として提案された。

1. 学生委員会との連携による学生授業参観を各分科会主導で実施する。
2. ピア・レビュー養成研修として、「チームワークを考える」の授業参観を行う。
3. 課題探求型授業での OJTFD 教員の受け入れを行う。
4. 授業コンサルテーションの試行を各分科会主導で実施する。

副分科会長（FD 担当）として、人文分野授業担当教員の FD に関する自律的活動が促進されるためには、この提案を各教員に伝える際に、「何のために」そして「何を」「いつ」「どこで」「誰と誰が」「どんなふうに」行うのか、という具体的な実務内容が明示されている必要があるとの判断から、これらの点について部会長に何度も質問し確認を求めた。そして、その内容を人文分野分科会における「提案書」に反映するように努めた。ただし、「提案書」の記述が細かすぎると、「あれもこれもとやらされている」との思いを抱かせてしまい、かえって自律的活動を阻んでしまうかもしれないと考えて、具体化の水準については適度なものを目指した。

以上が FD 担当者としての工夫の一つである。作成された「提案書」を以下に示す。

「提案書」ここから-----

1. 学生委員会との連携による学生授業参観

学生委員を授業に迎えて学生の立場から意見をもらうものです。

学生委員会との連絡調整は事務でしていただけます。

なお、FD 部会長によると、学生委員会とは正式の委員会であり、学生サークルや自治会等とは明確に区別されるものとのことです。

2. ピア・レビュー養成研修（チームワークを考える）の授業参観

ピア・レビュー養成研修（チームワークを考える）予定（変更の可能性あり）

- ・ 12 月 5 日 カウンセリングの手法 I
- ・ 12 月 12 日 カウンセリングの手法 II

「ピア・レビュー」となるためにはカウンセリングを学ぶ必要がある、そこで、上記授業を参観してくださいという内容です。

3. 課題探求型授業への OJTFD 教員としての参加

課題探求型授業へ FD 教員として参加します（2学期）。

この教員を OJTFD 教員と呼びます。

- ・ 時間割 科目名 （内容）
- ・ 月曜 4 限 チームワークを考える （チーム・ビルディング実習）
- ・ 木曜 4 限 化学概論 II （TBL=チーム基盤学習、知識伝授型授業）
- ・ 金曜 4 限 みのまわりの科学 （自然分野の課題探求学習）

OJTFD 教員はときにグループに入りつつ授業を観察します。

そして授業の「ねらい」や「しかけ」を学びそれを持ちかえります。

2 学期授業 15 回中、2、3 回に 1 回くらいのペースでの参加が期待されています。

4. 授業コンサルテーション

総合教育センターの教員から授業コンサルテーションを受けてもらいます。

簡単に申しますと、コンサルタントに授業を見てもらって授業改善の相談にのってもらうということです。

「私の授業を見てください」という方を募ります。

「提案書」ここまで-----

以上のように、FD 部会での審議と活動計画書をもとに授業担当教員に FD 活動への参加を募った。その結果、1 名の教員から「学生授業参観」の実施が提案された。しかし、学生委員会メンバーの事情と折り合わず、実施は不可能であった。

2. 人文分野分科会独自の FD について

平成 23 年 11 月 9 日、「人間基礎論入門」（共通専門科目・基礎科目）にて、心理学担当教員 4 名が「学生の理解を助けるためのチームティーチングの実践例」として、自主的な FD 活動を実施した。具体的には、4 名の教員がそれぞれ担当した講義の関連性について補足説明を行うシンポジウム形式の授業を行った。

6 社会分野分科会

社会分野副分科会長 石筒 覚

社会分野分科会では、総合教育センター大学教育創造部会が実施した「基礎力テスト報告会」(3月22日)について、共催の形で参加した。

〔実施概要〕

開催日時；2012年3月22日、11時～12時30分

開催場所；共通教育棟3号館311教室

参加人数；9名（うち、社会分野分科会授業関係者5名）

〔報告内容〕

2011年12月および2012年1月において、株式会社リアセックと河合塾が共同開発した、ジェネリックスキルを測定するPROG（PROGRESS REPORT ON GENERIC SKILLS）テストを本学でも実施した。今回の報告会では、その結果に関して、分析内容と測定データの活用方法について詳細な解説が行われた。テストを受けた学生は合計172名で、学年では1年生が最も多く63名、学部では人文学部が94名で最多であった。

PROGテストは、知識を基にした問題解決力を測定する「リテラシーテスト」と、経験を基にした行動特性の観点から測定する「コンピテンシーテスト」で構成され、各60分で回答し、テスト結果の返却後に実施される解説セミナーの受講までが1つのセットになっている。

報告では、「コンピテンシーテスト」における配点方法の説明があった。通常の5段階評価では、1から5点まで等間隔的な配点があり、回答者が社会的に最も望ましいと思われる選択肢（例えば5点）を安易に選んでしまうことで、能力を正當に測定できなくなるという問題点があるが、PROGテストでは、「社会で活躍する若手ビジネスパーソン」と学生の回答比率を基にして、選択肢の配点を変化させている。すなわち、設問によっては、頻度が最も高い「(5)常にそのようにした」のような選択肢に、必ずしも5点が配分されているわけではなく、その次の順番にある「(4)多くの場合そのようにした」の選択肢が5点になる形で、実態に沿った能力測定がされるよう工夫がなされている。

また、これまで行われた他大学を含めた全体データとの比較として、本学の学生データは、リテラシーはやや上回っている一方、コンピテンシーは、個別の能力（例えば、情報収集力、親和力、行動持続力）などで、全体平均を下回っているという結果が示された。同テストで測定される個別能力は、多岐にわたっているため、各大学の事情に応じた活用方法の検討が必要であるといえる。

7 生命・医療分科会

生命・医療副分科会長 駒井 説夫

1.中国・四国地区大学教育研究会参加 (5月28～29:鳴門教育大学)

保健体育分科会に参加し、参加大学担当者と授業内容や評価について意見交流を図った。

2.健康担当者との意見交換(一部担当者のみ)

(1) 人数の適正について

本年度の健康の受講者数は、健康A:279(昨年:237)、健康B:150(186)、健康C:であり、昨年に比べ大幅な増加が認められた。これまでも議論になったことではあるが健康については受講者数が非常に多く授業効率の悪さ、出席管理の困難さなどの問題点が指摘された。しかし、受講者数の制限ができないことからどのように改善することが有効なのかという点に関しては、明確な対応策は認められなかった。

(2) 授業内容について

オムニバス形式で実施され、様々な観点から健康を論じることができるメリットは多いが、教員間の教授方法の違いや、内容の重複などが認められ、受講生が戸惑う場合もあるようだ。このことを解消するためには教員間の連携を取ることが必要ではないかと考える。あらかじめのシラバス提出に際して、テーマだけでなく少し内容がわかるような形にすることも必要ではないかななどの意見も出された。

また、担当者数は7名から9名と多人数であるので、ひとりの担当時間数を3回程度にしてはどうかなどの意見も出された。

平成23年度は心理学専門の教員が1名担当することになったので、健康A~D何れも心の健康問題の内容が含まれるようになった。心の健康問題は大変重要な分野であるので、今後もこの体制を維持していく必要があるだろう。

(3) 評価に関して

評価を統一するという観点から学期末に統一した試験をすることが望ましいが、担当教員数が7~9名と多いため、実現は難しいと判断される。なお、成績の集約にあたっては、部局ごとに成績をまとめて提出していただいているので、個々の提出に比べ、煩雑さは解消されている。

(4) 自己評価担当委員のご尽力で毎年健康の学生アンケートを実施しているが、おおよその検討課題は明らかになっているので毎年少しずつその課題を改善していく必要があるだろう。

3.年度末開催のFDに参加(予定) (3月22日(木)基礎力テスト報告)

8 自然分野分科会

科目間の連携を図るための環境整備と自主研修のための情報提供

自然分野分科会 副分科会長 池島 耕（農学部）

自然分野科目についてその特徴をふまえ、科目間の連携を図り、効果的な学習効果と効率的な講義の運営が行えるように必要な環境整備について検討した。

入試科目の選択肢が多様化する中で、自然科学系科目についても、基礎学力が十分身に付いていない学生が少なからずいるという教員の声がある。まず、このような状況を把握するため、自然科学系の基礎知識項目（高校理科等の科目体系を参考にしつつ）について、各講義を履修している学生の基礎学力の現状や問題点について、教員アンケートを行う事が考えられる。また、学生に対しても、高校と共通教育科目の自然分野（理数系）科目の履修状況と理解度についての調査を行い、問題点を整理する。これらの調査では、教員の負担を軽減し、アンケートへの回答を促し、十分な回答者数を確保するために、調査票に高校理科の科目履修体系を参考にした、選択式の解答を用意する必要があると考えられる。また、履修状況や理解度などについては、既存の履修登録システムや授業改善アンケートの結果を活用できるか検討する必要がある。また、多教員によるオムニバス形式の授業については、学生アンケートや授業改善についての既存の仕組みが効果では無いことが考えられ、オムニバス形式授業については、補足的な仕組みを考える必要があるだろう。

FD活動については、今後、自然分野の講義内容や形態をふまえた、FD講習の開催を検討する。自然科学の基礎科目や大人数講義においても、アクティブ・ラーニング、双方向型の講義を促進する為には、課題探求型の比較的少人数授業を想定したグループワーク等の授業法とは別に、参考となる講習が必要であると考えられる。また、オムニバス形式講義では、授業終了時間際に行う質問、コメントなどを書かせて、以降の授業でフィードバックするような方法はとれず、電子システム（メール、BBSなど）を利用するなど、多数の講師による講義に対応できる方法も必要となるだろう。

1 1 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康副分科会長 矢野 宏光

1. 参観授業

実施日時：平成24年1月26日(木曜)

授業題目：スポーツ科学実技(ディスクゲーム)

授業実施者：矢野 宏光

実施場所：サッカーグラウンド

授業種別：実技 受講学生数 11名

授業の流れ

10：30 出席点呼 説明と測定機器の装着

10：45 準備運動とゲーム前練習

11：05 アルティメットゲーム(15分ハーフ)

11：20 前半終了 休息とミーティング

11：30 後半開始

11：45 ゲーム終了

まとめ

感想(参観者：駒井説夫)

第14回目の授業であり、まとめのゲームの形で授業が展開されていた。当日は非常に寒くコンディションとしては悪い状況であったが、受講学生は生き生きと活動し学生同士のコミュニケーションもよく取れていた。男女の体力差はあるものの役割分担がよくできており、力いっぱいプレーで、運動量も充分確保されていたと思われる。

受講者数が奇数であるため指導者もゲームに加わり、適宜、声を出し、ゲームを盛り上げ、学生個々の動きをよく把握し適宜アドバイスしていたのが印象的であった。

非常に活気のある授業で教員と学生及び学生同士のコミュニケーションがよく取れた授業であると感じた。

2. 運動量調査

実施日時：平成24年1月26日(木曜)

授業題目：スポーツ科学実技(ディスクゲーム)

授業実施者：矢野 宏光

実施場所：サッカーグラウンド

授業種別：実技 受講学生数 11名

授業の流れ

10：30 出席点呼 説明と測定機器の装着

10：45 準備運動とゲーム前練習

11:05 アルティメットゲーム(15分ハーフ)

11:20 前半終了休息ミーティング

11:30 後半開始

11:45 ゲーム終了

目的:今回は屋外種目であるディスクゲーム中の運動量(運動強度、移動距離)を測定することにより、ディスクゲームの運動特性を明らかにすることである。また、シラバス等にスポーツ科学実技で実施している種目ごとの運動強度等の特徴を明示するための基礎的資料を得ることを目的とした。

方法

測定対象者はディスクゲーム受講学生 11名(男 8名、女 3名)であった。対象者にはあらかじめ測定の方法、測定方法を説明し同意のもと実施した。

運動量の測定方法

運動強度は心拍測定装置により授業中連続的に測定した。

移動距離はGPSスポーツレコーダーを用いて授業中連続的に測定した。



写真 1

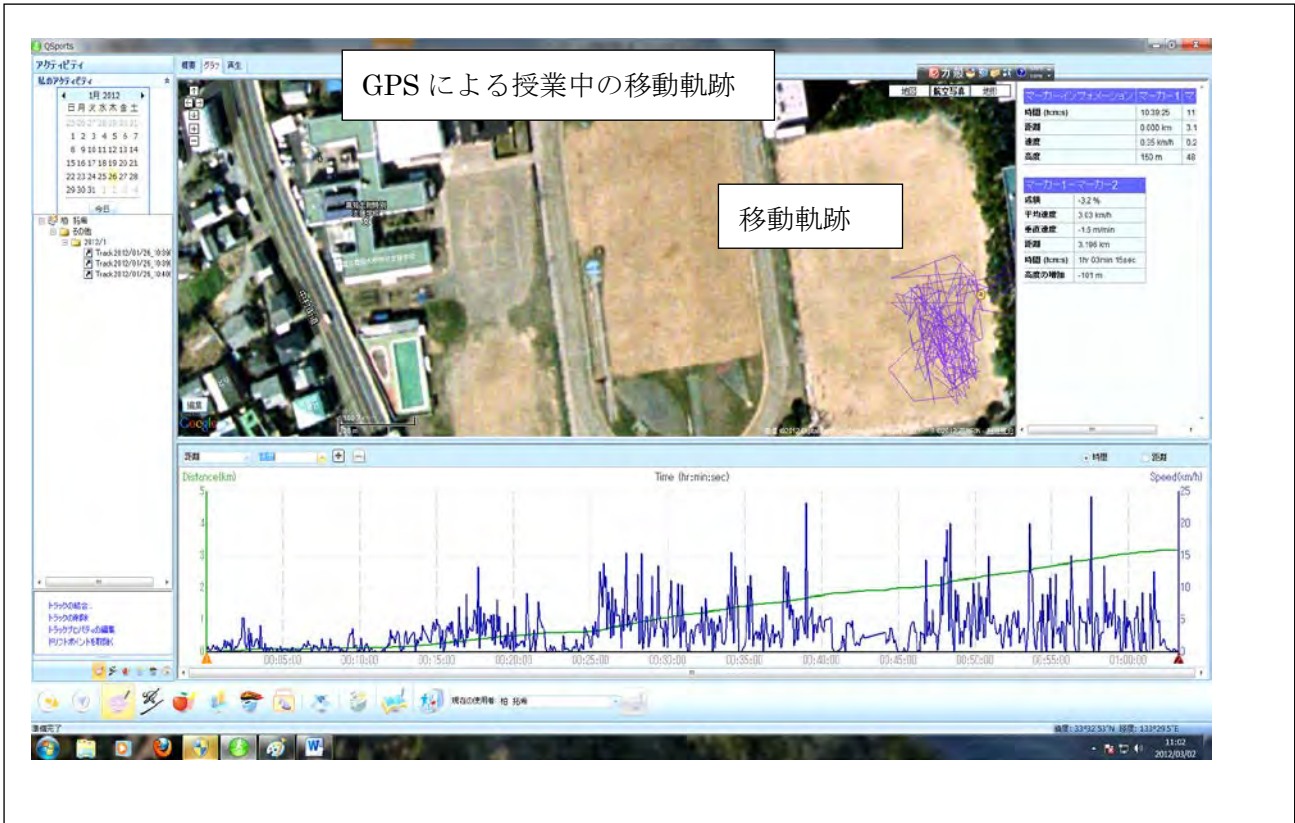


図 1

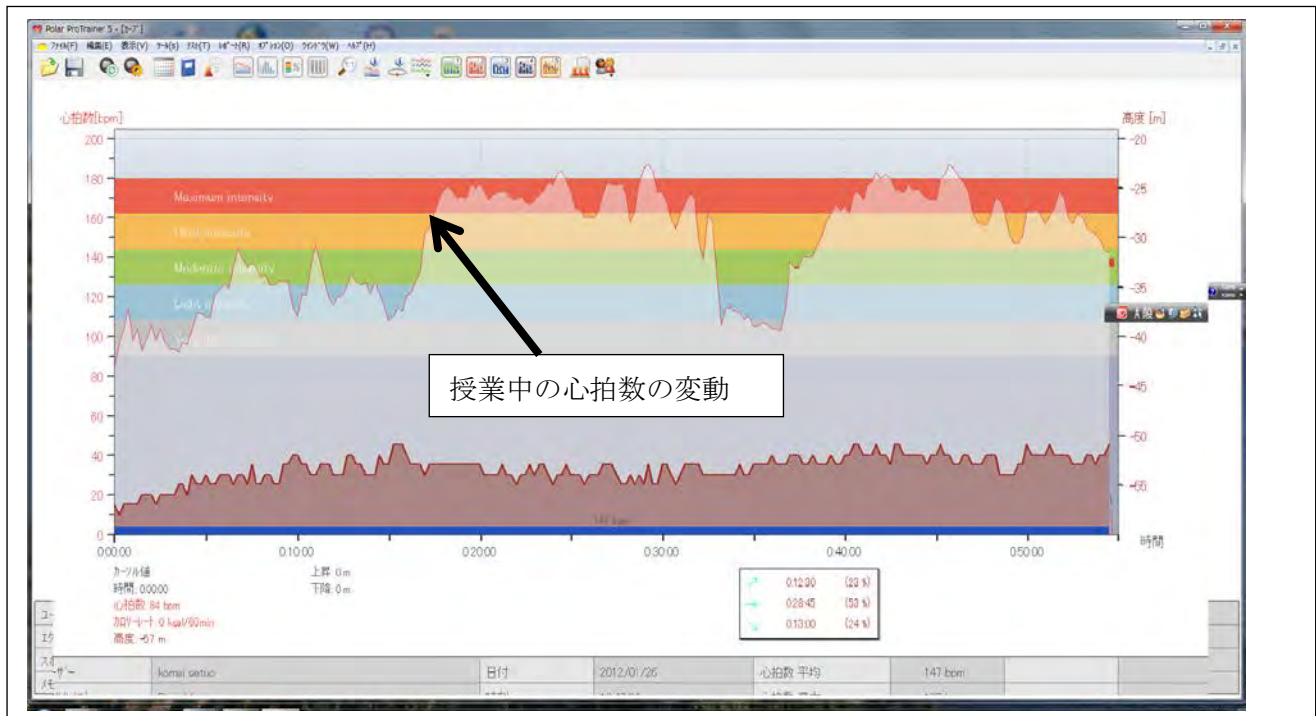


図 2

測定結果と課題

(1) 移動距離について

授業中の移動距離(図 1) は平均 2850mであり、平均移動速度は 2.69km/時間であった。また移動速度の最高値の平均は 20.5 k m/時間であった。

心拍数は一例ではあるが、平均 147 拍、最高心拍数は 187 拍を示し、ディスクゲームの運動強度は高強度であることが認められた(図 2)。

(2) ディスクゲームの運動特性

移動距離については平均 3 k m弱であり、また平均移動速度は 2.69km/時間と一般人の平均歩行速度(約 4 k m) よりも低く、驚くほどの運動量ではないが、その中身はダッシュ、ストップ動作、さらにはジョギング、歩行、静止状態などが含まれ、運動強度の著しい変化が認められた。また、心拍数の変動も高い水準で推移していた。したがって、ディスクゲーム(アルティメットゲーム)を運動強度から評価すると高強度運動に属すと考えられ、基礎体力の低い学生が選択する場合、十分検討する必要があると考えられる。

以上のことから運動種目を選択する際には自分の体力や技術によって種目を考慮し、選択する必要があると考えられる。

(3) 今後の課題

今後は他の屋外種目についても測定するとともに、室内種目についても順次測定したい。なお、移動距離については室内であるため、GPS が利用できないので他の方法を用いることを検討している。

1.2 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情副分科会長 林 翠芳（国際・地域連携センター）

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本事情Ⅰ」「日本事情Ⅱ」、第2学期に「日本語Ⅲ」「日本語Ⅳ」「日本語Ⅴ」「日本事情Ⅲ」「日本事情Ⅳ」が開講されている。

2011年度は教育力向上3カ年計画の2期目に差し掛かる節目であり、日本語・日本事情分科会ではFD活動と自己点検活動とを連動させながら、講習の受講と「5・15週目アンケート」を中心に活動を行いました。参加した講習会は以下の通りである。なお、授業アンケートの実施については、日本語・日本事情分科会自己点検評価部会の報告を参照されたい。

1. 秋季FDセミナー

「成績評価とフィードバック——評価の原則からルーブリック評価まで——」

日時：2011年9月16日（金）

参加者：林 翠芳（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

2. 全学FD講習会

「カリキュラム・アセスメントの手法と課題」

日時：2011年9月26日（月）

参加者：大塚 薫（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

3. 全学FDフォーラム

「キャンパスライフに埋め込まれた学習 何が、社会人として適応をもたらすのか」

日時：2012年1月25日（水）

参加者：林 翠芳（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

大塚 薫（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

以上

V 広報部会

広報部会長 玉木 尚之

1. 本年度広報部会の構成

部会長：玉木尚之（教育学部）

中澤純治（人文学部） 是永かな子（教育学部） 藤山亮治（理学部）

山脇京子（医学部） 齋 幸治（農学部）

事務：徳弘靖人・尾ノ上尚恵

2. 本年度部会の活動方針

広報誌「パイプライン」に関して昨年度実施した配布残部調査と学生アンケートを分析し、編集発行業務をどうすべきか検討し、HPの運用なども含めて部会の業務を再検討する。

3. 本年度部会の活動報告

3-1) 概要

広報誌「パイプライン」に関して昨年度実施した配布残部調査と学生アンケートを分析し、「パイプライン」の発行について改革案をまとめ、一部実施した。

第38号については、改革検討と平行編集発行であったため、配布方法の改善に止め、初年次科目での配布、メールによる発行・配置場所の周知を実施した。

第39号については、紙媒体による発行を取りやめ、電子化してホームページに掲載し、アーカイブ化することとした。記事内容に付いても一部簡素化や変更を実施した。

3-2) 部会議事と関連会議事項

・第1回部会 平成23年6月21日（火）9時～10時20分

1. 1. 平成22年度活動報告と引継課題

2. 業務のあり方についての検討

(1) 「パイプライン」学生アンケートの検討

(2) 「パイプライン」は共通教育広報に適切な内容となっているか

(3) 当面の編集発行の方針

※6月29日第3回常任委員会・9月10日第2回共通教育実施機構会議で報告

・第2回部会 平成23年12月15日 9時～10時20分

1. 「パイプライン」電子化について

2. 次年度からの「パイプライン」発行計画について

3. 平成24年度「パイプライン」第39号の編集について

4. 「パイプライン」第38号の配布状況について（報告）

※1月17日第12回常任委員会・ 月 日第 回共通教育実施機構会議で報告・審議

・他に随時メール会議で意見交換

3-3) 本年度の審議内容の概要

3-3-1) 「パイプライン」発行業務の検討について

- ・紙媒体は廃止し、電子化してホームページに掲載し、アーカイブ化する。発行後は、学生・教員にメールで通知する。
- ・発行回数は従来通り年2回。ただし、年度初めには読まれないことを考慮して4月半ば～下旬、及び11月とする。
- ・編集日程は、12月～1月と9～10月
- ・記事内容は、共通教育に関することに絞り、発行時期を考慮して履修情報は除く。
 - 4月：特集を「共通教育の意義」に固定し、小テーマを共通教育の各科目としてローテーションで取り上げる。各学部教員1名・学生各学部2名の記事。
 - 自己点検報告
 - 年度のトピック（あれば：主管、カリ編部会）
 - 11月：分科会特集（2分科会のローテーション）、教員の教養記事1名、FD報告、学生委員会

3-3-2) 「パイプライン」の発行について

- ・発行業務の点検作業と平行して、2回の編集発行を行った。
- ・第38号は、特集を「外国語科目」とし、従来通りの構成で編集発行した。ただし、配布方法を改善し、1年生には学問基礎論と医学部の専門科目で配布、他は配置後に場所をメールで通知した。
- ・第39号からは紙媒体を廃止し、電子化して、発行情報をメールで通知することとした。特集は「初年次科目」。他に、自己点検教科部会報告、広報部会の「パイプライン」の発行改善についての記事。

4. 次年度（以降）の課題

- ・電子化による発行の実施とホームページ管理の点検。
- ・次年度以降早い時期に、自己点検として読まれ方の調査を実施し、改善を検討する必要があるだろう。

VI カリキュラム等開発部会

1 カリキュラム等開発部会のまとめ

カリキュラム等開発部会長 石筒 寛(人文学部)

(1) 環境人材育成に関する教育プログラムの実施

○第1段階(1年生対象)

◇課題探求クラスター

- 「課題探求実践セミナー・地域協働入門Ⅰ」 (集中講義)
- 「課題探求実践セミナー・地域協働入門Ⅱ」 (集中講義)
- 「課題探求実践セミナー・地域協働入門Ⅲ」 (集中講義)
- 「課題探求実践セミナー・自律協働入門」 (集中講義)
- 「課題探求実践セミナー・国際協力入門」 (集中講義)
- 「環境を考える」 (1学期木4)
- 「身のまわりの科学」 (2学期金4)

◇基盤クラスター

- 「環境社会論入門」 (2学期火4)
- 「黒潮圏科学の魅力」 (1学期金1)
- 「アジア都市社会論入門」 (2学期金2)
- 「NPO入門」 (2学期木2)
- 「生態系への人為的インパクト」 (2学期水2)
- 「環境化学物質をどう考えるか」 (1学期火1)

○第2段階(1年生対象)

◇実践講義クラスター

- 「中山間地域の生活と環境」 (集中講義)

○第3段階(1年生対象)

◇インターンシップ事前学習クラスター

- 「地域協働企画立案」 (集中講義)
- 「CBI企画立案」 (集中講義)

○第4段階(2年生対象)

◇インターンシップ実習クラスター

- 「地域協働実習Ⅰ」 (集中講義)
- 「CBI実習Ⅰ～Ⅳ」 (集中講義)

◇インターンシップ事後学習クラスター

- 「地域協働自己分析」 (集中講義)
- 「CBI自己分析・環境コース」 (集中講義)

○第5段階(2年生対象)

◇環境フィールドクラスター

「環境フィールド実践」 (集中講義)

○第6段階(3年生対象)

◇社会協働クラスター

「社会協働実践」 (集中講義)

(2) 地域人材育成に関する教育プログラムの開発

高知県内の下記の地域(括弧内は想定される授業題目)において、関係者と打ち合わせを行い、学生の受け入れ方法、活動内容について検討した。

四万十市西土佐中組地区(課題探求実践セミナー・地域協働入門)

着ぐるみを活用した地域社会貢献の検討(課題探求実践セミナー・地域協働入門)

週末を活用したコミュニティラーニングの検討(中山間地域の生活と環境)

(3) 協働実践に関する授業の開発

協働実践活動に振り返り方法を習得するための授業「協働実践自己分析」を社会分野教養科目において開講した